

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 2018年4月1日
(第10期) 至 2019年3月31日

アサヒホールディングス株式会社

神戸市中央区加納町四丁目4番17号

(E21187)

目次

頁

表紙

第一部 企業情報	1
第1 企業の概況	1
1. 主要な経営指標等の推移	1
2. 沿革	4
3. 事業の内容	6
4. 関係会社の状況	8
5. 従業員の状況	10
第2 事業の状況	12
1. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	12
2. 事業等のリスク	13
3. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	15
4. 経営上の重要な契約等	19
5. 研究開発活動	20
第3 設備の状況	22
1. 設備投資等の概要	22
2. 主要な設備の状況	22
3. 設備の新設、除却等の計画	24
第4 提出会社の状況	25
1. 株式等の状況	25
(1) 株式の総数等	25
(2) 新株予約権等の状況	25
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	26
(4) 発行済株式総数、資本金等の推移	26
(5) 所有者別状況	27
(6) 大株主の状況	27
(7) 議決権の状況	28
(8) 役員・従業員株式所有制度の内容	29
2. 自己株式の取得等の状況	31
3. 配当政策	32
4. コーポレート・ガバナンスの状況等	33
(1) コーポレート・ガバナンスの概要	33
(2) 役員の状況	36
(3) 監査の状況	39
(4) 役員の報酬等	41
(5) 株式の保有状況	42
第5 経理の状況	45
1. 連結財務諸表等	46
(1) 連結財務諸表	46
(2) その他	98
2. 財務諸表等	99
(1) 財務諸表	99
(2) 主な資産及び負債の内容	107
(3) その他	107
第6 提出会社の株式事務の概要	108
第7 提出会社の参考情報	109
1. 提出会社の親会社等の情報	109
2. その他の参考情報	109
第二部 提出会社の保証会社等の情報	110

[監査報告書]

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月19日
【事業年度】	第10期（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
【会社名】	アサヒホールディングス株式会社
【英訳名】	Asahi Holdings, Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 東浦 知哉
【本店の所在の場所】	神戸市中央区加納町四丁目4番17号
【電話番号】	078（333）5633
【事務連絡者氏名】	企画部長 長合 邦彦
【最寄りの連絡場所】	東京都千代田区丸の内一丁目7番12号
【電話番号】	03（6270）1833
【事務連絡者氏名】	企画部長 長合 邦彦
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	国際会計基準				
	移行日	第7期	第8期	第9期	第10期
決算年月	2015年 4月1日	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上収益 (百万円)	—	119,352	106,828	115,797	128,669
税引前利益 (百万円)	—	5,868	1,751	13,410	13,405
親会社の所有者に帰属する 当期利益 (△は損失) (百万円)	—	2,867	△1,213	9,416	9,000
親会社の所有者に帰属する 当期包括利益 (百万円)	—	△54	△2,345	9,535	7,633
親会社の所有者に帰属する 持分 (百万円)	50,783	48,591	44,303	64,435	67,804
総資産額 (百万円)	105,195	101,599	88,976	131,484	160,272
1株当たり親会社所有者帰 属持分 (円)	1,551.34	1,490.56	1,359.02	1,627.20	1,723.16
基本的1株当たり当期利益 (△は損失) (円)	—	87.48	△37.24	270.77	228.14
希薄化後1株当たり当期利 益 (円)	—	87.48	△37.24	269.90	227.21
親会社所有者帰属持分比率 (%)	48.3	47.8	49.8	49.0	42.3
親会社所有者帰属持分当期 利益率 (%)	—	5.8	△2.6	17.3	13.6
株価収益率 (倍)	—	17.3	—	7.3	8.8
営業活動によるキャッシ ュ・フロー (百万円)	—	14,321	3,319	△13,397	△20,648
投資活動によるキャッシ ュ・フロー (百万円)	—	△1,936	△2,442	△2,829	△5,629
財務活動によるキャッシ ュ・フロー (百万円)	—	△6,473	△6,630	29,776	18,261
現金及び現金同等物の期末 残高 (百万円)	10,841	16,564	10,798	24,140	16,297
従業員数 (人)	2,080	2,005	1,961	1,928	2,042
(外、平均臨時雇用者数)	(970)	(852)	(761)	(702)	(613)

- (注) 1. 売上収益には、消費税等は含まれておりません。
 2. 株価収益率については、第8期は基本的1株当たり当期損失であるため記載しておりません。
 3. 第8期より国際会計基準（以下、IFRS）に基づいて連結財務諸表を作成しております。

回次	日本基準		
	第6期	第7期	第8期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月
売上高 (百万円)	111,417	118,473	107,005
経常利益 (百万円)	10,561	8,510	7,896
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失 (△) (百万円)	5,774	5,031	△4,065
包括利益 (百万円)	5,973	2,554	△5,733
純資産額 (百万円)	50,958	51,300	43,610
総資産額 (百万円)	104,877	103,589	87,210
1株当たり純資産額 (円)	1,542.82	1,560.21	1,337.78
1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額 (△) (円)	176.89	153.54	△124.70
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	—	—	—
自己資本比率 (%)	48.2	49.1	49.3
自己資本利益率 (%)	11.9	9.9	△8.7
株価収益率 (倍)	11.6	9.9	—
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	9,419	14,289	3,286
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△29,633	△1,900	△2,432
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	21,442	△6,473	△6,630
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	10,841	16,564	10,798
従業員数 (人)	2,080	2,005	1,961
(外、平均臨時雇用者数)	(970)	(852)	(761)

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、第6期から第7期は希薄化効果を有している潜在株式が存在しないため、第8期は1株当たり当期純損失金額であり、また、希薄化効果を有する潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 株価収益率については、第8期は1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。

4. 第8期の日本基準による諸数値につきましては、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査を受けておりません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第6期	第7期	第8期	第9期	第10期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
営業収益	(百万円)	6,690	6,865	6,183	7,903	8,429
経常利益	(百万円)	5,703	5,764	5,079	6,930	6,902
当期純利益又は当期純損失 (△)	(百万円)	5,674	5,670	△11,711	6,806	6,824
資本金	(百万円)	4,480	4,480	4,480	7,790	7,790
発行済株式総数	(株)	36,254,344	36,254,344	36,254,344	39,854,344	39,854,344
純資産額	(百万円)	44,726	48,214	34,533	52,241	54,782
総資産額	(百万円)	50,335	74,009	55,321	72,818	75,394
1株当たり純資産額	(円)	1,363.92	1,478.98	1,059.32	1,319.27	1,392.23
1株当たり配当額	(円)	60.00	60.00	60.00	63.00	120.00
(内1株当たり中間配当額)	(円)	(30.00)	(30.00)	(30.00)	(30.00)	(60.00)
1株当たり当期純利益金額又は 1株当たり当期純損失金額 (△)	(円)	173.83	173.01	△359.25	195.73	172.98
潜在株式調整後1株当たり当期 純利益金額	(円)	—	—	—	195.10	172.27
自己資本比率	(%)	88.7	65.1	62.4	71.7	72.7
自己資本利益率	(%)	13.3	12.2	△28.3	15.7	12.8
株価収益率	(倍)	11.8	8.8	—	10.1	11.6
配当性向	(%)	34.52	34.68	—	32.19	69.37
従業員数	(人)	41	54	56	50	54
(外、平均臨時雇用者数)	(人)	(—)	(1)	(1)	(—)	(2)
株主総利回り	(%)	126.4	97.7	131.0	132.8	141.2
(比較指標：配当込みTOPIX)	(%)	(130.7)	(116.5)	(133.7)	(154.9)	(147.1)
最高株価	(円)	2,191	2,376	2,279	2,599	2,434
最低株価	(円)	1,555	1,408	1,342	1,818	1,907

(注) 1. 営業収益には消費税等は含まれておりません。

2. 株価収益率については、第8期は1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。

3. 配当性向については、1株当たり配当額を1株当たり当期純利益金額で除して算定しております。
なお、第8期は1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。

4. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、第6期から第7期は希薄化効果を有している潜在株式が存在しないため、第8期は1株当たり当期純損失金額であり、また、希薄化効果を有する潜在株式が存在しないため記載しておりません。

5. 最高株価及び最低株価は東京証券取引所（市場一部）におけるものであります。

2 【沿革】

<当社設立以降の沿革>

年月	事項
2009年4月	アサヒプリテック㈱とジャパンウェイスト㈱との共同株式移転により、当社設立 東京証券取引所市場第一部上場
2009年12月	井尾ガラス㈱の事業を当社子会社であるジャパンウェイスト㈱の連結子会社であるJWガラスリサイクル㈱にて譲受ける
2010年8月	当社子会社であるジャパンウェイスト㈱がエコマックス㈱の株式取得
2011年6月	当社子会社であるアサヒプリテック㈱が㈱ウスタ製作所の株式取得
2011年8月	当社子会社であるジャパンウェイスト㈱が㈱共同化学の株式取得
2012年7月	当社子会社であるジャパンウェイスト㈱が㈱インターセントラルの株式取得
2012年10月	富士炉材㈱が㈱塩入建材を吸収合併
2014年3月	当社子会社である㈱インターセントラルが紘永工業㈱の株式取得
2014年7月	当社子会社であるジャパンウェイスト㈱が㈱フジ医療器の株式取得
2014年10月	当社子会社であるアサヒプリテック㈱が㈱ウスタ製作所を吸収合併
2014年12月	アサヒアメリカホールディングス㈱を設立
2015年3月	当社子会社であるアサヒアメリカホールディングス㈱がAsahi Refining Holdings UK Limitedおよびその子会社2社（Asahi Refining USA Inc.、Asahi Refining Canada Ltd.）を子会社化
2017年4月	当社子会社であるアサヒプリテック㈱が㈱共同化学を吸収合併
2018年4月	アサヒライフ&ヘルス㈱を設立 当社子会社であるジャパンウェイスト㈱がJWロジスティクス㈱を吸収合併
2019年1月	当社子会社であるアサヒアメリカホールディングス㈱がAsahi Refining Florida Inc.を設立
2019年4月	当社子会社であるジャパンウェイスト㈱が㈱イヨテック、エコマックス㈱を吸収合併

<ご参考 アサヒプリテック株式会社の株式移転までの沿革>

年月	事項
1964年4月	写真定着液廃液の回収、銀地金精製及び販売、写真薬品及び材料の販売を目的として、大阪市城東区に㈱朝日化学研究所を設立（資本金4百万円）
1973年12月	神戸市より産業廃棄物処理業の許可を写真関係の処理業者として全国で初めて受け、産業廃棄物処理業を開始
1983年11月	当社製銀地金がL. M. E.（ロンドン金属取引所）公認ブランドの認定を受ける
1984年8月	東京金取引所の会員としての認可を受ける
1992年4月	㈱佐藤貴金属の社員持分の全部を譲受ける
1994年11月	海外展開に向けマレーシアに現地法人“ASAHI G&S SDN. BHD.”（現・連結子会社）を設立
1997年4月	㈱九州アサヒ、㈱四国アサヒ、㈱北陸アサヒ、㈱佐藤貴金属、㈱ボンアンジュを吸収合併し「アサヒプリテック株式会社」に商号変更
1998年1月	神戸市中央区加納町四丁目4番17号に本社事務所を移転 神戸市東灘区魚崎浜町21番地に本店所在地を移転
1998年10月	当社製のパラジウム地金がロンドン・プラチナ・パラジウム・マーケット（L. P. P. M.）の指定ブランドとして認可
1999年7月	テクノセンターにおいて国際品質保証規格「ISO9002（現ISO9001）」の認証を取得
1999年10月	日本証券業協会に株式を店頭登録 日本金地金流通協会の正会員となる
2000年5月	テクノセンターにおいて国際環境マネジメントシステム規格「ISO14001」の認証を取得
2000年7月	当社製の銀地金がロンドン・ブリオン・マーケット・アソシエーション（L. B. M. A.）の指定ブランドとして認可
2000年9月	当社製のプラチナ地金がロンドン・プラチナ・パラジウム・マーケット（L. P. P. M.）の指定ブランドとして認可
2000年11月	東京証券取引所市場第二部上場

年月	事項
2001年7月	(株)三商と株式交換
	(株)大門と(株)エコマテリアルの株式取得
2002年3月	東京証券取引所市場第一部上場
2004年4月	日本ケミテック(株) (現・連結子会社) の株式取得
2005年4月	(株)塩入建材と株式交換
2006年1月	(株)イヨテック (現・連結子会社) と株式交換
2006年2月	錦興産(株)の株式取得
2006年9月	韓国の連絡事務所を「韓国アサヒプリテック株式会社」として現地法人化
2007年3月	東京都千代田区丸の内一丁目7番12号に東京本社を設置
2007年4月	錦興産(株)を吸収合併
2007年5月	(株)太陽化学 (現・連結子会社) と株式交換
2007年11月	(株)サニックスの事業の一部譲受けにより北九州事業所設置
2008年5月	完全子会社「ジャパンウェイスト株式会社」を設立
2008年9月	当社製の金地金がロンドン・ブリオン・マーケット・アソシエーション (L. B. M. A.) の指定ブランドとして認可
2008年10月	富士炉材(株) (現・連結子会社) の株式取得
2009年3月	株式移転により持株会社「アサヒホールディングス株式会社」の完全子会社となるため、上場廃止

3 【事業の内容】

当社グループは、純粋持株会社であるアサヒホールディングス株式会社（当社）とアサヒプリテック株式会社、ジャパンウェイト株式会社、アサヒアメリカホールディングス株式会社、アサヒライフ&ヘルス株式会社、他子会社19社で構成されており、次のとおり、貴金属事業、環境保全事業及びライフ&ヘルス事業を主たる事業としております。

(1) 貴金属事業

貴金属事業は、貴金属含有スクラップ等から、金・銀・パラジウム・プラチナ等の貴金属・希少金属をリサイクルし、販売することを主たる業務としております。

アサヒプリテック株式会社は国内において、電子材料分野、歯科材料分野、宝飾流通・製造分野、自動車触媒分野から集荷した貴金属・希少金属含有スクラップを、各地の工場にて回収・分離・精錬し、高純度の地金製品等として、商社、半導体・電子部品メーカー等に販売する事業、半導体・電子部品メーカー等で使用される製造機械装置の部品について貴金属剥離及び精密洗浄事業を行っております。

海外では、ASAHI G&S SDN. BHD. がマレーシア・シンガポール地域において、韓国アサヒプリテック株式会社が韓国において貴金属リサイクル事業を推進しております。また、アメリカ合衆国においてはAsahi Refining USA Inc. とAsahi Refining Florida Inc. が、カナダにおいてはAsahi Refining Canada Ltd. が、金・銀を中心とした貴金属の精錬・加工事業を行っております。

(2) 環境保全事業

環境保全事業は、産業廃棄物の収集運搬及び中間処理を主たる業務としております。

アサヒプリテック株式会社は、各業界の工場、印刷所、病院、学校、研究機関等から排出される、廃酸・廃アルカリ、廃油、汚泥、廃薬品、医療系感染性廃棄物等を処理・無害化しております。ジャパンウェイト株式会社は、各種産業廃棄物の収集運搬、中間処理及びリサイクルを行っております。JWケミテック株式会社は、主として工場から排出される廃液の収集運搬及び中間処理を行っております。株式会社イヨテックは、製造業への人材派遣等を業としており、製造現場から発生する廃棄物を処理する事業との連携を推進しております。株式会社太陽化学は、IT・エレクトロニクス・石油化学関連の企業から排出される工場廃液及び医療系感染性廃棄物等を処理しております。富士炉材株式会社は、自治体のゴミ焼却炉におけるダイオキシン・重金属を含む特別管理産業廃棄物処理や硝子製造用の溶炉改修・解体・煉瓦屑処理事業を営み、溶炉屑から耐火煉瓦を取り出し、マテリアルリサイクルや有害物処理を行っております。JWガラスリサイクル株式会社は、板ガラスやガラス瓶を回収し、選別破砕の上、高品位のガラスカレットとして再生・販売しております。エコマックス株式会社は、東北大学の環境保全センターの運営受託を行っております。

(3) ライフ&ヘルス事業

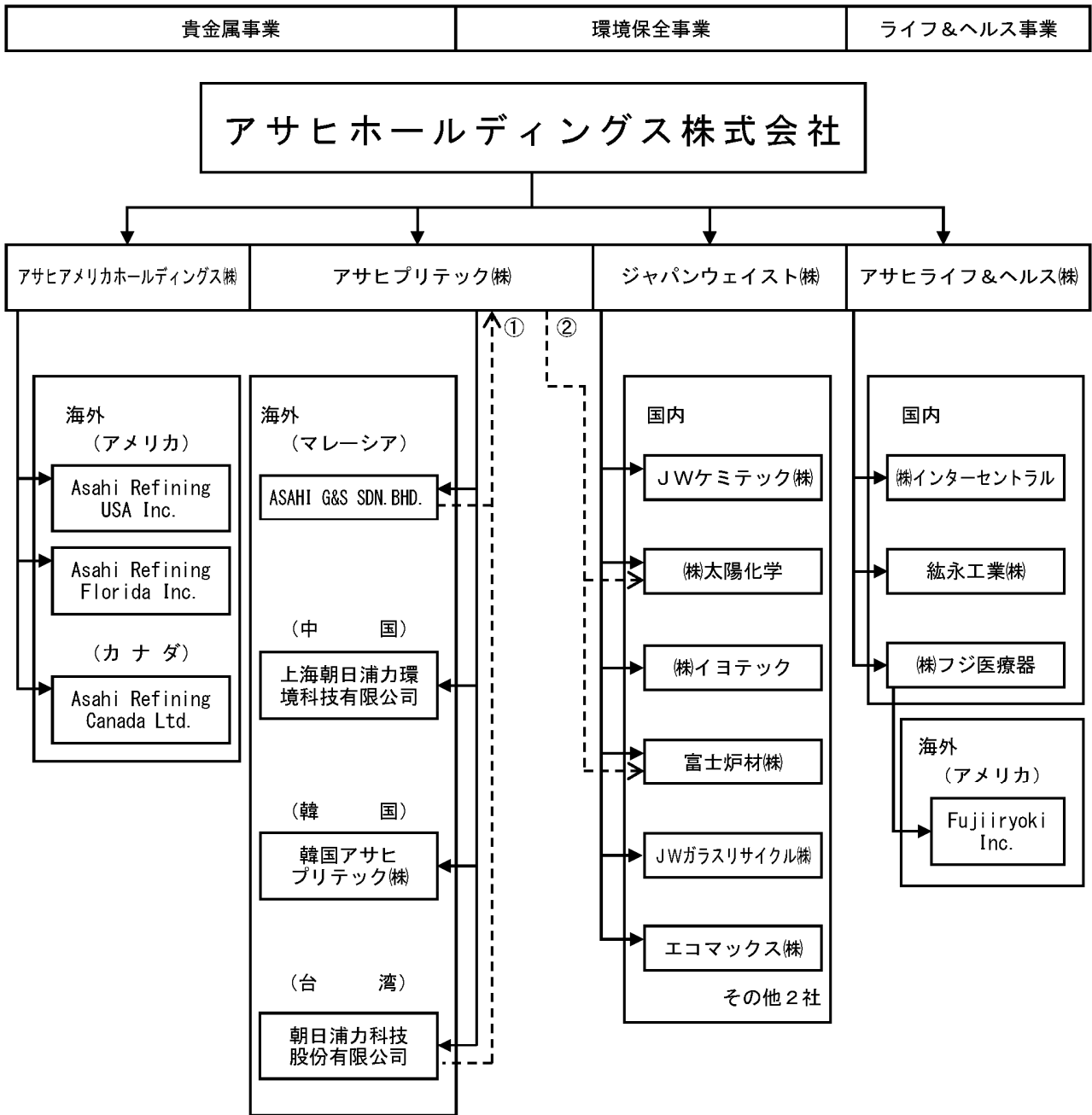
ライフ&ヘルス事業は、マッサージ器・補聴器等の健康機器等の製造及び販売、電気暖房器の製造及び販売、放射冷暖房システムの設計及び施工、防災設備の設計・施工を主たる業務としております。

株式会社フジ医療器は、「美と健康の総合メーカー」としてマッサージチェア、補聴器、家庭用電気治療器などの様々な薬事法認可製品を家電量販店、JA、地域家電販売店、通信販売会社などへ提供しております。株式会社インターセントラルは、電気暖房器の製造・販売及び放射冷暖房システムの設計・施工を行っております。効率的で柔らかな暖かさを提供する電気ヒーターや快適でクリーン、静かな環境を実現する放射冷暖房設備など、さまざまな製品を提供し、事務所・学校・病院・文化施設・商業施設や一般住宅等において採用されております。紘永工業株式会社は、防災・空調・衛生設備の設計及び施工等を行っており、公共施設・病院・文化施設及び商業施設等において数多くの施工実績をあげております。

なお、当社は、有価証券の取引等の規制に関する内閣府令第49条第2項に規定する特定上場会社等に該当しており、これにより、インサイダー取引規制の重要事実の軽微基準については連結ベースの数値に基づいて判断することとなります。

[事業系統図]

以上述べた事項を事業系統図によって示すと、次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は出資金（百万円）	主要な事業の内容	議決権の所有割合（%）	関係内容
(連結子会社) アサヒブリテック㈱ (注) 3. 4	神戸市東灘区	4,480	貴金属事業及び環境保全事業	100.0	当社と経営管理契約を締結している。 資金の貸付あり。 役員の兼務3名
ジャパンウエスト㈱	東京都千代田区	400	環境保全事業	100.0	当社と経営管理契約を締結している。 役員の兼務1名
JWケミテック㈱	埼玉県川口市	90	環境保全事業	100.0 (100.0)	
㈱太陽化学	鹿児島県鹿児島市	8	環境保全事業	100.0 (100.0)	
㈱イヨテック	兵庫県明石市	10	環境保全事業	100.0 (100.0)	
富士炉材㈱	東京都大田区	10	環境保全事業	100.0 (100.0)	
JWガラスリサイクル㈱	東京都江東区	30	環境保全事業	100.0 (100.0)	
エコマックス㈱	神奈川県高座郡寒川町	100	環境保全事業	100.0 (100.0)	
アサヒライフ&ヘルス㈱	東京都千代田区	10	ライフ&ヘルス事業	100.0	当社と経営管理契約を締結している。 役員の兼務1名
㈱インターセントラル	岩手県滝沢市	153	ライフ&ヘルス事業	100.0 (100.0)	
紘永工業㈱	横浜市戸塚区	30	ライフ&ヘルス事業	100.0 (100.0)	
㈱フジ医療器 (注) 5	大阪市中央区	30	ライフ&ヘルス事業	100.0 (100.0)	役員の兼務1名
ASAHI G&S SDN. BHD.	マレーシア ペナン市	250万マレーシア リングgit	貴金属事業	100.0 (100.0)	役員の兼務1名
上海朝日浦力環境科技有限公司	中国上海市	180万米ドル	貴金属事業	100.0 (100.0)	役員の兼務1名
韓国アサヒブリテック㈱	韓国忠州市	110億ウォン	貴金属事業	100.0 (100.0)	役員の兼務1名
朝日浦力科技股份有限公司	台湾新竹県	130百万台湾ドル	貴金属事業	100.0 (100.0)	役員の兼務1名
アサヒアメリカホールディングス㈱	東京都千代田区	10	貴金属事業	100.0	当社と経営管理契約を締結している。 役員の兼務2名
Asahi Refining USA Inc.	米国ユタ州	1千米ドル	貴金属事業	100.0 (100.0)	役員の兼務2名
Asahi Refining Canada Ltd.	カナダオンタリオ州	1カナダドル	貴金属事業	100.0 (100.0)	役員の兼務2名
Asahi Refining Florida Inc.	米国フロリダ州	1米ドル	貴金属事業	100.0 (100.0)	役員の兼務2名
その他3社					

- (注) 1. 「主要な事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載しております。
2. 議決権の所有割合の（ ）内は、間接所有割合で内数であります。
3. 特定子会社に該当しております。

4. アサヒブリテック(株)については、売上高（連結会社相互間の内部売上高を除く。）の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	(1) 売上高	88,464百万円
	(2) 経常利益	10,790百万円
	(3) 当期純利益	7,428百万円
	(4) 純資産額	24,188百万円
	(5) 総資産額	89,855百万円

5. (株)フジ医療器については、売上高（連結会社相互間の内部売上高を除く。）の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	(1) 売上高	18,266百万円
	(2) 経常利益	893百万円
	(3) 当期純利益	613百万円
	(4) 純資産額	4,178百万円
	(5) 総資産額	9,122百万円

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年3月31日現在

会社名称	セグメントの名称	従業員数 (人)
アサヒホールディングス(株)	全社 (共通)	54 (2)
アサヒプリテック(株)	貴金属事業及び環境保全事業	764 (注) 2 (74)
ジャパンウェイスト(株)	環境保全事業	108 (1)
JWケミテック(株)	環境保全事業	39 (6)
(株)太陽化学	環境保全事業	60 (6)
(株)イヨテック	環境保全事業	5 (19)
富士炉材(株)	環境保全事業	48 (1)
JWガラスリサイクル(株)	環境保全事業	38 (34)
エコマックス(株)	環境保全事業	7 (1)
アサヒライフ&ヘルス(株)	ライフ&ヘルス事業	— (—)
(株)インターセントラル	ライフ&ヘルス事業	61 (13)
紘永工業(株)	ライフ&ヘルス事業	36 (8)
(株)フジ医療器	ライフ&ヘルス事業	354 (437)
ASAHI G&S SDN. BHD.	貴金属事業	6 (1)
上海朝日浦力環境科技有限公司	貴金属事業	5 (—)
韓国アサヒプリテック(株)	貴金属事業	34 (3)
朝日浦力科技股份有限公司	貴金属事業	— (—)
アサヒアメリカホールディングス (株)	貴金属事業	— (—)
Asahi Refining USA Inc.	貴金属事業	122 (—)
Asahi Refining Florida Inc.	貴金属事業	107 (—)
Asahi Refining Canada Ltd.	貴金属事業	159 (3)
その他2社	環境保全事業	35 (4)
その他1社	ライフ&ヘルス事業	— (—)
合計		2,042 (613)

- (注) 1. 従業員数は就業人員数（当社グループからグループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含む。）であり、臨時雇用者数は（ ）内に年間の平均人員を外数で記載しております。
 なお、臨時雇用者には、パートタイマー及び一部の嘱託契約の雇用者を含み、派遣社員は除いております。
2. アサヒブリテック(株)の各部署におきましては、貴金属事業、環境保全事業の両セグメントの業務を行っており、セグメント別区分が困難でありますので、セグメント別従業員数は記載しておりません。
3. 全社（共通）として記載されている従業員数は、管理部門に所属しているものであります。

(2) 提出会社の状況

当社の従業員数は次のとおりであります。

2019年3月31日現在

従業員数（人）	平均年齢	平均勤続年数	平均年間給与（円）
54(2)	41才9ヶ月	4年5ヶ月	7,385,584

- (注) 1. 従業員数は就業人員数（当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含む。）であり、臨時雇用者数は（ ）内に年間の平均人員を外数で記載しております。
 なお、臨時雇用者には、パートタイマー及び一部の嘱託契約の雇用者を含み、派遣社員は除いております。
2. 平均年間給与は、基準外賃金及び賞与を含んでおります。

セグメントの名称	従業員数（人）
全社（共通）	54(2)

- (注) 1. 従業員数は就業人員数（当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含む。）であり、臨時雇用者数は（ ）内に年間の平均人員を外数で記載しております。
 なお、臨時雇用者には、パートタイマー及び一部の嘱託契約の雇用者を含み、派遣社員は除いております。
2. 全社（共通）として記載されている従業員数は、管理部門に所属しているものであります。

(3) 労働組合の状況

労働組合は結成されておりませんが、労使関係は円満に推移しており、特記すべき事項はありません。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営方針

当社グループは、貴金属事業、環境保全事業及びライフ&ヘルス事業の拡大により発展を遂げ、今後も社会貢献することで発展し続けていくことを目指しております。また、その過程においては、安定的な利益の確保と持続的な成長の維持との均衡を重視しており、これらを通して企業価値を高め、長期に亘って顧客、株主、従業員を含むステークホルダーの期待に応えることを基本方針としております。

(2) 目標とする経営指標

経営の基本方針に基づき、連結売上収益と連結営業利益、また株主重視の観点から、株主資本当期利益率(ROE)をそれぞれ重要な指標と考えております。

(3) 経営戦略等

当社グループは、当連結会計年度から始まる第8次中期経営計画(2018年4月～2021年3月)において「次代を支える新たな事業基盤の構築」、「情報処理技術を活かした生産性や働き方の革新」、「グループ全社員による新アサヒウェイの共有」を基本方針として、国内外の事業拡大にむけた成長戦略を推進するとともに、グループ全体の効率性向上を追求し、収益拡大に取り組みます。

計画の最終年度である2021年3月期の経営目標については下記のとおりであります。なお、配当については、連結純利益の50%以上をめどに、安定的かつ継続的な配当を実施します。

連結売上収益 1,400 億円

連結営業利益 160 億円

なお、以上の経営目標は、当社グループが現時点で入手可能な情報に基づき判断した見通しであり、実際の業績は今後の様々な要因によって変動することがあります。

(4) 経営環境

当連結会計年度におけるわが国経済は、雇用・所得環境の改善が続き、個人消費も回復の傾向が見られました。一方、相次ぐ自然災害や、米国・中国における貿易摩擦の問題、英国のEU離脱問題等により、世界経済は不確実性を抱えており、国内外共に先行きが不透明です。このような経営環境の変化を踏まえて、当社グループは収益改善に向けた取り組みを一層強化してまいります。

(5) 事業上及び財務上の対処すべき課題

① 貴金属事業セグメント

当社グループの中核の事業であり、以下の施策をもって収益の拡大を図ります。

- 処理・精製工程をより高品質・低コスト・高効率に改良する。
- 付加価値の高い貴金属製品の生産と販売を実現する。
- グローバルに事業を推進し、世界ナンバーワンブランドの地位を確立する。

② 環境保全事業セグメント

当社グループの安定成長事業として、成長とともに収益性を重視した経営を行います。

また、以下の施策をもって収益の拡大を図ります。

- リサイクルや処理困難廃棄物の処理能力を高め、他社を凌駕できるブランドを確立する。
- 適切な設備投資による事業拡大を行い、収益基盤を強化する。
- 全国に亘るグループ各社のネットワークを有機的に結びつけ、業容拡大を図る。

③ ライフ&ヘルス事業セグメント

2018年4月にセグメントを統括するアサヒライフ&ヘルス株式会社を設立いたしました。

同社をコアに、当セグメントの業務、管理の効率化を図り、当セグメント子会社間のシナジー効果を実現します。また、以下の施策をもって収益の拡大を図ります。

- 消費者ニーズを的確に把握し対応するため、ITを取り入れた顧客ニーズ取得と商品への展開を行い、国内のみならず、グローバルブランドとしての知名度を確立する。
- メイドインジャパンブランドを活かし、海外展開を加速する。

(6) 内部管理体制の整備・運用状況

① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方及びその施策の実施状況

当該事項につきましては、コーポレート・ガバナンスに関する報告書に記載しております。

② 内部管理体制の充実に向けた取組みの最近1年間における実施状況

当社グループ内で「内部統制推進会議」を組織し、内部統制のためのルールについて運用状況を確認・評価するなど、内部統制強化のための継続的な活動を行っております。

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

なお、以下の事項は、当該有価証券報告書提出日（2019年6月19日）現在において当社グループが判断したものです。

(1) 貴金属相場及び為替相場について

当社グループの「貴金属事業」における主力製品である貴金属及び希少金属は、国際市場で取引されており、その価格は、供給国及び需要国の政治経済動向、為替相場等、世界の様々な要因により変動しております。このため、当社グループは先渡取引等を通してヘッジし、リスクの軽減に取り組んでおりますが、貴金属相場及び為替相場の変動の幅により、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(2) 法規制について

当社グループが事業展開している国及び地域におきましては、事業の許可、輸出入・輸送規制、商取引、労働、租税、知的財産権、環境保全等のさまざまな法規制の適用を受けております。当社グループは、コンプライアンス重視の姿勢の下、法規制及び社会的ルールの遵守を徹底してまいります。万一、これらの法規制及び社会的ルールが遵守できなかった場合や、法規制及び社会的ルールの変化によって事業が制約を受ける等が発生した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

特に、「環境保全事業」においては、当社グループは、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」に基づく事業者として、各種の産業廃棄物の収集運搬及び処理を行っており、当該法律のほか「水質汚濁防止法」、「大気汚染防止法」、「下水道法」等の規制を受けております。また、当社グループは、産業廃棄物では収集運搬業許可を全ての都道府県・政令市で、処分業許可を12都道府県8政令市・中核市で、特別管理産業廃棄物では収集運搬業許可を全ての都道府県・政令市で、処分業許可を10都道府県7政令市・中核市で、取得しておりますが、許認可にあたっては、県または市条例、各種規制等の地方行政レベルでの規制の遵守が前提になっております。

環境問題への社会的関心の高まりから、これらの法的規制は強化される方向にありますが、その対策としての設備投資はもとより、処理施設の新設・移転・設備更新時には設置許可や変更許可が必要となります。それらの際には、近隣住民の同意が必要となる場合がありますが、その同意が困難な場合があります。以上により、これらの法的規制や社会動向等は、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(3) 経済変動について

当社グループの「貴金属事業」及び「環境保全事業」の主要需要業界のひとつである製造業に関しては、それぞれの業界の需要動向はさまざまな国や地域の経済状況の影響を受けます。景気後退等に伴ってそれらの業界の需要が減少した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。また、建設関連需要の大幅な減少や個人消費の落ち込み等によっても、「ライフ&ヘルス事業」が影響を受けることで、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(4) 事業環境について

当社グループの3つの事業セグメントである「貴金属事業」「環境保全事業」「ライフ&ヘルス事業」は、事業分野毎の関連する法規制や許認可等の変更により顧客ニーズが大きく変化する可能性や顧客企業の海外移転が想定以上に進展する可能性があります。また、業界再編など事業環境が大きく変化する可能性もあります。その結果によっては、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(5) 競合との競争激化について

当社グループの3つの事業セグメントである「貴金属事業」「環境保全事業」「ライフ&ヘルス事業」は、事業分野毎のさまざまな企業と競合しています。グループ各社は、営業努力をはじめ、技術・製品面やコスト対応面等での取り組みにより、事業分野毎の顧客ニーズへの確にお応えすることで、他社との競争に勝ち抜くべく努力を続けておりますが、競合他社との競争の激化により、各社の製品・サービスが厳しい価格競争にさらされる可能性があります。その結果によっては、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(6) 海外事業展開について

当社グループは、北米・アジア等の国及び地域において事業展開しておりますが、事業に不利な政治または経済的事象の発生、労働環境の違いによる労働争議等の発生、現地での適切な人材確保の不確実性、紛争・テロその他の要因による社会的混乱の可能性、ビジネスインフラ未整備による当該国及び地域当局からの不当な介入等のリスクが内在しています。これらの事態が発生した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(7) 企業買収等について

当社グループは、これまで企業買収によって事業内容及び事業規模の拡大を図ってきており、これからも当社グループにとって魅力ある案件に対しては前向きに取り組んで行く予定です。対象事業及び企業との統合効果を最大限に高めるために当社グループの事業戦略やオペレーションとの統合・融合を図りますが、期待した統合・融合効果をあげられない可能性があります。また対象事業及び企業が当初予定した業績を上げられず、経営成績の著しい悪化等により、のれんの減損が発生する可能性もあります。その結果、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(8) 自然災害・事故等について

大規模な地震や台風等の自然災害によって、当社グループの生産・物流・販売及び情報管理関連施設等の拠点に甚大な被害が発生する可能性があります。その場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。また当社グループでは、労働災害や設備事故の撲滅に向けて安全管理体制の強化ならびに定期的な災害・事故防止活動をおこなっておりますが、これらの発生を完全に防止または軽減できる保証はありませんので、重大な労働災害や設備事故等が発生した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(9) 新製品開発について

当社グループの「ライフ&ヘルス事業」は、「快適な生活と健康を維持する、人に優しい」機器や設備の提供を目指して、顧客ニーズを的確に捉え、当社技術を最適に活用することにより、魅力ある製品の開発を行っております。しかしながら、市場や業界ニーズに適切に対応できず、タイムリーな製品開発ができなかった場合には、将来の成長ならびに収益性を低下させ、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(10) 重要な知的財産権について

当社グループは、事業展開にとって重要な知的財産権を保護すべく、適切な管理を行っております。しかしながら、予期せぬ事態により外部に流出する可能性があり、また特定の地域においてはこれらの知的財産権を完全に保護することが不可能なため、第三者が当社グループの知的財産権を使用して類似製品・サービスを製造・販売することを効果的に防止できない可能性があります。その結果によっては、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(11) 製品品質保証・製造物責任について

当社グループは製品の品質保証体制に万全を期しておりますが、当社グループの生産した製品に起因する損害が発生した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(12) 環境保護について

当社グループは、「環境方針」に基づき地球環境保護に向けたさまざまな取り組みを継続しております。しかしながら環境汚染等の環境に関するリスクを完全に防止または軽減できる保証はありませんので、当社グループに起因する重大な環境汚染等が発生した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

(13) 訴訟・その他の法的手続きについて

当社グループが国内及び海外で事業展開する上では、訴訟その他の法的手続きの対象になる可能性があり、当社グループがその当事者となった場合には、多額の損害賠償金等が発生する可能性があります。その結果、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の概要は次のとおりであります。

① 財政状態及び経営成績の状況

a. 財政状態

当連結会計年度末の資産につきましては、前連結会計年度末に比べ28,788百万円増加し、160,272百万円となりました。これは主に、営業債権及びその他の債権が29,515百万円、有形固定資産が3,212百万円増加、現金及び現金同等物が7,842百万円減少したことによるものです。

負債につきましては、前連結会計年度末に比べ25,419百万円増加し、92,468百万円となりました。これは主に、借入金が増加したことによるものです。

資本につきましては、3,368百万円増加し、67,804百万円となりました。

b. 経営成績

当連結会計年度における、当社グループの各事業セグメントの状況は以下のとおりでした。

貴金属事業セグメント

国内および韓国・マレーシアにおける貴金属リサイクル分野の売上収益は前年同期比で増加しました。また、北米における貴金属精錬分野の売上収益は前年同期比で増加しました。これらの結果、本セグメントの売上収益および営業利益は前年同期比で増加しました。

環境保全事業セグメント

国内の廃棄物排出量は減少していますが、新規顧客の開拓に努めたことにより、本セグメントの売上収益は前年同期比で増加しました。また、当期に進めた写真感材事業撤退の費用は発生しましたが、本セグメントの営業利益は前年同期比で増加しました。

ライフ&ヘルス事業セグメント

首都圏を中心とした建設需要は引き続き高い水準にあり、消防設備や空調設備の売上収益は堅調に推移しました。しかし、健康機器の売上収益が前年同期比で減少し、本セグメントの売上収益および営業利益は前年同期比で減少しました。

以上の結果、当連結会計年度の業績は、売上収益128,669百万円（前年同期比12,871百万円増、11.1%増）、営業利益14,478百万円（前年同期比687百万円増、5.0%増）、税引前利益13,405百万円（前年同期比5百万円減、0.0%減）、当期利益9,000百万円（前年同期比453百万円減、4.8%減）、親会社の所有者に帰属する当期利益9,000百万円（前年同期比415百万円減、4.4%減）となりました。セグメント別の売上収益は、貴金属事業が87,804百万円（前年同期比13,211百万円増、17.7%増）、環境保全事業が17,197百万円（前年同期比962百万円増、5.9%増）、ライフ&ヘルス事業が23,709百万円（前年同期比1,326百万円減、5.3%減）となりました。

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前連結会計年度末より7,842百万円減少し、当連結会計年度末には16,297百万円となりました。当連結会計年度における各キャッシュ・フローは次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

当連結会計年度において営業活動の結果使用した資金は20,648百万円（前年同期比54.1%増）となりました。

これは主に、税引前利益13,405百万円（前年同期比0.0%減）、減価償却費及び償却費2,320百万円（前年同期比2.3%増）、営業債権及びその他の債権の増加29,497百万円（前年同期比37.7%増）、棚卸資産の増加2,720百万円（前年同期比46.8%減）、及び法人所得税の支払6,287百万円（前年同期比93.9%増）によるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

当連結会計年度において投資活動の結果使用した資金は5,629百万円（前年同期比99.0%増）となりました。

これは主に、有形固定資産の取得による支出5,552百万円（前年同期比101.0%増）によるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

当連結会計年度において財務活動の結果獲得した資金は18,261百万円（前年同期比38.7%減）となりました。

これは主に、長短借入金の純増加額22,635百万円（前年同期比14.2%増）、配当金の支払額3,666百万円（前年同期比87.4%増）及び自己株式の取得による支出744百万円によるものであります。

③ 生産、受注及び販売の実績

当社グループの生産・販売品目は広範囲かつ多種多様であり、同種の製品であっても、その容量、構造、形式等は必ずしも一様ではなく、また受注生産形態をとらない製品も多く、セグメントごとに生産規模及び受注規模を金額あるいは数量で示すことはしていません。

このため生産、受注の実績については、「① 財政状態及び経営成績の状況」におけるセグメントの業績に関連付けて示しております。

販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額（百万円）	前年同期比（％）
貴金属事業	87,804	117.7
環境保全事業	17,156	106.1
ライフ&ヘルス事業	23,708	94.7
合計	128,669	111.1

(注) 1. 最近2連結会計年度の主要な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は、次のとおりであります。

2. セグメント間の取引については相殺消去しております。

相手先	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
	金額（百万円）	割合（％）	金額（百万円）	割合（％）
Varinor SA	11,554	10.0	19,329	15.0
田中貴金属工業株	12,478	10.8	14,077	10.9

3. 上記金額には消費税等は含まれておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

文中の将来に関する事項は、当該有価証券報告書提出日（2019年6月19日）現在において判断したものであります。

① 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」第93条の規定により国際会計基準に基づき作成されており、財政状態及び経営成績に関する以下の分析が行われております。

当社経営陣は、連結財務諸表の作成に際し、決算日における資産・負債の報告数値及び偶発資産・負債の開示並びに報告期間における収入・費用の報告数値に影響を与える見積りを行っております。具体的には、貸倒引当金、投資の減損等が該当しますが、いずれも適正に見積っております。

② 当連結会計年度の経営成績の分析

当連結会計年度の売上収益は128,669百万円（前年同期比11.1%増）、営業利益は14,478百万円（前年同期比5.0%増）、税引前利益は13,405百万円（前年同期比0.0%減）、親会社の所有者に帰属する当期利益は9,000百万円（前年同期比4.4%減）となり、目標として掲げていた営業利益140億円を超え、2期連続して過去最高の業績となりました。当社が経営効率化の指標としている株主資本当期利益率(ROE)は13.6%となりました。

なお、セグメント別の分析につきましては、(1) 経営成績等の状況の概要に記載のとおりであります。

③ 経営成績に重要な影響を与える要因について

当社グループは貴金属事業において、貴金属及び希少金属を扱っており、貴金属相場及び為替相場の変動による影響を受ける可能性があります。なお、取扱製品を多様化すること等により、リスク軽減に努めております。

④ 戦略的現状と見通し

貴金属事業においては、世間一般の資源循環ニーズの高まりにより、自らの役割の重要性を認識し、新たな事業機会の活用、新規顧客の開拓を通して、引き続き成長性の確保と収益性の向上に努めております。

環境保全事業においては、多様な産業廃棄物の適正処理が求められる市場において、アサヒホールディングスグループとして顧客ニーズに幅広く対応できる「ワン・ストップ」体制を志向し、顧客からの信頼をますます高めつつ、高付加価値の事業展開を推進しております。

ライフ&ヘルス事業においては、「快適な生活と健康を維持する機器及び設備等の提供」をテーマにこの分野へ積極的に投資するとともに人材育成を図り、新たな安定した収益基盤を形成します。

⑤ 資本の財源及び資金の流動性についての分析

当社グループは、事業活動のための適切な資金確保及び適切な流動性の維持を図るにあたり、営業活動で得られた資金により設備投資の資金をまかなうことを基本方針としています。主なキャッシュ・フローの状況は以下のとおりであります。

当連結会計年度において営業活動の結果使用した資金は20,648百万円となりました。

これは主に、税引前利益13,405百万円と減価償却費及び償却費2,320百万円、営業債権及びその他の債権の増加額、棚卸資産の増加額及び法人所得税の支払額によるものであります。

当連結会計年度において投資活動の結果使用した資金は5,629百万円となりました。

これは主に、有形固定資産の取得による支出5,552百万円等によるものであります。

当連結会計年度において財務活動の結果獲得した資金は18,261百万円となりました。

これは主に、長短借入金の純増加額22,635百万円、配当金の支払額3,666百万円及び自己株式の取得による支出744百万円によるものであります。

以上の結果、現金及び現金同等物の期末残高は16,297百万円となり、前連結会計年度末より7,842百万円減少しました。

当社グループは、現金及び現金同等物、その他の流動性資産の水準から、十分な流動性を確保していると考えておりますが、この資金を効率的な拡大再生産に振り向けていくことが経営課題であると認識しております。

なお、当社グループは、現在取引している金融機関と良好な関係を築いております。

(3) 経営成績等の状況の概要に係る主要な項目における差異に関する情報

IFRSにより作成した連結財務諸表における主要な項目と日本基準により作成した場合の連結財務諸表におけるこれらに相当する項目との差異に関する事項

(のれんの償却)

日本基準においては、のれんを定期的に償却しておりましたが、IFRSでは移行日以降の償却を停止しております。この影響により、当連結会計年度にて、IFRSでは日本基準に比べて、販売費及び一般管理費が533百万円減少しております。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

(1) 研究開発活動の方針

当社グループでは、各事業セグメントにおける競争力を高めるためにコストダウンや市場ニーズに応じた新技術・新商品の開発に積極的に取り組んでいます。

貴金属事業においては、北米におけるプライマリー原料と日本を含むアジアを中心とするセカンダリー原料からの貴金属精製に関して、組成分析から製品化までの一貫したプロセスの効率向上や新技術の開発を行い、持続可能な循環型社会の形成を目指しています。また、環境保全事業においては、日本国内の産業廃棄物の無害化や資源化に関して、処理コスト低減や新技術の開発を行い、地球環境保全への貢献を目指しています。さらに、ライフ&ヘルス事業においては、マッサージチェアや暖房機器を中心とした快適な生活と健康を維持するための機器開発を行い、高齢化社会への対応と快適な暮らしの維持を目指しています。

(2) 研究開発活動の体制

当社グループの研究開発活動は、主にアサヒプリテック株式会社テクノセンターが担っています。同センターでは、新しい処理技術や製品および分析技術の開発を担当すると共に、関連する設備の設計や改善・改良および保守をも担当しています。さらに、各グループ会社との情報交換・共有化を図りながら、さまざまな技術課題を抽出してその解決に当たっています。また、技術情報の収集・管理や知的財産の保護および新規事業を含めた企画・開発についてもテクノセンターが中心となって各グループ会社と連携をとりながら、大学や研究所等の外部機関も積極的に活用し効率的に推進しています。

(3) 研究開発活動の目的、主要課題、研究成果及び研究開発費

当社グループの研究開発活動は、コストダウン、製造期間短縮、品質向上、環境対策、安全性向上などの各種改善、および新商品の提供を目的として、

- ① 貴金属・希少金属の回収・分離・精製に関する技術
 - ② 貴金属評価のための分析技術
 - ③ 貴金属製品および製造技術
 - ④ 有害物質の拡散防止および無害化に関する技術
 - ⑤ 生活と健康・福祉機器に関する技術
- 等の開発を行っています。

主要課題と研究成果は次のとおりです。

< 貴金属事業 >

・ 貴金属精製技術の開発

北米で実施しているプライマリー原料処理に対しては主に乾式貴金属精製技術の開発を行い、日本を中心にアジアで実施しているセカンダリー原料処理においては主に湿式貴金属精製技術の開発を進めています。また、乾式および湿式の両精製技術を融合させることによって、あらゆる原料に対応できる効果的な貴金属精製技術の確立を目指しています。当連結会計年度においては、北米におけるプライマリー原料の貴金属精錬プロセスで発生する副産物からのセレン (Se) 回収技術の開発を行いました。

・ 貴金属剥離技術の開発

半導体やLED産業の製造で使用する部材・治具等の表面に付着した貴金属を安全かつ確実に回収するために、化学剥離技術および物理剥離技術の開発を進めています。

・ 貴金属分析技術の開発

お客様との取引を正確かつ迅速に行うために、X線や誘導結合プラズマ発光分析(ICP)を用いた分析技術の開発を進めています。当連結会計年度においては、Asahi Refining USA Inc. 及びAsahi Refining Canada Ltd. 社も含めた貴金属分析技術の高度化を図りました。

< 環境保全事業 >

・ 産業廃棄物の処理技術および資源回収技術の開発

当社グループ全体で回収される産業廃棄物の適正処理技術と資源回収技術を開発しています。当連結会計年度においては、アサヒプリテック株式会社北九州事業所の新規焼却炉新設に関し、2020年度の竣工に向け建設を進めています。

< ライフ&ヘルス事業 >

・ 次世代マッサージチェアの開発

株式会社フジ医療器では、現在販売しているマッサージチェアの商品ラインアップと並行して、次世代機種となる製品の開発に取り組んでいます。最先端のセンシング技術や制御技術を取り入れ、これまでの機種には見られなかった新しいコンセプトの新型機を目指しています。当連結会計年度においては、AI技術を搭載したマッサージチェア「サイバーリラックスAS-2000」の販売を開始しました。

当連結会計年度における研究開発費は454百万円です。なお、研究開発費については、基礎研究分野にかかわる費用をセグメント別に関連づけることが困難であるため、その総額を記載しています。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度における設備投資額は5,709百万円となりました。当社グループにおける主な内容は、貴金属事業においては、アサヒブリテック株式会社及びAsahi Refining Florida Inc.の工場設備への投資であります。

環境保全事業においては、JWケミテック株式会社の工場設備への投資であります。

ライフ&ヘルス事業においては、株式会社フジ医療器の工場設備への投資であります。

また、固定資産除売却損は106百万円となりました。当社グループにおける主な内容は、株式会社フジ医療器の設備売却であります。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

該当事項はありません。

(2) 国内子会社

2019年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額					従業員 数(人)
				建物及び 構築物 (百万円)	機械装置 及び運搬 具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	その他 (百万 円)	合計 (百万円)	
アサヒブリテック(株)	神戸本社、東京本社	貴金属事業 環境保全事業	統括業務施設 (注) 2	5	71 [71]	—	364	441	23 (3)
	テクノセンター (神戸市西区)	貴金属事業	研究開発施設 生産設備	57 <446>	116	— <975> (7,189)	59	233 <1,422>	65 (9)
	北関東事業所 (埼玉県北葛飾 郡杉戸町)	貴金属事業 環境保全事業	営業・生産・そ の他の設備	69 <312>	76	— <644> (5,801)	5	152 <956>	103 (7)
	阪神事業所 (兵庫県尼崎市)	貴金属事業 環境保全事業	営業・生産・そ の他の設備	489 <143>	151	— <1,516> (13,791)	11	651 <1,660>	59 (7)
	神戸事業所 (神戸市東灘区)	貴金属事業 環境保全事業	営業・生産・そ の他の設備	433 <74>	22	— <886> (10,161)	116	572 <960>	92 (6)
	四国事業所 (愛媛県西条市)	貴金属事業 環境保全事業	営業・生産・そ の他の設備	50 <557>	125	— <752> (18,639)	40	217 <1,310>	60 (9)
	福岡事業所 (福岡県古賀市)	貴金属事業 環境保全事業	営業・生産・そ の他の設備	249 <238>	91	— <248> (6,508)	14	355 <486>	35
	北九州事業所 (北九州市門司 区)	環境保全事業	営業・生産・そ の他の設備	479 <44>	77	337 <270> (36,163)	1,026	1,920 <315>	65 (2)
	営業所	貴金属事業 環境保全事業	営業・生産・そ の他の設備	1,462 <486>	69	1,517 <1,187> (52,078)	26	3,076 <1,674>	262 (31)
ジャパンウェイ スト(株)	横浜事業所 (横浜市鶴見区)	環境保全事業	産業廃棄物処理 設備	456	336	268 (3,499)	53	1,115	108 (1)
JWケミテック	本社工場 (埼玉県川口市)	環境保全事業	産業廃棄物処理 設備	738	112	1,688 (36,310)	31	2,571	39 (6)
(株)太陽化学	本社工場 (鹿児島県鹿児島 市)	環境保全事業	産業廃棄物処理 設備	734	1,173	613 (41,088)	29	2,551	60 (6)
富士炉材(株)	本社工場 (東京都大田区)	環境保全事業	溶炉関連処理設 備	17	14	335 (22,932)	4	371	48 (1)
JWガラスリサイ クル(株)	本社工場 (東京都江東区)	環境保全事業	ガラスリサイク ル設備	219	347	1,062 (16,698)	8	1,637	38 (34)
(株)インターセン トラル	本社工場 (岩手県滝沢市)	ライフ&ヘルス事業	空調機器製造設 備	121	1	221 (37,736)	34	378	61 (13)
紘永工業(株)	本社他 (横浜市戸塚区)	ライフ&ヘルス事業	事務所施設	22	4	60 (156)	23	110	36 (8)
(株)フジ医療器	本社他 (大阪市中央区)	ライフ&ヘルス事業	事務所施設	748	7	1,280 (158,567)	295	2,330	354 (437)

(注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具器具備品及びソフトウェアであり、建設仮勘定を含んでおります。

2. 建物の一部を連結会社以外から賃借しており、賃借料は148百万円(年額)であります。

3. 上記中< >書は、外書で提出会社から賃借中のものであります。

4. 上記中[]書は、内書で賃借中のものであります。

5. 従業員数の()は、臨時雇用者数を外書しております。

(3) 在外子会社

2019年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額					従業員 数(人)
				建物及び 構築物 (百万円)	機械装置 及び運搬 具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
ASAHI G&S SDN. BHD.	本社工場 (マレーシアペナ ン市)	貴金属事業	生産設備	33	8	—	0	42	6 (1)
上海朝日浦力環 境科技有限公司	本社工場 (中国上海市)	貴金属事業	生産設備	16	2	—	3	22	5 (—)
韓国アサヒプリ テック(株)	本社工場 (韓国ソウル市)	貴金属事業	生産設備	745	56	163 (14,693)	3	968	34 (3)
Asahi Refining USA Inc.	本社工場 (米国ユタ州)	貴金属事業	生産設備	276	883	30 (27,000)	312	1,503	122 (—)
Asahi Refining Florida Inc.	本社工場 (米国フロリダ州)	貴金属事業	生産設備	951	1,686	105 (9,712)	86	2,830	107 (—)
Asahi Refining Canada Ltd.	本社工場 (カナダオンタリ オ州)	貴金属事業	生産設備	1,582	1,168	61 (58,100)	174	2,986	159 (3)

- (注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具器具備品及びソフトウェアであり、建設仮勘定を含んでおります。
2. 従業員数の()は、臨時雇用者数を外書しております。

3 【設備の新設、除却等の計画】

設備投資につきましては、中期的な事業展開や投下資本利益率等を総合的に勘案して実施し、事業の安定と成長の実現につなげております。

重要な設備の新設、除却等の計画は、以下のとおりであります。

- (1) 重要な設備の新設
該当事項はありません。
- (2) 重要な設備の改修
該当事項はありません。
- (3) 重要な設備の除却
該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	129,000,000
計	129,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2019年3月31日)	提出日現在発行数(株) (2019年6月19日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	39,854,344	39,854,344	東京証券取引所 市場第一部	単元株式数 100株
計	39,854,344	39,854,344	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増 減額 (百万円)	資本準備金残 高 (百万円)
2017年12月4日 (注) 1	2,720,000	38,974,344	2,500	6,981	2,500	8,554
2018年1月9日 (注) 2	880,000	39,854,344	809	7,790	809	9,364

(注) 1. 有償一般募集(ブックビルディング方式による募集)

発行価格 1,918円
発行価額 1,838.88円
資本組入額 919.44円
払込金総額 5,001百万円

(注) 2. 有償第三者割当 (オーバーアロットメントによる売出しに関連した第三者割当増資)

発行価格 1,918円
資本組入額 919.44円
割当先 大和証券株式会社

(5) 【所有者別状況】

2019年3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	30	38	106	178	13	15,118	15,483	—
所有株式数（単元）	—	120,697	10,172	27,845	85,573	47	153,663	397,997	54,644
所有株式数の割合（%）	—	30.33	2.56	7.00	21.50	0.01	38.61	100	—

（注） 自己株式33,387株は「個人その他」に333単元、「単元未満株式の状況」に87株を含めて記載しております。
 なお、自己株式33,387株は株主名簿記載上の株式数であります。

(6) 【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数（千株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合（%）
日本トラスティ・サービス信託銀行(株)（信託口）	東京都中央区晴海1丁目8-11	4,050	10.17
日本マスタートラスト信託銀行(株)（信託口）	東京都港区浜松町2丁目11番3号	2,747	6.90
(株)テラエンタープライズ	兵庫県芦屋市船戸町11-9	1,150	2.89
寺山 満春	兵庫県芦屋市	887	2.23
STATE STREET BANK AND TRUST COMPANY 505025 （常任代理人 株式会社みずほ銀行決済営業部）	P.O. BOX 351 BOSTON MASSACHUSETTS 02101 U.S.A. （東京都港区港南2丁目15-1 品川インターシティA棟）	843	2.12
寺山 正道	兵庫県芦屋市	802	2.01
GOVERNMENT OF NORWAY （常任代理人 シティバンク、エヌ・エイ東京支店 セキュリティーズ業務部）	BANKPLASSEN 2, 0107 OSLO 1 OSLO 0107 NO （東京都新宿区新宿6丁目27番30号）	765	1.92
アサヒ従業員持株会	兵庫県神戸市中央区加納町4丁目4番17号	733	1.84
日本トラスティ・サービス信託銀行(株)（信託口5）	東京都中央区晴海1丁目8-11	726	1.82
(株)K&M	兵庫県芦屋市船戸町11-9	700	1.76
計	—	13,407	33.67

（注）上記日本トラスティ・サービス信託銀行(株)、日本マスタートラスト信託銀行(株)の所有株式数は、全て信託業務に係る株式数であります。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2019年3月31日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	普通株式 33,300	—	—
完全議決権株式 (その他)	普通株式 39,766,400	397,664	—
単元未満株式	普通株式 54,644	—	—
発行済株式総数	39,854,344	—	—
総株主の議決権	—	397,664	—

(注) 「完全議決権株式 (自己株式等)」欄には、株式付与ESOP信託口および役員報酬BIP信託口が所有する当社株式は、上記自己保有株式に含まれておりません。

② 【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数 (株)	他人名義所有株式数 (株)	所有株式数の合計 (株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合 (%)
アサヒホールディングス(株)	神戸市中央区加納町四丁目4番17号	33,300	—	33,300	0.08
計	—	33,300	—	33,300	0.08

(注) 株式付与ESOP信託口および役員報酬BIP信託口が所有する当社株式は、上記自己保有株式に含まれておりません。

(8) 【役員・従業員株式所有制度の内容】

① 業績連動型株式報酬制度の内容

イ. 業績連動型株式報酬制度の概要

当社は、2015年6月16日開催の第6期定時株主総会において、当社および当社子会社（以下「BIP対象会社」という。）の取締役（社外取締役、非常勤取締役および監査等委員を除く。以下「対象取締役」という。）を対象に、「業績連動型株式報酬BIP信託」（以下「BIP信託制度」という。）を導入することを決議し、また、2018年6月19日開催の第9期定時株主総会において、BIP信託制度の継続ならびに一部改定を決議しております。

BIP信託制度は、BIP対象会社の対象取締役に、業績目標の達成度に応じた株式を報酬として交付する内容であり、当社グループの業績向上と企業価値増大への貢献意欲を高めることを目的としております。

ロ. 対象取締役に取得させる予定の株式の総数

対象期間：2019年3月期から2021年3月期まで

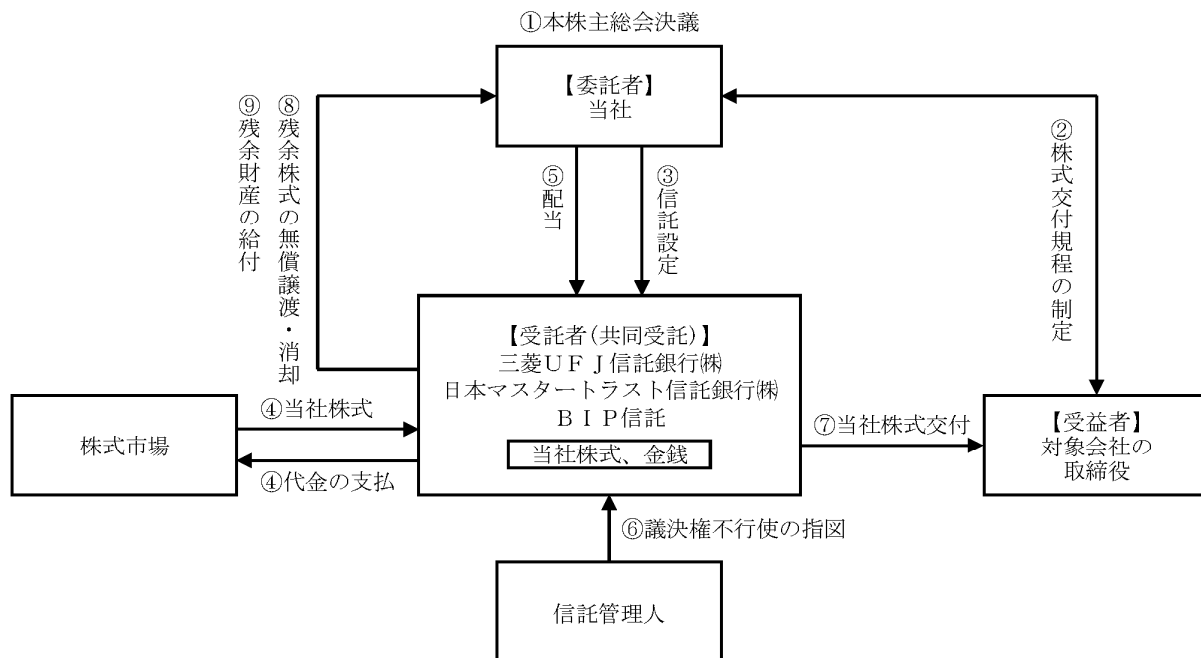
BIP対象会社の上限 120,000株

うち、当社の上限 81,000株

ハ. BIP信託制度による受益権その他の権利を受けることができる者の範囲

一定要件を充足するBIP対象会社の対象取締役

当該役員報酬BIP信託契約の仕組みは以下のとおりであります。



② 株式付与ESOP信託制度の内容

イ. 株式付与ESOP信託制度の概要

当社は、2015年6月16日の取締役会において、「株式付与ESOP信託」（以下「ESOP信託制度」という。）を導入することを決議し、また、2018年5月8日の取締役会において、ESOP信託制度の継続ならびに一部改定を決議しております。

ESOP信託制度は、当社および当社の一部子会社（以下「ESOP対象会社」という。）の従業員（以下「対象従業員」という。）に対し、業績への貢献度等に応じて株式を交付する内容であり、当社グループの業績向上と企業価値増大への貢献意欲を高めることを目的としております。

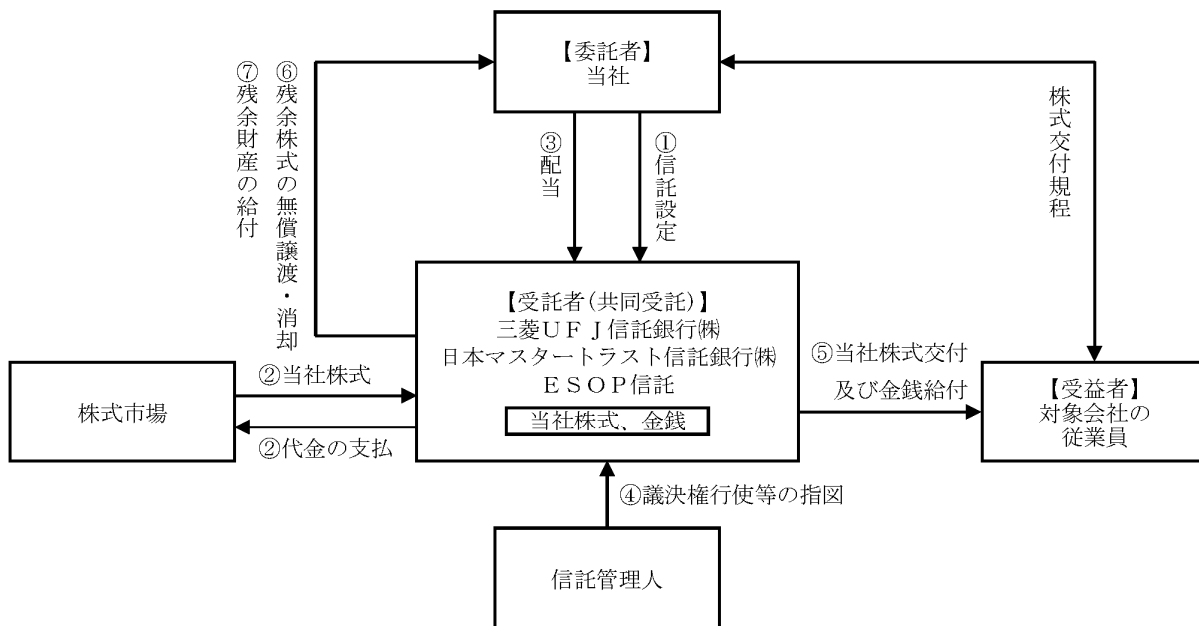
ロ. 対象従業員に取得させる予定の株式の総数

対象期間：2019年3月期から2021年3月期まで
未定

ハ. ESOP信託制度による受益権その他の権利を受けることができる者の範囲

一定要件を充足するESOP対象会社の対象従業員

当該株式付与ESOP信託契約の仕組みは以下のとおりであります。



2 【自己株式の取得等の状況】

(株式の種類等) 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
当事業年度における取得自己株式	100	222,100
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
保有自己株式数 (注)	33,387	—	33,387	—

(注) 当期間における保有自己株式には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社は、株主に対する利益還元を最重要課題の一つとして認識しており、連結純利益の50%以上をめどに、安定的かつ継続的に配当することを基本方針としております。

当社の剰余金の配当は、中間配当及び期末配当の年2回を基本的な方針としており、配当の決定機関は、取締役会であります。

当事業年度の期末配当につきましては、上記の方針の下、1株あたり120円（うち中間配当60円）を実施することを決定いたしました。

当社は、株主総会の決議によらず、取締役会決議により剰余金の配当等を行うことができる旨を定款に定めております。

なお、第10期の剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2018年10月25日 取締役会決議	2,389	60
2019年5月8日 取締役会決議	2,389	60

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

コーポレート・ガバナンスを確立し有効に機能させることは、企業の社会的責任であるとともに、経営の効率性や透明性を高め持続的な企業価値向上に資するものです。当社グループは、株主・取引先・社員・地域社会等さまざまなステークホルダーからの信頼に応えるコーポレート・ガバナンスを構築します。上場企業としての社会的使命と責任を果たすとともに、コンプライアンスを重視しつつ経営環境の変化に迅速に対応できる「コーポレート・ガバナンス体制」を整備し、持続的な企業価値の向上を目指しています。

② 企業統治の体制の概要及び当社体制を採用する理由

当社は、社外取締役を過半数とする監査等委員会を設置し、財務、法律、経営等の分野で専門的な知見を有する社外取締役を含む監査等委員である取締役が、適法性監査だけでなく妥当性監査を行います。当社は、取締役会の監督機能ならびにコーポレート・ガバナンス体制の強化とともに、経営の健全性と透明性の向上を図ってまいります。

(取締役会)

取締役会は、取締役8名（うち社外取締役3名、4-(2)-①参照）で構成され、経営の基本方針、計画、戦略、法令で定められた事項、その他経営に関する重要事項を審議・決定するとともに、当社グループの業務執行を厳正に監督しております。取締役会は、原則として年7回定時開催するほか、必要に応じて随時開催しております。なお、会社と社外取締役との間に特別の利害関係はありません。

(グループ事業執行会議)

グループ事業執行会議は、グループ各部門の執行責任者である業務執行取締役（寺山満春、東浦知哉、小島周、中西広幸）および関係会社取締役（奥村恵一、大槻利幸）で構成され、新規事業や投融资等に関して迅速かつ機動的に審議・決定を行うとともに、当社グループの事業計画の進捗の確認、必要に応じて対応策等の審議を行っております。また、取締役会専決事項についても、重要なものについては事前にグループ事業執行会議において審議し、戦略的意思決定に係る審議の充実を図っております。なお、グループ事業執行会議は毎月1回定時開催するほか、必要に応じて随時開催しております。

(監査等委員会)

当社は、監査等委員会を設置しており、監査等委員会は取締役4名（うち社外取締役3名、4-(2)-①参照）で構成されております。監査等委員である取締役の職務を補助すべき使用人を置くことにより、監査等委員である取締役の監査が実効的に行われることを確保するために必要な情報提供等が速やかになされる体制をとっております。監査等委員である取締役は取締役会において議案の審議、決議に参加し、また業務執行状況の報告を受けるなどのほか、子会社経営会議を始めとする会議体に参加し、監査の実効性向上を図っております。また、監査部門とは情報の交換を密に行い、相互に連携して内部統制システムの構築・運用状況を監視しております。

(内部監査)

当社は、事業分野の規模拡大もあり、リスクマネジメント関連機能を集約・統合しております。監査部門（社員4名）では、業務の適正な運営・改善・効率化を図るべく、当社グループを対象として、計画的で網羅的な内部監査を、また必要に応じてテーマ監査を実施しております。

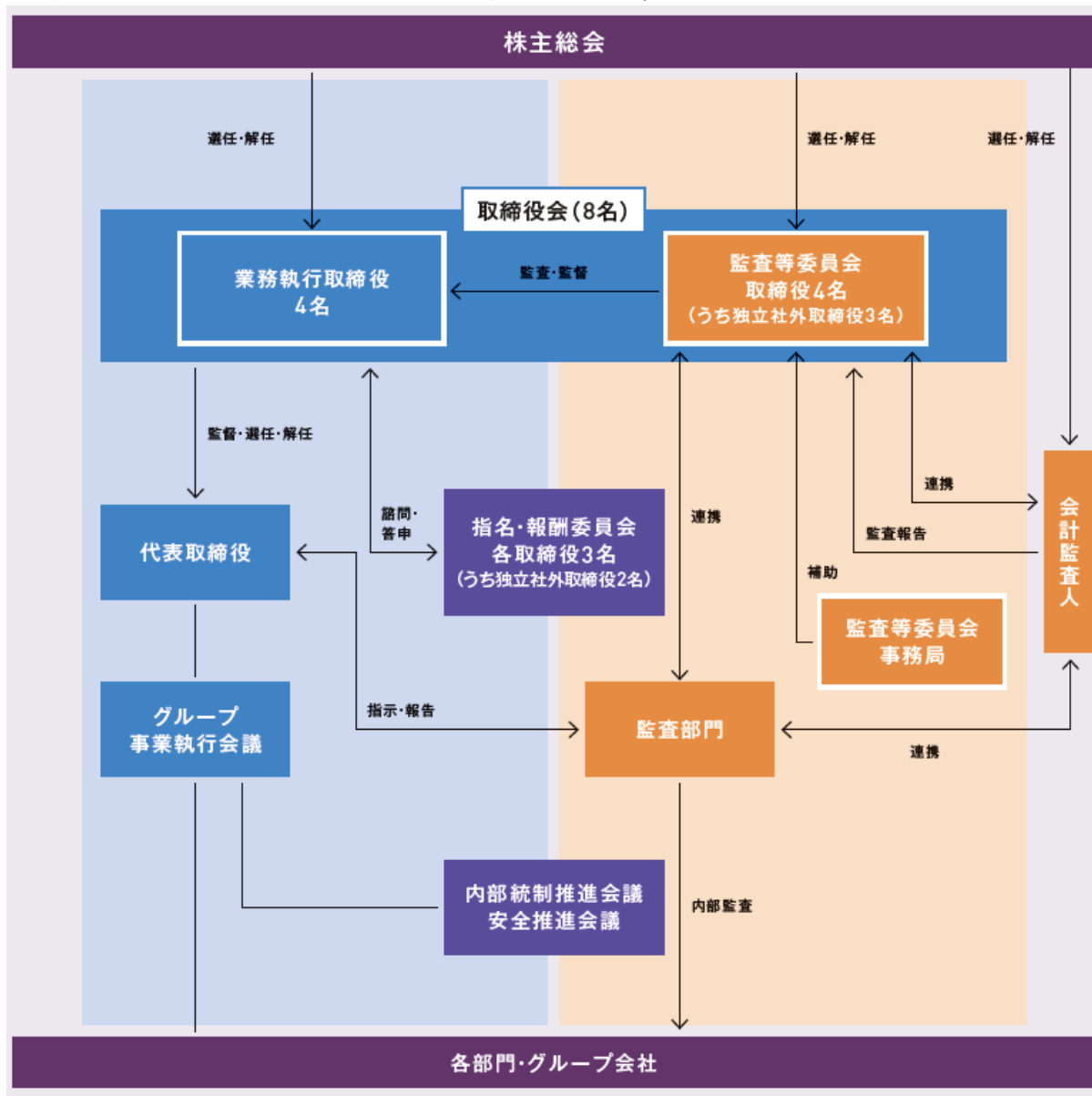
(独立監査人)

当社は、会社法に基づく会計監査及び金融商品取引法に基づく会計監査をEY新日本有限責任監査法人に委嘱しております。独立監査人であるEY新日本有限責任監査法人は、監査人として独立した立場から財務諸表に対する意見を表明しております。なお、会社と独立監査人の間に特別の利害関係はありません。

(指名委員会・報酬委員会)

当社は、取締役会の任意の諮問機関として、委員の過半数を社外取締役とする指名委員会及び報酬委員会（寺山満春、木村祐二、原良憲）を設置し、各委員会において取締役の人事や報酬等を審議することにより、これらの事項に関する客観性及び透明性を確保して、コーポレートガバナンスの強化を図っております。

当社のコーポレート・ガバナンス体制の図式は次のとおりです。



③ 企業統治に関するその他の事項

(内部統制システムの整備の状況)

取締役会内に独立社外取締役3名を含む監査等委員会を設置し、監査部門と協力して内部統制の強化を図っています。監査部門は、業務の妥当性及び有効性及び法規制・社内ルールの遵守状況等について監査を実施し、各部署に助言・勧告を行うとともに経営層に速やかに報告しています。

(リスク管理体制の整備の状況)

当社グループの事業遂行プロセス、業務構造等に潜在するリスクを適切にコントロールするため、事業活動上のリスクの把握・評価及び対策を実施する体制として監査部を組織化、また内部統制推進会議・安全推進会議を定期的開催するなど、コンプライアンス及び安全体制を確立、リスクの顕在化を未然に防止しております。

(子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況)

当社は、当社子会社の業務の適正を確保するために、当社子会社を管理する体制を構築するとともに、それらの経営成績及び営業活動等を定期的に当社の取締役会に報告する体制を整備しております。また、当社の監査部門は、定期的または必要に応じて監査を行い、監査の結果を当社の代表取締役会長、代表取締役社長、監査等委員会及び関係部署へ報告する体制を整備しております。

(責任限定契約の内容の概要)

当社は、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議をもって同法第423条第1項の行為に関する取締役(取締役であったものを含む。)及び監査役であったものの責任を法令の限度において免除することができる旨を定款に定めております。また、当社は、会社法第427条第1項に基づき、取締役(業務執行取締役等である者を除く。)との間において、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任限度額は、法令が定める額としております。これらは、取締役が職務を遂行するにあたり、その能力を十分に発揮して、期待される役割を果たしうる環境を整備することを目的とするものであります。

(取締役の定数)

当社の取締役(監査等委員であるものを除く。)は10名以内とし、監査等委員である取締役は6名以内とする旨定款に定めております。

(取締役の選任及び解任の決議要件)

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨定款に定めております。

(剰余金の配当等の決定機関)

当社は、剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項について、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議により定める旨定款に定めております。これは、剰余金の配当等を取締役会の権限とすることにより、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

(株主総会の特別決議要件)

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

① 役員一覧

男性7名 女性1名 (役員のうち女性の比率12.5%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役 会長	寺山 満春	1940年3月10日生	1964年3月 東京大学経済学部卒業 1964年4月 ㈱クラレ入社 1973年7月 アサヒブリテック㈱入社 1973年10月 アサヒブリテック㈱専務取締役 1981年5月 アサヒブリテック㈱代表取締役社長 1991年9月 アサヒブリテック㈱代表取締役会長 1997年3月 アサヒブリテック㈱代表取締役社長 2009年4月 当社代表取締役社長 2011年4月 当社代表取締役会長兼社長 2011年4月 アサヒブリテック㈱取締役会長 2012年6月 当社代表取締役会長 2014年6月 当社代表取締役会長兼社長 2018年4月 当社代表取締役会長 (現任)	(注) 4	887,145
代表取締役 社長	東浦 知哉	1961年1月26日生	1984年3月 大阪大学人間科学部卒業 1984年4月 日本電気㈱入社 2001年2月 アサヒブリテック㈱入社 2003年1月 アサヒブリテック㈱管理統括本部長 2006年6月 アサヒブリテック㈱取締役 執行役員 管理統括本部長 2007年5月 ㈱太陽化学代表取締役社長 2009年4月 当社取締役 企画管理本部長 2010年4月 当社取締役 総務人事本部長 2010年6月 アサヒブリテック㈱取締役 執行役員 貴金属リサイクル事業本部長 2011年4月 当社取締役 2012年1月 アサヒブリテック㈱取締役 2013年4月 ジャパンウェイスト㈱取締役 2014年6月 アサヒブリテック㈱代表取締役社長 2017年4月 アサヒアメリカホールディングス㈱ 代表取締役社長 (現任) 2018年4月 当社代表取締役社長 (現任) 2018年4月 アサヒブリテック㈱取締役 (現任)	(注) 4	15,000
取締役 経理部長	小島 周	1968年4月9日生	1992年3月 慶応義塾大学商学部卒業 1992年4月 日商岩井㈱入社 2009年6月 英国国立ウェールズ大学経営大学院 経営管理学修士号 (MBA) 取得 2011年3月 アサヒブリテック㈱入社 同社経理部長 2012年4月 当社経理部長 2014年12月 アサヒアメリカホールディングス㈱ 監査役 2016年6月 アサヒブリテック㈱監査役 (現任) 2017年6月 当社取締役 経理部長 (現任) 2018年4月 アサヒアメリカホールディングス㈱ 取締役 (現任)	(注) 4	2,600
取締役	中西 広幸	1962年7月5日生	1986年3月 阪南大学商学部卒業 1986年4月 アサヒブリテック㈱入社 2000年6月 アサヒブリテック㈱甲府営業所長 2008年1月 アサヒブリテック㈱管理統括本部 人事部長 2009年4月 アサヒブリテック㈱感材事業部長 2013年4月 ジャパンウェイスト㈱取締役 2014年7月 ㈱フジ医療器代表取締役 上席副社長 2016年6月 ㈱フジ医療器代表取締役社長 2018年4月 アサヒブリテック㈱代表取締役社長 (現任) 2018年6月 当社取締役 (現任)	(注) 4	13,500

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 (監査等委員)	木村 祐二	1955年7月23日生	1978年3月 東京大学理学部卒業 1979年4月 環境庁入庁 2006年7月 環境省廃棄物・リサイクル対策部 産業廃棄物課長 2010年8月 新エネルギー・産業技術総合開発機構 京都メカニズム事業推進部長 2012年7月 財務省函館税関長 2014年10月 公益財団法人地球環境センター 常務理事東京事務所長(現任) 2017年6月 当社社外取締役(監査等委員)(現任)	(注)5	1,000
取締役 (監査等委員)	金澤 恭子	1965年10月11日生	1989年3月 学習院大学法学部卒業 1989年4月 ㈱富士総合研究所入社 2000年4月 弁護士登録 2000年4月 風間・畑法律事務所(現 畑法律事務所)入所(現任) 2017年6月 当社社外取締役(監査等委員)(現任) 2018年6月 特種東海製紙㈱社外取締役(現任)	(注)5	—
取締役 (監査等委員)	武内 義勝	1956年1月1日生	1978年3月 神戸大学法学部卒業 1978年4月 ㈱兵庫相互銀行入行 1999年4月 アサヒブリテック㈱入社 2001年6月 アサヒブリテック㈱取締役 総務部長 2006年3月 アサヒブリテック㈱取締役 常務執行役員 環境リサイクル事業本部長 2008年5月 ジャパンウェイスト㈱代表取締役社長 2009年4月 当社取締役 2018年4月 ジャパンウェイスト㈱取締役会長 2018年4月 アサヒライフ&ヘルス㈱取締役会長 2019年6月 当社取締役(監査等委員)(現任)	(注)5	12,800
取締役 (監査等委員)	原 良憲	1958年7月21日生	1983年3月 東京大学大学院工学系研究科(修士課程)修了 1983年4月 日本電気㈱入社 1990年8月 スタンフォード大学客員研究員 2004年7月 NEC関西研究所統括 2006年4月 京都大学経営管理大学院教授(現任) 2018年4月 京都大学経営管理大学院院長(現任) 2019年6月 当社社外取締役(監査等委員)(現任)	(注)5	—
計					932,045

- (注) 1. 2015年6月16日開催の定時株主総会において定款の変更が決議されたことにより、当社は同日付をもって監査等委員会設置会社に移行しております。
2. 木村祐二氏、金澤恭子氏、原良憲氏は、「社外取締役」であります。
3. 当社の監査等委員会については次のとおりであります。
委員長 木村祐二氏、委員 金澤恭子氏、委員 武内義勝氏、委員 原良憲氏
なお、武内義勝氏は、常勤の監査等委員であります。常勤の監査等委員を選定している理由は、情報収集その他監査の実効性を高め、監査・監督機能を強化するためであります。
4. 2019年6月18日開催の定時株主総会の終結の時より、2020年3月期に係る定時株主総会の終結の時までであります。
5. 2019年6月18日開催の定時株主総会の終結の時より、2021年3月期に係る定時株主総会の終結の時までであります。

② 社外役員の状況

当社の社外取締役は3名であります。

木村祐二氏は、廃棄物処理、リサイクル等を含めた環境保全に関する専門的な知識・経験等を有しており、経営に対して独立性を確保した立場から有用な意見をいただくことを目的として、同氏を社外取締役に選任しております。金澤恭子氏は、弁護士としての法律に関する専門的な知識や経験を有しており、経営に対して独立性を確保した立場から監視・監査機能を果たすことを目的として、同氏を社外取締役に選任しております。原良憲氏は、京都

大学経営管理大学院で院長・教授を務めており、サービス・イノベーション全般に関する高い専門的知識・経験を有しており、経営に対して独立性を確保した立場から有用な意見をいただくことを目的として、同氏を社外取締役を選任しております。なお、社外取締役の兼職先と当社及び当社グループとの間に特別な利害関係はありません。

当社は、独自に社外取締役の独立性に関する基準を設けております。選任にあたっては、経歴や当社との関係を踏まえて、当社経営陣からの独立した立場で社外役員としての職務を遂行できる十分な独立性が確保できることを前提に判断しております。なお、木村祐二氏、金澤恭子氏及び原良憲氏を株式会社東京証券取引所が定める独立役員として同取引所に届け出ております。

③ 社外取締役による監督又は監査と内部監査、監査等委員会監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、取締役会に毎回出席するほか、その他の重要会議にも出席するなど、経営に対して独立した立場から監視・監督機能を果たしており、意思決定の妥当性・適正性を確保するための発言を行っております。また、会計監査人や監査部門とも定期的な情報交換を行っております。

(3) 【監査の状況】

① 監査等委員会監査の状況

監査等委員会の監査は、各監査等委員である取締役（社外取締役3名、社内取締役1名）によって実施しており、監査等委員である取締役は、取締役会に毎回出席するほか、その他の重要会議にも積極的に出席し、財務・会計ならびに法律に関する高い専門的見地から発言を行っております。また、監査等委員である取締役は、会計監査人と定期的な情報交換を行うとともに、監査部門とも定期的な情報交換及び意見交換を実施しております。

② 内部監査の状況

内部監査は当社グループを対象とし、業務の適正な運営・改善・効率化び法規制・社内ルールの遵守を図るべく、監査部門（社員4名）による計画的で網羅的な監査を実施しております。監査部門は、会計監査人と定期的な情報交換を行うとともに、監査等委員会とも定期的な情報交換及び意見交換を実施しております。

③ 会計監査の状況

a. 監査法人の名称

EY新日本有限責任監査法人

（注）新日本有限責任監査法人は、2018年7月1日付をもって、名称をEY新日本有限責任監査法人に変更しております。

b. 業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員 竹野 俊成、寶野 裕昭

c. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士 11名、その他 20名であります。

d. 監査法人の選定・解任の方針と理由

当社は、会計監査人の選定及び評価に際しては、当社の広範な業務内容に対応して効率的な監査業務を実施することができる一定の規模と世界的なネットワークを持つこと、審査体制が整備されていること、監査日数、監査期間及び具体的な監査実施要領並びに監査費用が合理的かつ妥当であること、さらに監査実績などにより総合的に判断いたします。また、日本公認会計士協会の定める「独立性に関する指針」に基づき独立性を有することを確認するとともに、必要な専門性を有することについて検証し、確認いたします。

監査等委員会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合は、監査等委員全員の同意に基づき、会計監査人を解任いたします。この場合、監査等委員会が選定した監査等委員は、解任後最初に招集される株主総会におきまして、会計監査人を解任した旨と解任の理由を報告いたします。

監査等委員会は、会計監査人の職務の執行状況や当社の監査体制等を勘案して会計監査人の変更が必要であると認められる場合は、株主総会に提出する会計監査人の解任または不再任に関する議案の内容を決定いたします。

e. 監査等委員会による監査法人の評価

当社の監査等委員会は、三様監査連絡会、定期報告などにより監査法人の監査計画及び監査実施状況の把握と評価を行っており、同法人による会計監査は、従前から適正に行われていることを確認しております。

また、監査等委員会は会計監査人の選任に関する確認決議をしており、その際には日本監査役協会が公表する「会計監査人の評価及び選定基準策定に関する監査役等の実務指針」に基づき「会計監査人评价・選定基準」を策定し、総合的に評価しております。

④ 監査報酬の内容等

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」（平成31年1月31日内閣府令第3号）による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56)d(f) i から iii の規定に経過措置を適用しております。

a. 監査公認会計士等に対する報酬の内容

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（円）	非監査業務に基づく報酬（円）	監査証明業務に基づく報酬（円）	非監査業務に基づく報酬（円）
提出会社	31,800,000	2,500,000	31,800,000	—
連結子会社	23,200,000	—	23,200,000	—
計	55,000,000	2,500,000	55,000,000	—

当社における非監査業務に基づく報酬につきましては、前連結会計年度にEY新日本有限責任監査法人に対して、コンフォートレター作成業務を委託し、対価を支払っております。

非監査業務に基づく報酬につきましては、当連結会計年度に該当事項はありません。

b. その他重要な報酬の内容

該当事項はありません。

c. 監査報酬の決定方針

監査報酬を決定するにあたっての特段の方針は定めておりませんが、当社の規模や特性、監査日数などをともに検討し、監査等委員会の同意を得て決定しております。

d. 監査等委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社監査等委員会は、日本監査役協会が公表する「会計監査人との連携に関する実務指針」を踏まえ、監査方法及び監査内容などを確認し、検討した結果、会計監査人の報酬等につき、会社法第399条第1項及び第3項の同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

① 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社は、株主総会で決議された役員報酬の限度額内で、取締役会の諮問機関である報酬委員会からの答申内容をもとに、取締役会にて決定しています。

- a. 監査等委員であるものを除く取締役の報酬は「基本報酬」「賞与」「業績連動型株式報酬」により構成されます。監査等委員である取締役の報酬は「基本報酬」のみです。
- b. 「基本報酬」は、それぞれの取締役の職責に応じて各人毎に金額を決定します。
- c. 「賞与」は該当年度の連結営業利益に一定比率を乗じて総額（当社子会社の取締役を含む）を算出し、それを各社の業績に応じて按分した各社総額を算出した上で、業績貢献度に応じて各人毎に金額を決定します。
- d. 「業績連動型株式報酬」の当社取締役に対する株式付与ポイント数は、一律に一人3,200ポイントです。中長期的な企業価値向上へのインセンティブを趣旨としていますので、各事業年度の「連結営業利益」の業績目標達成率により付与ポイントを連動させています。また、第8次中期経営計画終了後の2021年5月31日在籍者を付与の対象者としています。

- (注) 1. 取締役の報酬限度額は、2015年6月16日開催の第6期定時株主総会において、監査等委員を除く取締役の総額の限度額を200百万円、監査等委員である取締役の総額の限度額を100百万円と決議しております。
2. 「業績連動型株式報酬」については、2018年6月19日開催の第9期定時株主総会において、「業績連動型株式報酬」制度の継続および2018年度から2020年度までの3年間に在任する取締役（社外取締役、非常勤取締役および監査等委員を除く。）に対する株式ポイント付与数等について決議しております。業績連動係数は以下の通りです。

業績目標達成率	業績連動係数
100%以上	1.0
50%以上	0.5
50%以下	0.0

3. 報酬委員会委員は、社外取締役が過半数の構成となることを前提として、取締役会決議により任命されます（現在3名中社外取締役が2名）。また2018年度は報酬委員会を3回開催し、全委員がその全てに出席しております。

② 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額（百万円）			対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	賞与	業績連動型株式 報酬	
取締役(監査等委員を除く) (社外取締役を除く)	150	94	28	28	6
取締役(監査等委員) (社外取締役を除く)	12	12	—	—	1
社外役員	18	18	—	—	3

- (注) 1. 期末現在の支給人員は、取締役5名、監査等委員である取締役4名（うち、社外取締役3名）であります。
2. 役員ごとの報酬等の総額につきましては、1億円以上を支給している役員はありませんので記載を省略しております。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、投資株式について、もっぱら株式の価値の変動または配当の受領によって利益を得ることを目的として保有する株式を純投資目的である投資株式、それ以外の株式を純投資目的以外の目的である投資株式（政策保有株式）に区分しております。

② 株式会社フジ医療器における株式の保有状況

当社および連結子会社のうち、投資株式の貸借対照表計上額（投資株式計上額）が最も大きい会社（最大保有会社）である株式会社フジ医療器については、以下のとおりです。

(i) 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

取引関係の強化および取引関係の構築等当社グループの企業価値の維持または向上に資すると判断した場合に、株式を保有しております。

当社の資本コストを踏まえ、中長期的な経済合理性や将来の見通しを検証したうえで保有の合理性について当社取締役会において毎年審議を行い、保有の合理性がなくなっている場合には速やかに売却を行っております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額 (百万円)
非上場株式	-	-
非上場株式以外の株式	1	42

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額 (百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	-	-	-
非上場株式以外の株式	-	-	-

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額 (百万円)
非上場株式	-	-
非上場株式以外の株式	1	3

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
上新電機 (株)	16,500	16,500	(保有目的) ライフ&ヘルス事業セグメントにおける企業間取引の強化 (定量的な保有効果) (注) 2	無
	42	64		
(株) 中京医薬品	—	12,300	(保有目的) ライフ&ヘルス事業セグメントにおける企業間取引の強化 (定量的な保有効果) (注) 2	無
	—	3		

(注1) 「—」は、当該銘柄を保有していないことを示しております。

(注2) 特定投資株式における定量的な保有効果の記載が困難であるため、保有の合理性を検証した方法について記載いたします。当社は、毎期、個別の政策保有株式について政策保有の意義を検証しており、現状保有する政策保有株式はいずれも保有方針に沿った目的で保有していることを確認しております。

みなし保有株式

該当事項はありません。

(ii) 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

③ JWガラスリサイクル株式会社における株式の保有状況

当社および連結子会社のうち、投資株式の貸借対照表計上額（投資株式計上額）が最大保有会社の次に大きいJWガラスリサイクル株式会社については、以下のとおりです。

(i) 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

取引関係の強化および取引関係の構築等当社グループの企業価値の維持または向上に資すると判断した場合に、株式を保有しております。

当社の資本コストを踏まえ、中長期的な経済合理性や将来の見通しを検証したうえで保有の合理性について当社取締役会において毎年審議を行い、保有の合理性がなくなっている場合には速やかに売却を行っております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の合計額 (百万円)
非上場株式	—	—
非上場株式以外の株式	2	29

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得価額の合計額 (百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	—	—	—
非上場株式以外の株式	2	3	取引先持株会を通じた株式の取得

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	—	—
非上場株式以外の株式	—	—

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果及 び株式数が増加した理由	当社の株式の保 有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
AGC(株)	4,351	3,997	(保有目的)環境保全事業セグ メントにおける企業間取引の強 化 (定量的な保有効果)(注)1	無
	16	17		
日本山村硝子 (株)	8,598	77,107	(保有目的)環境保全事業セグ メントにおける企業間取引の強 化 (定量的な保有効果)(注)1	無
	12	14		

(注1) 特定投資株式における定量的な保有効果の記載が困難であるため、保有の合理性を検証した方法について記載いたします。当社は、毎期、個別の政策保有株式について政策保有の意義を検証しており、現状保有する政策保有株式はいずれも保有方針に沿った目的で保有していることを確認しております。

(注2) 日本山村硝子(株)は、2018年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。

みなし保有株式

該当事項はありません。

(ii) 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

④ 提出会社における株式の保有状況

提出会社については以下のとおりであります。

(i) 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

該当事項はありません。

(ii) 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）第93条の規定により、国際会計基準（以下「IFRS」という。）に準拠して作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人による監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組み及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備について

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組み及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備を行っております。その内容は以下のとおりであります。

- (1) 会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての確に対応できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構に加入し、同機構及び監査法人等が主催するセミナー等に参加する等を行っております。
- (2) IFRSの適用については、国際会計基準審議会が公表するプレスリリースや基準書を随時入手し、最新の基準の把握を行っております。また、IFRSに基づく適正な連結財務諸表を作成するために、IFRSに準拠したグループ会計方針及び会計指針を作成し、それらに基づいて会計処理を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結財政状態計算書】

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産			
流動資産			
現金及び現金同等物	7, 31	24, 140	16, 297
営業債権及びその他の債権	8, 23, 31	36, 973	66, 489
棚卸資産	9	22, 466	25, 191
未収法人所得税		1, 474	1, 515
その他の金融資産	10, 31	660	389
その他の流動資産	11	2, 380	3, 906
流動資産合計		88, 096	113, 790
非流動資産			
有形固定資産	12	32, 870	36, 083
のれん	13	8, 243	8, 243
無形資産	13	740	697
繰延税金資産	14	853	873
退職給付に係る資産	18	124	47
金融資産	10, 31	537	498
その他の非流動資産	11	18	39
非流動資産合計		43, 388	46, 482
資産合計		131, 484	160, 272

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
負債及び資本			
負債			
流動負債			
営業債務及びその他の債務	17, 23, 31	14, 179	17, 169
借入金	15, 31	22, 515	44, 712
未払法人所得税		3, 012	2, 405
その他の金融負債	15, 31	506	1, 537
引当金	19	1, 484	1, 207
その他の流動負債	20, 23	3, 400	3, 540
流動負債合計		45, 099	70, 573
非流動負債			
借入金	15, 31	18, 600	19, 085
繰延税金負債	14	1, 440	1, 360
退職給付に係る負債	18	153	157
その他の金融負債	15, 31	1, 754	1, 291
非流動負債合計		21, 949	21, 895
負債合計		67, 049	92, 468
資本			
資本金	21	7, 790	7, 790
資本剰余金	21	10, 381	10, 353
自己株式	21	△386	△955
利益剰余金	21	50, 282	55, 547
その他の資本の構成要素	21	△3, 632	△4, 931
親会社の所有者に帰属する持分合計		64, 435	67, 804
資本合計		64, 435	67, 804
負債及び資本合計		131, 484	160, 272

②【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上収益	6, 23	115, 797	128, 669
売上原価		△87, 500	△99, 159
売上総利益		28, 296	29, 509
販売費及び一般管理費	24	△14, 403	△14, 959
その他の営業収益	25	244	219
その他の営業費用	25	△346	△290
営業利益	6	13, 791	14, 478
金融収益	26	16	33
金融費用	26	△397	△1, 106
税引前利益		13, 410	13, 405
法人所得税費用	14	△3, 956	△4, 404
当期利益		9, 453	9, 000
当期利益の帰属			
親会社の所有者		9, 416	9, 000
非支配持分		37	—
当期利益		9, 453	9, 000
1株当たり当期利益	28		
基本的1株当たり当期利益(円)		270.77	228.14
希薄化後1株当たり当期利益(円)		269.90	227.21

③【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期利益		9,453	9,000
その他の包括利益			
純損益に振り替えられることのない項目			
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	27	19	△17
確定給付制度の再測定	27	38	△69
純損益に振り替えられることのない項目合計		57	△86
純損益に振り替えられる可能性のある項目			
キャッシュ・フロー・ヘッジ	27	69	△1,168
在外営業活動体の換算差額	27	△4	△112
純損益に振り替えられる可能性のある項目合計		65	△1,280
税引後その他の包括利益		122	△1,367
当期包括利益		9,576	7,633
当期包括利益の帰属			
親会社の所有者		9,535	7,633
非支配持分		41	—
当期包括利益		9,576	7,633

④【連結持分変動計算書】

親会社の所有者に帰属する持分

注記	資本金	資本剰余金	自己株式	利益剰余金	その他の資本の構成要素	
					在外営業活動体の換算差額	キャッシュ・フロー・ヘッジ
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
2017年4月1日時点の残高	4,480	6,126	△5,371	42,783	△3,618	△104
当期利益	—	—	—	9,416	—	—
その他の包括利益	—	—	—	—	△5	69
当期包括利益合計	—	—	—	9,416	△5	69
新株の発行	21 3,309	3,282	—	—	—	—
自己株式の取得	21 —	—	△0	—	—	—
自己株式の処分	21 —	1,266	4,985	—	—	—
配当金	22 —	—	—	△1,955	—	—
支配の喪失とならない子会社に対する所有者の持分変動	—	△337	—	—	—	—
子会社の支配喪失に伴う変動	—	—	—	—	—	—
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替	—	—	—	38	—	—
株式に基づく報酬取引	30 —	42	—	—	—	—
所有者との取引額合計	3,309	4,254	4,984	△1,917	—	—
2018年3月31日時点の残高	7,790	10,381	△386	50,282	△3,624	△34

親会社の所有者に帰属する持分

その他の資本の構成要素

注記	その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	確定給付制度の再測定	合計	合計	非支配持分	資本合計
2017年4月1日時点の残高	7	—	△3,716	44,303	524	44,827
当期利益	—	—	—	9,416	37	9,453
その他の包括利益	17	38	119	119	3	122
当期包括利益合計	17	38	119	9,535	41	9,576
新株の発行	21 —	—	—	6,592	—	6,592
自己株式の取得	21 —	—	—	△0	—	△0
自己株式の処分	21 —	—	—	6,252	—	6,252
配当金	22 —	—	—	△1,955	—	△1,955
支配の喪失とならない子会社に対する所有者の持分変動	3	—	3	△333	△540	△874
子会社の支配喪失に伴う変動	—	—	—	—	△24	△24
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替	0	△38	△38	—	—	—
株式に基づく報酬取引	30 —	—	—	42	—	42
所有者との取引額合計	3	△38	△35	10,596	△565	10,030
2018年3月31日時点の残高	27	—	△3,632	64,435	—	64,435

親会社の所有者に帰属する持分

注記	親会社の所有者に帰属する持分				その他の資本の構成要素	
	資本金	資本剰余金	自己株式	利益剰余金	在外営業活動体の換算差額	キャッシュ・フロー・ヘッジ
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
2018年4月1日時点の残高	7,790	10,381	△386	50,282	△3,624	△34
当期利益	—	—	—	9,000	—	—
その他の包括利益	—	—	—	—	△112	△1,168
当期包括利益合計	—	—	—	9,000	△112	△1,168
自己株式の取得	21	—	△744	—	—	—
自己株式の処分	21	—	70	—	—	—
配当金	22	—	—	△3,667	—	—
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替	—	—	—	△68	—	—
株式に基づく報酬取引	30	—	△52	104	—	—
所有者との取引額合計	—	△27	△568	△3,736	—	—
2019年3月31日時点の残高	7,790	10,353	△955	55,547	△3,737	△1,203

親会社の所有者に帰属する持分

注記	その他の資本の構成要素				
	その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	確定給付制度の再測定	合計	合計	資本合計
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
2018年4月1日時点の残高	27	—	△3,632	64,435	64,435
当期利益	—	—	—	9,000	9,000
その他の包括利益	△17	△69	△1,367	△1,367	△1,367
当期包括利益合計	△17	△69	△1,367	7,633	7,633
自己株式の取得	21	—	—	△744	△744
自己株式の処分	21	—	—	95	95
配当金	22	—	—	△3,667	△3,667
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替	—	△0	69	68	—
株式に基づく報酬取引	30	—	—	52	52
所有者との取引額合計	—	△0	69	△4,264	△4,264
2019年3月31日時点の残高	8	—	△4,931	67,804	67,804

⑤【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー			
税引前利益		13,410	13,405
減価償却費及び償却費		2,267	2,320
減損損失	12, 13	120	15
金融収益及び金融費用		368	1,055
棚卸資産の増減額 (△は増加)		△5,112	△2,720
営業債権及びその他の債権の増減額 (△は増加)		△21,421	△29,497
営業債務及びその他の債務の増減額 (△は減少)		1,317	2,829
その他		△2,110	△2,051
小計		△11,161	△14,645
利息及び配当金の受取額		17	33
利息の支払額		△366	△1,114
法人所得税の支払額		△3,243	△6,287
法人所得税の還付額		1,355	1,365
営業活動によるキャッシュ・フロー		△13,397	△20,648
投資活動によるキャッシュ・フロー			
定期預金の預入による支出		—	△100
定期預金の払戻による収入		11	100
有形固定資産の取得による支出		△2,762	△5,552
有形固定資産の売却による収入		181	236
無形資産の取得による支出		△185	△249
投資の売却、償還による収入		5	15
子会社への支配喪失による減少額		△23	—
その他		△55	△79
投資活動によるキャッシュ・フロー		△2,829	△5,629
財務活動によるキャッシュ・フロー			
短期借入金の純増減額 (△は減少)	29	20,092	23,645
長期借入金の返済による支出	29	△270	△1,010
新株の発行による収入	21	6,619	—
自己株式の売却による収入	21	6,252	95
自己株式の取得による支出		△0	△744
非支配持分からの子会社持分取得による支出		△874	—
配当金の支払額		△1,956	△3,666
その他	29	△86	△59
財務活動によるキャッシュ・フロー		29,776	18,261
現金及び現金同等物に係る換算差額		△208	174
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)		13,341	△7,842
現金及び現金同等物の期首残高		10,798	24,140
現金及び現金同等物の期末残高	7	24,140	16,297

【連結財務諸表注記】

1. 報告企業

アサヒホールディングス株式会社（以下「当社」という。）は日本に所在する企業であります。その登記されている本社及び主要な事業所の住所はホームページ（<https://www.asahiholdings.com>）で開示しております。当社の連結財務諸表は、2019年3月31日を期末日とし、当社及びその子会社（以下「当社グループ」という。）により構成されております。

当社グループの主要な活動については、注記「6. セグメント情報」をご参照下さい。

2. 作成の基礎

(1) IFRSに準拠している旨

当社グループの連結財務諸表は、国際会計基準審議会によって公表されたIFRSに準拠して作成しております。

当社グループは、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。）第1条の2に掲げる「指定国際会計基準特定会社」の要件を満たしていることから、同第93条の規定を適用しております。

本連結財務諸表は、2019年6月18日に代表取締役社長 東浦知哉によって承認されております。

(2) 測定の基礎

当社グループの連結財務諸表は、注記「3. 重要な会計方針」に記載のとおり、公正価値で測定されている特定の金融商品等を除き、取得原価を基礎として作成しております。

(3) 機能通貨及び表示通貨

当社グループの連結財務諸表は、当社の機能通貨である日本円を表示通貨としており、百万円未満を切り捨てて表示しております。

(4) 会計方針の変更

当社グループは、当連結会計年度よりIFRS第15号「顧客との契約から生じる収益」（2014年5月公表）及び「IFRS第15号の明確化」（2016年4月公表）（合わせて以下、「IFRS第15号」）を適用しております。IFRS第15号の適用にあたっては、経過措置として認められている、本基準の適用による累積的影響を適用開始日に認識する方法を採用しております。そのため、比較情報は修正再表示しておらず、引き続きIAS第11号、IAS第18号及び関連する解釈指針に基づき報告しております。

IFRS第15号の適用に伴い、IFRS第9号に基づく利息及び配当収益を除き、以下の5ステップアプローチに基づき収益を認識しております。

ステップ1：顧客との契約を識別する

ステップ2：契約における履行義務を識別する

ステップ3：取引価格を算定する

ステップ4：取引価格を契約における履行義務に配分する

ステップ5：企業が履行義務の充足時に収益を認識する

IFRS第15号の適用による当社グループの業績及び財政状態に及ぼす重要な影響はありません。

3. 重要な会計方針

以下に記載する会計方針は、この連結財務諸表に報告されている全ての期間について継続的に適用されております。

(1) 連結の基礎

子会社

子会社とは、当社グループにより支配されている企業をいいます。当社グループがある企業への関与により生じる変動リターンに対するエクスポージャー又は権利を有し、かつ、当該企業に対するパワーにより当該リターンに影響を及ぼす能力を有している場合に、当社グループは当該企業を支配していると判断しております。

子会社の財務諸表は、当社グループが支配を獲得した日から支配を喪失する日まで、連結の対象に含めております。

子会社が適用する会計方針が当社グループの適用する会計方針と異なる場合には、必要に応じて当該子会社の財務諸表に調整を加えております。当社グループ間の債権債務残高及び内部取引高、並びに当社グループ間の取引から発生した未実現損益は、連結財務諸表の作成に際して消去しております。

子会社持分を一部処分した際、支配が継続する場合には、資本取引として会計処理しております。非支配持分の調整額と対価の公正価値との差額は、親会社の所有者に帰属する持分として資本に直接認識されております。

支配を喪失した場合には、支配の喪失から生じた利得又は損失は純損益で認識しております。

(2) 企業結合

企業結合は取得法を用いて会計処理しております。取得対価は、被取得企業の支配と交換に譲渡した資産、引き受けた負債及び当社グループが発行する持分金融商品の取得日の公正価値の合計として測定されます。取得対価、被取得企業の非支配持分の金額及び段階取得の場合には取得企業が以前に保有していた被取得企業の資本持分の公正価値の合計額が識別可能な資産及び負債の正味の金額を超過する場合は、連結財政状態計算書においてのれんとして計上しております。反対に下回る場合には、直ちに純損益として計上しております。

仲介手数料、弁護士費用、デュー・デリジェンス費用等の、企業結合に関連して発生する取引費用は、発生時に費用処理しております。

企業結合の当初の会計処理が、企業結合が発生した連結会計年度末までに完了していない場合は、完了していない項目を暫定的な金額で報告しております。取得日時点に存在していた事実と状況を、取得日当初に把握していたとしたら認識される金額の測定に影響を与えていたと判断される期間（以下「測定期間」という。）に入手した場合、その情報を反映して、取得日に認識した暫定的な金額を遡及的に修正しております。新たに得た情報が、資産と負債の新たな認識をもたらす場合には、追加の資産と負債を認識しております。測定期間は最長で1年間であります。

非支配持分の追加取得については、資本取引として会計処理しているため、当該取引からのれんは認識しておりません。

被取得企業における識別可能な資産及び負債は、以下を除いて、取得日の公正価値で測定しております。

- ・繰延税金資産・負債及び従業員給付契約に関連する資産・負債
- ・被取得企業の株式に基づく報酬契約
- ・IFRS第5号「売却目的で保有する非流動資産及び非継続事業」に従って売却目的に分類される資産又は処分グループ

(3) 外貨換算

① 外貨建取引

外貨建取引は、取引日の為替レートで当社グループの各社の機能通貨に換算しております。

期末日における外貨建貨幣性資産及び負債は、期末日の為替レートで機能通貨に換算しております。

公正価値で測定される外貨建非貨幣性資産及び負債は、当該公正価値の算定日における為替レートで機能通貨に換算しております。

換算又は決済により生じる換算差額は、純損益として認識しております。ただし、その他の包括利益を通じて測定される金融資産、及びキャッシュ・フロー・ヘッジから生じる換算差額については、その他の包括利益として認識しております。

② 在外営業活動体の財務諸表

在外営業活動体の資産及び負債については期末日の為替レート、収益及び費用については為替レートが著しく変動している場合を除き、期中平均為替レートを用いて日本円に換算しております。在外営業活動体の財務諸表の換算から生じる換算差額は、その他の包括利益として認識しております。在外営業活動体の換算差額は、在外営業活動体が処分された期間に純損益として認識されます。

(4) 金融商品

① 金融資産

(i) 当初認識及び測定

当社グループは、金融資産について、金融商品の契約条項の当事者になったときに認識し、純損益を通じて公正価値で測定する又はその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産、償却原価で測定する金融資産に分類しております。

すべての金融資産は、純損益を通じて公正価値で測定する区分に分類される場合を除き、公正価値に取引費用を加算した金額で測定しております。

金融資産は、以下の要件をともに満たす場合には、償却原価で測定する金融資産に分類しております。

- ・ 契約上のキャッシュ・フローを回収するために金融資産を保有することを目的とする事業モデルに基づいて金融資産が保有されている。
- ・ 金融資産の契約条件により、元本及び元本残高に対する利息の支払のみであるキャッシュ・フローが特定の日に生じる。

償却原価で測定する金融資産以外の金融資産は、公正価値で測定する金融資産に分類しております。

公正価値で測定する金融資産については、純損益を通じて公正価値で測定しなければならない売買目的で保有される資本性金融商品を除き、個々の資本性金融商品ごとに、純損益を通じて公正価値で測定するか、その他の包括利益を通じて公正価値で測定するかを指定し、当該指定を継続的に適用しております。

(ii) 事後測定

金融資産の当初認識後の測定は、その分類に応じて以下のとおり測定しております。

(a) 償却原価により測定する金融資産

償却原価により測定する金融資産については、実効金利法による償却原価により測定しております。

(b) 公正価値により測定する金融資産

公正価値により測定する金融資産の公正価値の変動額は純損益として認識しております。ただし、資本性金融商品のうち、その他の包括利益を通じて公正価値で測定すると指定したものについては、公正価値の変動額はその他の包括利益として認識しております。当該その他の包括利益として認識された金額が、事後的に純損益に振り替えられることはありません。当該金融資産の認識の中止が行われる場合、又は公正価値が著しく下落した場合、過去に認識したその他の包括利益は利益剰余金に直接振り替えております。なお、当該金融資産からの配当金については、金融収益の一部として当期の純損益として認識しております。

(iii) 金融資産の減損

当社グループは、金融資産の減損の認識にあたって、報告期間の末日ごとに償却原価で測定する金融資産又は金融資産グループに当初認識時点からの信用リスクの著しい増加があるかどうかに基づいております。具体的には、当初認識時点から信用リスクが著しく増加していない場合には、12ヶ月の予想信用損失を貸倒引当金として認識しております。一方、当初認識時点から信用リスクの著しい増加があった場合には、残存期間にわたる予想信用損失を貸倒引当金として認識しております。信用リスクが著しく増加しているか否かは、債務不履行リスクの変化に基づいて判断しており、債務不履行リスクに変化があるかどうかの判断にあたっては、金融商品の外部信用格付けの著しい変化、事業状況又は財務状況の不利な変化、期日経過の情報等を考慮しております。ただし、営業債権については、当初から残存期間にわたる予想信用損失を認識しております。

また、予想信用損失は、契約上受け取ることのできる金額と受取が見込まれる金額との差額の割引現在価値に基づいて測定しております。

(iv) 金融資産の認識の中止

当社グループは、金融資産からのキャッシュ・フローに対する契約上の権利が消滅する、又は当社グループが金融資産の所有のリスクと経済価値のほとんどすべてを移転する場合において、金融資産の認識を中止しております。当社グループが、移転した当該金融資産に対する支配を継続している場合には、継続的関与を有している範囲において、資産と関連する負債を認識いたします。

② 金融負債

(i) 当初認識及び測定

当社グループは、金融負債について、金融商品の契約条項の当事者となったときに認識し、純損益を通じて公正価値で測定する金融負債と償却原価で測定する金融負債のいずれかに分類しております。

すべての金融負債は公正価値で当初測定しておりますが、償却原価で測定する金融負債については、直接帰属する取引費用を控除した金額で測定しております。

(ii) 事後測定

金融負債の当初認識後の測定は、その分類に応じて以下のとおり測定しております。

(a) 純損益を通じて公正価値で測定する金融負債

純損益を通じて公正価値で測定する金融負債については、売買目的保有の金融負債と当初認識時に純損益を通じて公正価値で測定すると指定した金融負債を含んでおり、当初認識後公正価値で測定し、その変動については当期の純損益として認識しております。

(b) 償却原価で測定する金融負債

償却原価で測定する金融負債については、当初認識後実効金利法による償却原価で測定しております。

実効金利法による償却及び認識が中止された場合の利得及び損失については、金融費用の一部として当期の純損益として認識しております。

(iii) 金融負債の認識の中止

当社グループは、金融負債が消滅したとき、すなわち、契約中に特定された債務が免責、取消し、又は失効となった時に、金融負債の認識を中止いたします。

③ 金融資産及び金融負債の表示

金融資産及び金融負債は、当社グループが残高を相殺する法的権利を有し、かつ純額で決済するか又は資産の実現と負債の決済を同時に行う意図を有する場合にのみ、連結財政状態計算書上で相殺し、純額で表示しております。

④ デリバティブ及びヘッジ会計

当社グループは、為替リスク、金利リスク、商品価格リスクをそれぞれヘッジするために、為替予約、金利スワップ契約、商品先渡契約等のデリバティブを利用しております。これらのデリバティブは、契約が締結された時点の公正価値で当初測定され、その後も公正価値で再測定しております。

当社グループは、ヘッジ開始時に、ヘッジ会計を適用しようとするヘッジ関係並びにヘッジを実施するに当たってのリスク管理目的及び戦略について、公式に指定及び文書化を行っております。当該文書は、具体的なヘッジ手段、ヘッジ対象となる項目又は取引並びにヘッジされるリスクの性質及びヘッジ関係の有効性の評価方法などを含んでおります。これらのヘッジは、ヘッジ指定を受けたすべての財務報告期間にわたって実際に有効であったか否かを判断するために、継続的に評価しております。具体的には、以下の項目のすべてを満たす場合においてヘッジが有効と判断しております。

- ・ヘッジ対象とヘッジ手段との間の経済的關係が相殺をもたらすこと
- ・信用リスクの影響が経済的關係から生じる価値変動に著しく優越するものではないこと
- ・ヘッジ比率が実際に使用しているヘッジ対象とヘッジ手段の数量から生じる比率と同じであること

ヘッジ会計の適用要件を満たす場合に当社が利用しているヘッジの会計処理は、下記のとおりであります。

キャッシュ・フロー・ヘッジ

ヘッジ手段に係る利得又は損失のうち有効部分は連結包括利益計算書においてその他の包括利益として認識し、非有効部分は直ちに連結損益計算書において純損益として認識しております。

その他の包括利益に計上されたヘッジ手段に係る金額は、ヘッジ対象である取引が純損益に影響を与える時点で純損益に振り替えております。

ヘッジ関係がヘッジ比率に関するヘッジ有効性の要求に合致しなくなったとしても、リスク管理目的が変わっていない場合、ヘッジの要件を再び満たすようにヘッジ関係のヘッジ比率を調整しております（以下「バランス再調整」という。）。

バランス再調整をした後で、ヘッジがヘッジ会計の要件をもちや満たさなくなった場合、あるいはヘッジ手段が消滅、売却、終結又は行使された場合には、ヘッジ会計の適用を将来に向けて中止しております。ヘッジ会計を中止した場合、当社グループは、すでにその他の包括利益で認識したキャッシュ・フロー・ヘッジの残高を、ヘッジされた将来キャッシュ・フローの発生がまだ見込まれる場合には、引き続き資本に計上し、ヘッジされた将来キャッシュ・フローの発生がもはや見込まれない場合には、純損益に直ちに振り替えております。

(5) 現金及び現金同等物

現金及び現金同等物は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資から構成されております。

(6) 棚卸資産

棚卸資産は、取得原価と正味実現可能価額のいずれか低い価額で測定しております。正味実現可能価額は、通常の事業過程における見積売価から、完成までに要する見積原価及び見積販売費用を控除した額であります。取得原価は、主として移動平均法に基づいて算定されており、購入原価、加工費及び現在の場所及び状態に至るまでに要したすべての費用を含んでおります。

(7) 有形固定資産

有形固定資産については、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した額で測定しております。

取得原価には、資産の取得に直接関連する費用、解体・除去及び土地の原状回復費用、及び資産計上すべき借入コストが含まれております。

土地及び建設仮勘定以外の各資産の減価償却費は、それぞれの見積耐用年数にわたり、定額法で計上されています。主要な資産項目ごとの見積耐用年数は以下のとおりであります。

- ・建物及び構築物 2－50年
- ・機械装置及び運搬具 2－17年

なお、見積耐用年数、残存価額及び減価償却方法は、各年度末に見直しを行い、変更があった場合は、会計上の見積りの変更として将来に向かって適用しております。

(8) のれん

子会社の取得により生じたのれんは、連結財政状態計算書において、取得原価から減損損失累計額を控除した帳簿価額で計上しております。

のれんの償却は行わず、每期又は減損の兆候が存在する場合には、その都度、減損テストを実施しております。

のれんの減損損失は連結損益計算書において認識され、その後の戻入は行っておりません。

(9) 無形資産

個別に取得した無形資産は、当初認識時に取得原価で測定されます。

無形資産は、当初認識後、耐用年数を確定できない無形資産を除いて、それぞれの見積耐用年数にわたって定額法で償却され、取得原価から償却累計額及び減損損失累計額を控除した帳簿価額で計上されます。主要な無形資産の見積耐用年数は以下のとおりであります。なお、耐用年数を確定できない無形資産はありません。

- ・ソフトウェア 5年

なお、見積耐用年数、残存価額及び償却方法は、各年度末に見直しを行い、変更があった場合は、会計上の見積りの変更として将来に向かって適用しております。

(10) リース取引

契約上、資産の所有に伴うリスクと経済価値が実質的にすべて当社グループに移転するリースは、ファイナンス・リースに分類し、それ以外の場合には、オペレーティング・リースに分類しております。

ファイナンス・リース取引におけるリース資産は、リース開始日に算定したリース物件の公正価値と最低リース料総額の現在価値のいずれか低い金額で当初認識しております。当初認識後は、当該資産に適用される会計方針に基づいて、見積耐用年数とリース期間のいずれか短い年数にわたって、減価償却を行っております。

支払リース料は、金融費用とリース債務の返済額とに配分しています。金融費用は債務残高に対して一定の利子率となるように、リース期間にわたって各期間に配分しております。

オペレーティング・リース取引においては、リース料は連結損益計算書において、リース期間にわたって定額法により費用として認識しております。また、変動リース料は、発生した期間の費用として認識しております。

(11) 非金融資産の減損

棚卸資産及び繰延税金資産を除く当社グループの非金融資産は、期末日ごとに減損の兆候の有無を判断しております。減損の兆候が存在する場合は、当該資産の回収可能価額を見積っております。のれん及び耐用年数を確定できない、又は未だ使用可能ではない無形資産については、減損の兆候の有無にかかわらず毎期減損テストを実施しております。

資産又は資金生成単位の回収可能価額は、使用価値と売却費用控除後の公正価値のうちいずれか大きい方の金額としております。使用価値の算定において、見積将来キャッシュ・フローは、貨幣の時間的価値及び当該資産に固有のリスクを反映した税引前割引率を用いて現在価値に割り引いております。減損テストにおいて個別にテストされない資産は、継続的な使用により他の資産又は資産グループのキャッシュ・インフローから、概ね独立したキャッシュ・インフローを生成する最小の資金生成単位に統合しております。のれんの減損テストを行う際には、のれんが配分される資金生成単位を、のれんが関連する最小の単位を反映して減損がテストされるように統合しております。企業結合により取得したのれんは、結合のシナジーが得られると期待される資金生成単位に配分しております。

当社グループの全社資産は、独立したキャッシュ・インフローを生成いたしません。全社資産に減損の兆候がある場合、全社資産が帰属する資金生成単位の回収可能価額を決定しております。

減損損失は、資産又は資金生成単位の帳簿価額が見積回収可能価額を超過する場合に純損益として認識いたします。資金生成単位に関連して認識した減損損失は、原則として、まずその単位に配分されたのれんの帳簿価額を減額するように配分し、次に資金生成単位内のその他の資産の帳簿価額を比例的に減額いたします。

のれんに関連する減損損失は戻入いたしません。その他の資産については、過去に認識した減損損失は、毎期末日において損失の減少又は消滅を示す兆候の有無を評価しております。回収可能価額の決定に使用した見積りが変化した場合は、減損損失を戻し入れます。減損損失は、減損損失を認識しなかった場合の帳簿価額から必要な減価償却費及び償却額を控除した後の帳簿価額を超えない金額を上限として戻し入れます。

(12) 従業員給付

当社グループは、従業員の退職給付制度として確定給付制度と確定拠出制度を採用しております。

当社グループは、確定給付制度債務の現在価値及び関連する当期勤務費用並びに過去勤務費用を、予測単位積増方式を用いて算定しております。

割引率は、将来の毎年度の給付支払見込日までの期間を基に割引期間を設定し、割引期間に対応した期末日時点の優良社債の市場利回りに基づき算定しております。

確定給付制度に係る負債又は資産は、確定給付制度債務の現在価値から制度資産の公正価値を控除して算定しております。

確定給付制度の再測定額は、発生した期においてその他の包括利益として一括認識し、直ちにその他の資本の構成要素から利益剰余金に振り替えております。

過去勤務費用は、発生した期の純損益として処理しております。

確定拠出型の退職給付に係る費用は、拠出した時点で費用として認識しております。

(13) 株式に基づく報酬

当社グループは、持分決済型及び現金決済型の株式報酬制度を導入しております。

持分決済型の株式報酬は、受領した役務およびそれに対応する資本の増加を付与日における（資本性金融商品の）公正価値で測定し、権利確定期間にわたって費用として計上され、同額を資本の増加として認識しております。

現金決済型の株式報酬は、受領した役務および発生した負債を、当該負債の公正価値で測定し、権利確定期間にわたって費用として計上され、同額を負債の増加として認識しております。また当該負債の公正価値は決算日および決済日に再測定し、公正価値の変動を純損益として認識しております。

(14) 引当金

引当金は、過去の事象の結果として、当社グループが、現在の法的または推定的債務を負っており、当該債務を決済するために経済的資源の流出が生じる可能性が高く、当該債務の金額について信頼性のある見積りができる場合に認識しております。貨幣の時間価値の影響に重要性がある場合には、見積将来キャッシュ・フローを貨幣の時間的価値及び当該負債に特有のリスクを反映した税引前の利率を用いて現在価値に割り引いております。時の経過に伴う割引額の割戻しは金融費用として認識しております。

(15) 収益

当社グループは、以下の5ステップアプローチに基づき収益を認識しております。

- ステップ1：顧客との契約を識別する
- ステップ2：契約における履行義務を識別する
- ステップ3：取引価格を算定する
- ステップ4：取引価格を契約における履行義務に配分する
- ステップ5：企業が履行義務の充足時に収益を認識する

当社グループは、貴金属地金、マッサージチェア、電解水素水生成器、補聴器、電気暖房器等の販売を行っており、これらの製品販売については、製品の引渡時点において顧客が当該製品に対する支配を獲得し、履行義務が充足されると判断しており、当該製品の引渡時点で収益を認識しております。また、産業廃棄物の収集運搬及び中間処理等に係る収益については、産業廃棄物の処理完了時点において顧客が支配を獲得し履行義務が充足されると判断しており、当該産業廃棄物の処理完了時点で収益を認識しております。なお、消防・空調・衛生設備の設計・施工等、工事に係る収益については、履行義務の進捗に応じて収益を認識しております。進捗度の測定は、発生したコストに基づいたインプット法等により行っております。

また、収益は顧客との契約において約束された対価から、値引き、リベート及び返品等を控除した金額で測定しております。

当社グループは、履行義務を充足した時点から主として1年以内に顧客から対価の支払いを受けております。なお、重要な金融要素は含んでおりません。

(16) 法人所得税

法人所得税は、当期税金及び繰延税金から構成されております。これらは、企業結合に関連するもの、及び直接資本又はその他の包括利益で認識される項目を除き、純損益として認識しております。

当期税金は、税務当局に対する納付又は税務当局から還付が予想される金額で測定されます。税額の算定にあたっては、当社グループが事業活動を行い、課税対象となる純損益を稼得する国において、連結会計年度末日までに制定又は実質的に制定されている税率及び税法に従っております。

繰延税金資産及び負債は、決算日における資産及び負債の会計上の帳簿価額と税務上の金額との一時差異、繰越欠損金及び繰越税額控除に対して認識しております。

なお、以下の一時差異に対しては、繰延税金資産及び負債を計上しておりません。

- ・のれんの当初認識から生じる一時差異
- ・企業結合取引を除く、会計上の利益にも税務上の課税所得にも影響を与えない取引によって発生する資産及び負債の当初認識により生じる一時差異
- ・子会社及び関連会社に対する投資に係る将来加算一時差異のうち、当社グループが解消時期をコントロールでき、かつ予測可能な期間内に一時差異が解消しない可能性が高い場合

繰延税金負債は原則としてすべての将来加算一時差異について認識され、繰延税金資産は将来減算一時差異を使用できるだけの課税所得が稼得される可能性が高い範囲内で、すべての将来減算一時差異について認識されます。

繰延税金資産の帳簿価額は每期見直され、繰延税金資産の全額又は一部が使用できるだけの十分な課税所得が稼得されない可能性が高い部分については、帳簿価額を減額しております。未認識の繰延税金資産は每期再評価され、将来の課税所得により繰延税金資産が回収される可能性が高くなった範囲内で認識されます。

繰延税金資産及び負債は、連結会計年度末日において制定されている、又は実質的に制定されている法定税率及び税法に基づいて資産が実現する期間又は負債が決済される期間に適用されると予想される税率及び税法によって測定されます。

繰延税金資産及び負債は、当期税金負債と当期税金資産を相殺する法律上強制力のある権利を有し、かつ同一の税務当局によって同一の納税主体に課されている場合、相殺しております。

(17) 1株当たり利益

基本的1株当たり当期利益は、親会社の普通株主に帰属する当期利益を、その期間の自己株式を調整した発行済普通株式の加重平均株式数で除して計算しております。希薄化後1株当たり当期利益は、希薄化効果を有するすべての潜在株式の影響を調整して計算しております。

(18) セグメント別報告

事業セグメントとは、他の事業セグメントとの取引を含む、収益を稼得し費用を発生させる事業活動の構成単位であります。すべての事業セグメントの事業の成果は、個別にその財務情報が入手可能なものであり、かつ各セグメントへの経営資源の配分及び業績の評価を行うために、当社の取締役会が定期的にレビューしております。

(19) 売却目的で保有する資産

継続的な使用ではなく、売却により回収が見込まれる資産及び資産グループのうち、1年以内に売却する可能性が非常に高く、かつ通例又は慣例的な条件のみに従って、現状のままで直ちに売却可能で、当社グループの経営者が売却を確約している場合には、売却目的で保有する非流動資産及び処分グループとして分類し、非流動資産は減価償却又は償却は行わず、帳簿価額と売却費用控除後の公正価値のうち、いずれか低い方の金額で測定しております。非流動資産（又は処分グループ）の当初又はその後に行う売却費用控除後の公正価値までの評価減について減損損失を純損益で認識しております。売却費用控除後の公正価値がその後において増加した場合は評価益を純損益で認識しております。ただし、過去に認識した減損損失累計額を超えない金額を上限としております。

(20) 自己株式

自己株式は取得原価で評価され、資本から控除しております。当社の自己株式の購入、売却又は消却において利得又は損失は認識しておりません。なお、帳簿価額と売却時の対価との差額は、資本剰余金として認識されます。

4. 重要な会計上の見積り及び見積りを伴う判断

連結財務諸表の作成において、経営者は、会計方針の適用並びに資産、負債、収益及び費用の金額に影響を及ぼす判断、見積り及び仮定の設定を行うことが義務付けられております。実際の結果は、これらの見積りとは異なる場合があります。

見積り及びその基礎となる仮定は継続して見直されます。会計上の見積りの変更による影響は、その見積りを変更した会計期間及び影響を受ける将来の会計期間において認識されます。

経営者が行った当連結財務諸表の金額に重要な影響を与える見積り及び判断は、以下のとおりであります。

・有形固定資産、のれん及び無形資産の減損

当社グループは、有形固定資産、のれん及び無形資産について、注記「3. 重要な会計方針」に従って、減損テストを実施しております。減損テストにおける回収可能価額の算定において、将来のキャッシュ・フロー、割引率等について仮定を設定しております。これらの仮定については、経営者の最善の見積りと判断により決定しておりますが、将来の不確実な経済条件の変動の結果によって影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

・繰延税金資産の回収可能性

繰延税金資産は、将来減算一時差異等を使用できる課税所得が生じる可能性が高い範囲内で認識しております。課税所得が生じる可能性の判断においては、事業計画に基づき課税所得の発生時期及び金額を見積っております。このような見積りは、経営者による最善の見積りにより行っておりますが、将来の不確実な経済条件の変動等の結果によって実際の結果と異なる可能性があります。

5. 未適用の新基準

連結財務諸表の承認日までに主に以下の基準書及び解釈指針の新設又は改訂が公表されておりますが、当社グループはこれらを早期適用しておりません。

IFRS	強制適用時期 (以降開始年度)	当社グループ 適用時期	新設・改訂内容	
IFRS第16号	リース	2019年1月1日	2020年3月期	リースに関する会計処理を改定

(1) IFRS第16号 「リース」

IFRS第16号は、2016年1月に公表されました。当該基準は、現在適用されているIAS第17号「リース」（以下IAS第17号という。）及び関連する適用指針を置き換える基準となります。IFRS第16号は、借手のリースについてファイナンス・リースとオペレーティング・リースに分類するのではなく、単一の会計モデルを導入し、原則としてすべてのリースについて、原資産を使用する権利を表す使用権資産とリース料を支払う義務を表すリース負債を認識することを要求しています。ただし、短期リース又は少額リースである場合は、当該基準の要求を適用しないことを選択できます。使用権資産とリース負債を認識した後は、使用権資産の減価償却費及びリース負債に係る金利費用が計上されます。

当該基準の適用による連結財務諸表への影響については現在検討中ですが、借手のオペレーティング・リースに対しても単一の会計モデルが適用されることにより、資産と負債が増加する可能性があります。加えて、IAS第17号の下ではオペレーティング・リースに係るリース料は賃借料として計上しておりますが、IFRS第16号では使用権資産の減価償却費とリース負債に係る金利費用として計上されることになるため、費用の性質が変更となります。

IFRS第16号の適用にあたり、表示する比較年度に対しても遡及適用する方法と、適用開始日に適用による累積的影響を認識する方法のいずれかを選択することができます。当社グループは、本基準書を累積的影響法により適用することを予定しております。なお、IFRS第16号の適用による影響額については、現時点で評価中であります。

6. セグメント情報

(1) 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は純粋持株会社としてグループ全体の戦略機能を担い、各事業会社は貴金属・希少金属等のリサイクル及び精錬・加工事業、産業廃棄物処理その他の環境保全事業及び健康機器等の製造販売その他のライフ&ヘルス事業に従事しております。

したがって、当社グループは、事業部門を基礎とした製品・サービス別のセグメントから構成されており、「貴金属事業」、「環境保全事業」及び「ライフ&ヘルス事業」の3つを報告セグメントとしております。

なお、事業セグメントの集約は行っておりません。

「貴金属事業」は、貴金属含有スクラップ等から、金・銀・パラジウム・プラチナ等の貴金属・希少金属をリサイクルし販売する事業及び金・銀を中心とした貴金属の精錬・加工事業を主たる業務としております。

「環境保全事業」は、産業廃棄物の収集運搬及び中間処理を主たる業務としております。「ライフ&ヘルス事業」におきましては、マッサージ器・補聴器等の健康機器等の製造及び販売、電気暖房器の製造及び販売、放射冷暖房システムの設計及び施工、防災設備の設計・施工を主たる業務としております。

(2) セグメント収益及び業績

報告セグメントの会計方針は、注記「3. 重要な会計方針」で記載している当社グループの会計方針と同じであります。

当社グループの報告セグメントによる収益及び業績は以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

	報告セグメント				調整額	連結
	貴金属	環境保全	ライフ&ヘルス	合計		
	百万円	百万円	百万円	百万円		
売上収益						
外部収益	74,593	16,168	25,035	115,797	—	115,797
セグメント間収益	—	66	0	66	△66	—
合計	74,593	16,235	25,036	115,864	△66	115,797
セグメント利益（営業利益）	11,137	3,504	1,588	16,230	△2,439	13,791
金融収益						16
金融費用						△397
税引前利益						13,410
その他：						
減価償却費及び償却費	1,020	479	194	1,694	572	2,267
減損損失	33	33	52	119	0	120

(注) 1. セグメント間の取引は、市場実勢価格に基づいております。

2. セグメント利益の調整額は、主に各報告セグメントに配分していない全社費用であります。

3. 減損損失の詳細は、注記12. 有形固定資産及び注記13. のれん及び無形資産をご参照下さい。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

報告セグメント

	報告セグメント				調整額	連結
	貴金属	環境保全	ライフ&ヘルス	合計		
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
売上収益						
外部収益	87,804	17,156	23,708	128,669	—	128,669
セグメント間収益	—	41	0	42	△42	—
合計	87,804	17,197	23,709	128,711	△42	128,669
セグメント利益（営業利益）	11,992	3,530	1,512	17,034	△2,556	14,478
金融収益						33
金融費用						△1,106
税引前利益						13,405
その他：						
減価償却費及び償却費	986	639	207	1,833	487	2,320
減損損失	0	14	—	15	—	15

(注) 1. セグメント間の取引は、市場実勢価格に基づいております。

2. セグメント利益の調整額は、主に各報告セグメントに配分していない全社費用であります。

3. 減損損失の詳細は、注記12. 有形固定資産及び注記13. のれん及び無形資産をご参照下さい。

(3) 製品及びサービスに関する情報

セグメント情報として、同様の情報が開示されているため、記載を省略しております。

(4) 地域別に関する情報

売上収益及び非流動資産の地域別内訳は以下のとおりであります。

外部顧客からの売上収益

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
日本	84,952	89,610
スイス	11,554	19,329
その他	19,290	19,729
合計	115,797	128,669

(注) 売上収益は、顧客の所在地によっております。

非流動資産

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
日本	36,050	36,499
北米	4,596	7,320
その他	1,225	1,222
合計	41,872	45,043

(注) 非流動資産は、資産の所在地によっており、金融商品、繰延税金資産及び退職給付に係る資産を含んでおりません。

(5) 主要な顧客に関する情報

当社グループの売上高の10%以上を占める顧客グループは、前連結会計年度においては、1グループあり、当該顧客グループから生じた売上高は12,478百万円（貴金属セグメント）であります。当連結会計年度においては、2グループあり、当該顧客グループから生じた売上高は33,407百万円（貴金属セグメント）であります。

7. 現金及び現金同等物

現金及び現金同等物の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
現金及び現金同等物		
現金及び預金（預入期間3ヶ月以内）	24,140	16,297
合計	24,140	16,297

(注) 連結財政状態計算書における「現金及び現金同等物」の残高と連結キャッシュ・フロー計算書上における「現金及び現金同等物」の残高は一致しております。

8. 営業債権及びその他の債権

営業債権及びその他の債権の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
受取手形	1,497	1,452
売掛金	11,585	15,634
未収入金	23,907	49,417
貸倒引当金	△16	△15
合計	36,973	66,489

9. 棚卸資産

棚卸資産の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
商品及び製品	10,800	10,074
仕掛品	10,014	12,520
原材料及び貯蔵品	1,651	2,596
合計	22,466	25,191

費用として認識された棚卸資産の金額は、前連結会計年度が72,503百万円、当連結会計年度が83,130百万円であります。

費用として認識された棚卸資産の評価減の金額は、前連結会計年度が52百万円、当連結会計年度が45百万円であります。

なお、前連結会計年度及び当連結会計年度において、重要な評価減の戻し入れはありません。

10. その他の金融資産（流動）及び金融資産（非流動）

(1) その他の金融資産の内訳

その他の金融資産の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
デリバティブ資産	659	364
差入保証金	419	432
株式	110	72
その他	27	42
貸倒引当金	△18	△23
合計	1,198	888
流動資産	660	389
非流動資産	537	498
合計	1,198	888

デリバティブ資産は純損益を通じて公正価値で測定する金融資産、差入保証金及び定期預金は償却原価で測定する金融資産、株式はその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産にそれぞれ分類しております。

11. その他の資産

その他の資産の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
その他の流動資産		
前払費用	362	400
前渡金	733	1,686
未収消費税等	1,257	1,791
その他	26	29
合計	2,380	3,906
その他の非流動資産		
長期前払費用	18	18
その他	—	20
合計	18	39

12. 有形固定資産

(1) 増減表

有形固定資産の帳簿価額の増減は以下のとおりであります。

取得原価

	土地	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具器具 及び備品	建設仮勘定	合計
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
2017年4月1日残高	14,683	23,511	20,004	3,264	835	62,299
取得	10	—	—	—	3,010	3,020
売却又は処分	△42	△195	△1,156	△162	—	△1,556
科目振替	—	1,202	1,641	218	△3,062	—
在外営業活動体の換算差額	10	△40	△137	△3	△10	△181
2018年3月31日残高	14,662	24,478	20,352	3,316	772	63,582
取得	105	—	—	—	5,332	5,438
売却又は処分	△135	△336	△616	△125	—	△1,213
科目振替	—	1,706	2,611	366	△4,684	—
在外営業活動体の換算差額	△9	△11	61	1	5	47
2019年3月31日残高	14,622	25,836	22,409	3,559	1,425	67,854

減価償却累計額及び減損損失累計額

	土地	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具器具 及び備品	建設仮勘定	合計
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
2017年4月1日残高	△19	△11,944	△15,531	△2,816	—	△30,312
減価償却費	—	△725	△985	△211	—	△1,922
減損損失	△6	△94	△19	△0	—	△119
売却又は処分	19	70	1,251	161	—	1,503
在外営業活動体の換算差額	—	57	78	3	—	139
2018年3月31日残高	△6	△12,635	△15,206	△2,863	—	△30,712
減価償却費	—	△738	△1,037	△217	—	△1,992
減損損失	—	△15	△0	—	—	△15
売却又は処分	6	277	595	115	—	995
在外営業活動体の換算差額	—	△22	△22	△1	—	△46
2019年3月31日残高	—	△13,133	△15,671	△2,966	—	△31,771

(注) 有形固定資産の減価償却費は、連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に含まれております。

帳簿価額

	土地	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具器具 及び備品	建設仮勘定	合計
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
2017年4月1日残高	14,663	11,566	4,472	447	835	31,987
2018年3月31日残高	14,656	11,842	5,146	453	772	32,870
2019年3月31日残高	14,622	12,702	6,738	593	1,425	36,083

(2) 減損損失

有形固定資産は、概ね独立したキャッシュ・インフローを生成させるものとして識別される資産グループの最小単位を基礎としてグルーピングを行っております。

減損損失は、連結損益計算書の「その他の営業費用」に計上しております。

減損損失のセグメント別内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
貴金属	33	0
環境保全	33	14
ライフ&ヘルス	52	—
全社	—	—
合計	119	15

前連結会計年度において計上した減損損失の内容は以下のとおりであります。

貴金属セグメントにおける減損損失の主な内容は、アサヒホールディングス（株）の建物、設備の一部について、除却予定となったため、帳簿価額を回収可能価額であるゼロまで減額し、当該減少額を損失計上したものであります（27百万円）。

環境保全セグメントにおける減損損失の主な内容は、JWガラスリサイクル（株）の建物、設備の一部について、除却予定となったため、帳簿価額を回収可能価額であるゼロまで減額し、当該減少額を損失計上したものであります（26百万円）。

ライフ&ヘルスセグメントにおける減損損失の主な内容は、（株）フジ医療器九州支店の建物について売却予定となったため、帳簿価額を回収可能価額（46百万円）まで減額し、当該減少額を損失計上したものであります（52百万円）。なお、回収可能価額は処分コスト控除後の公正価値（売却価額）により測定しています。当該公正価値は観察不能なインプットを含む評価技法から算定された公正価値であり、そのヒエラルキーはレベル3です。

当連結会計年度において計上した減損損失の内容は以下のとおりであります。

環境保全セグメントにおける減損損失の主な内容は、アサヒプリテック（株）の建物、設備の一部について、除却予定となったため、帳簿価額を回収可能価額であるゼロまで減額し、当該減少額を損失計上したものであります（14百万円）。

(3) コミットメント

前連結会計年度及び当連結会計年度における決算日以降の有形固定資産の取得に係る重要なコミットメントはありません。

13. のれん及び無形資産

(1) 増減表

のれん及び無形資産の帳簿価額の増減は以下のとおりであります。

取得原価

	のれん	無形資産			
		ソフトウェア	ソフトウェア 仮勘定	その他	合計
		百万円	百万円	百万円	百万円
2017年4月1日	19,018	3,216	9	151	3,377
取得	5	—	189	—	189
売却又は処分	—	△2	—	—	△2
科目振替	—	179	△179	—	—
在外営業活動体の換算差額	—	△11	—	0	△10
2018年3月31日	19,023	3,382	20	152	3,554
取得	—	—	165	107	272
売却又は処分	—	△56	—	△0	△56
科目振替	—	152	△152	—	—
在外営業活動体の換算差額	—	6	—	△1	4
2019年3月31日	19,023	3,484	33	256	3,775

償却累計額及び減損損失累計額

	のれん	無形資産			
		ソフトウェア	ソフトウェア 仮勘定	その他	合計
		百万円	百万円	百万円	百万円
2017年4月1日	△10,780	△2,333	—	△125	△2,459
償却費	—	△340	—	△0	△341
減損損失	—	—	—	△0	△0
売却又は処分	—	2	—	—	2
在外営業活動体の換算差額	—	△15	—	△0	△15
2018年3月31日	△10,780	△2,687	—	△127	△2,814
償却費	—	△316	—	△1	△317
減損損失	—	—	—	—	—
売却又は処分	—	55	—	—	55
在外営業活動体の換算差額	—	△1	—	0	△1
2019年3月31日	△10,780	△2,949	—	△128	△3,077

(注) 無形資産の償却費は、連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に含まれております。

帳簿価額

	のれん	無形資産			
		ソフトウェア	ソフトウェア 仮勘定	その他	合計
		百万円	百万円	百万円	百万円
2017年4月1日	8,238	883	9	25	918
2018年3月31日	8,243	695	20	24	740
2019年3月31日	8,243	535	33	128	697

(2) のれんの減損

企業結合で生じたのれんは、取得日以降に企業結合から利益がもたらされる資金生成単位に配分しております。

のれんの帳簿価額のセグメント別内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
貴金属	19	19
環境保全	1,020	1,020
ライフ&ヘルス	7,202	7,202
合計	8,243	8,243

前連結会計年度において計上した減損損失はありません。

ライフ&ヘルスセグメントにおいて、のれんの減損損失は、資金生成単位の回収可能価額が帳簿価額を下回った場合に認識しております。回収可能価額は使用価値により測定しております。

重要なのれんであるフジ医療器の使用価値は、経営者が承認した今後2年度分の事業計画を基礎としたキャッシュ・フローの見積額を、当該資金生成単位の同業他社の加重平均資本コストを基礎とした税引前割引率9.2%により現在価値に割り引いて算定しております。事業計画の期間を超えるキャッシュ・フローは、資金生成単位が属する市場の長期平均成長率等をもとに推定しております。その結果、当年度末においては、回収可能価額が資金生成単位の帳簿価額を十分に上回っております。

回収可能価額の算定に用いた割引率について合理的な範囲で変動があった場合でも、回収可能価額が資金生成単位の帳簿価額を十分に上回っていることから、重要な減損損失が発生する可能性は低いと判断しております。

当連結会計年度において計上した減損損失はありません。

ライフ&ヘルスセグメントにおいて、のれんの減損損失は、資金生成単位の回収可能価額が帳簿価額を下回った場合に認識しております。回収可能価額は使用価値により測定しております。

重要なのれんであるフジ医療器の使用価値は、経営者が承認した今後2年度分の事業計画を基礎としたキャッシュ・フローの見積額を、当該資金生成単位の同業他社の加重平均資本コストを基礎とした税引前割引率9.6%により現在価値に割り引いて算定しております。事業計画の期間を超えるキャッシュ・フローは、資金生成単位が属する市場の長期平均成長率等をもとに推定しております。その結果、当年度末においては、回収可能価額が資金生成単位の帳簿価額を十分に上回っております。

回収可能価額の算定に用いた割引率について合理的な範囲で変動があった場合でも、回収可能価額が資金生成単位の帳簿価額を十分に上回っていることから、重要な減損損失が発生する可能性は低いと判断しております。

(3) コミットメント

前連結会計年度及び当連結会計年度における決算日以降の無形資産の取得に係る重要なコミットメントはありません。

14. 法人所得税

(1) 繰延税金資産及び繰延税金負債

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳及び増減は以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

	2017年 4月1日	純損益を通じて 認識（注）	その他の包括利益 において認識	2018年 3月31日
	百万円	百万円	百万円	百万円
繰延税金資産				
税務上の繰越欠損金	46	90	—	137
未払有給休暇	295	0	—	296
賞与引当金	209	35	—	244
未払事業税	62	77	—	139
売上割戻引当金	144	△56	—	87
金利通貨スワップ	362	—	157	519
その他	849	△105	△48	695
合計	1,970	41	108	2,120
繰延税金負債				
未実現損益	△956	5	—	△951
減価償却費及び償却費	△884	259	—	△624
企業結合による公正価値 評価差額	△107	—	—	△107
のれん調整額	△86	5	—	△80
その他	△557	4	△390	△943
合計	△2,592	274	△390	△2,708

(注) 純損益を通じて認識した額と繰延税金費用の合計額との差額は、為替の変動によるものであります。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

	2018年 4月1日	純損益を通じて 認識（注）	その他の包括利益 において認識	2019年 3月31日
	百万円	百万円	百万円	百万円
繰延税金資産				
税務上の繰越欠損金	137	6	—	143
未払有給休暇	296	△5	—	291
賞与引当金	244	△27	—	217
未払事業税	139	6	—	146
売上割戻引当金	87	△18	—	69
金利通貨スワップ	519	—	△163	356
その他	695	120	—	815
合計	2,120	82	△163	2,039
繰延税金負債				
未実現損益	△951	5	—	△945
減価償却費及び償却費	△624	29	—	△595
企業結合による公正価値 評価差額	△107	11	—	△95
のれん調整額	△80	△0	—	△81
その他	△943	△115	249	△809
合計	△2,708	△68	249	△2,527

(注) 純損益を通じて認識した額と繰延税金費用の合計額との差額は、為替の変動によるものであります。

繰延税金資産を認識していない税務上の繰越欠損金及び将来減算一時差異は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
税務上の繰越欠損金	13,839	15,079
将来減算一時差異	996	916
合計	14,836	15,996

繰延税金資産を認識していない税務上の繰越欠損金の失効予定は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
1年目	—	—
2年目	—	—
3年目	119	—
4年目	28	—
5年目	—	62
6年目	62	35
7年目	35	13,523
8年目	13,523	—
9年目	—	71
10年目	71	435
11年目以降	—	951
合計	13,839	15,079

前連結会計年度において損失を計上しており、かつ繰延税金資産の回収可能性が将来の課税所得の有無に依存している一部の子会社について、前連結会計年度末において、繰延税金資産を134百万円認識しております。また、当連結会計年度において損失を計上しており、かつ繰延税金資産の回収可能性が将来の課税所得の有無に依存している一部の子会社について、当連結会計年度末において、繰延税金資産を141百万円認識しております。

当社グループは業績見通し等に基づき、税務上の繰越欠損金を将来利用できる可能性を每期定期的に評価しております。認識された繰延税金資産については、過去の課税所得水準及び繰延税金資産が認識できる期間における将来課税所得の予測に基づき、税務便益が実現する可能性は高いと判断しております。

(2) 法人所得税費用

法人所得税費用の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
当期税金費用	4,254	4,423
繰延税金費用	△298	△18
合計	3,956	4,404

当社グループは、主に法人税、住民税及び損金算入される事業税を課されており、これらを基礎として計算した前連結会計年度及び当連結会計年度の法定実効税率はそれぞれ30.9%、30.6%であります。ただし、海外子会社についてはその所在地における法人税等が課されております。

法定実効税率と平均実際負担税率との差異要因は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	%	%
法定実効税率	30.9	30.6
在外子会社税率差異	△0.1	△0.0
永久に損金に算入されない項目	0.1	0.3
永久に益金に算入されない項目	0.0	0.0
試験研究費等の税額控除	△0.1	△0.2
外国源泉税	0.1	0.1
未認識の繰延税金資産の増減	△1.0	1.4
その他	△0.2	0.8
平均実際負担税率	29.5	32.9

繰延税金費用には、繰延税金資産の評価減又は以前に計上した評価減の戻入（繰延税金資産の回収可能性の評価）により生じた費用の額が含まれております。これにともなう当連結会計年度における繰延税金費用の増減額は252百万円（増加）であります。

15. 借入金（その他の金融負債含む）

(1) 金融負債の内訳

「借入金」及び「その他の金融負債」の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)	平均利率 (注)	返済期限
	百万円	百万円	%	
短期借入金	21,505	44,712	2.919	—
1年内返済予定の長期借入金	1,010	—	—	—
長期借入金	18,600	19,085	0.136	2020年
デリバティブ債務（流動）	455	1,445	—	—
デリバティブ債務（非流動）	1,696	1,163	—	—
その他	109	220	—	—
合計	43,376	66,627	—	—
流動負債	23,021	46,250	—	—
非流動負債	20,355	20,377	—	—
合計	43,376	66,627	—	—

(注) 「平均利率」については、当年度末残高に対する加重平均利率を記載しております。また、金利スワップを行いヘッジ会計を適用している借入金については、金利スワップ後の固定金利を適用しております。

(2) 担保に供している資産

社債及び借入金の担保に供している資産は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
土地	160	160
建物及び構築物	62	59
合計	223	219

対応する債務は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
短期借入金	50	50
合計	50	50

16. リース

解約不能オペレーティング・リース

解約不能のオペレーティング・リースに基づく将来の最低リース料総額は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
1年以内	202	162
1年超5年以内	282	323
5年超	—	—
合計	484	486

費用として認識されたオペレーティング・リース契約のリース料は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
最低リース料総額	403	875
合計	403	875

当社グループは、借手として、車両等の資産を賃借しております。

リース契約の一部については、更新オプションを含むものがあります。購入選択権及びエスカレーション条項並びに、リース契約によって課された制限（追加借入及び追加リースに関する制限等）はありません。

17. 営業債務及びその他の債務

営業債務及びその他の債務の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
支払手形	1,086	1,224
買掛金	6,040	7,748
未払金	5,758	6,435
未払費用	1,295	1,536
返金負債	—	223
合計	14,179	17,169

18. 従業員給付

一部の連結子会社は、従業員の退職給付に充てるため、積立型、非積立型の確定給付制度及び確定拠出制度を採用しております。

確定給付企業年金制度では、給与と勤務期間に基づいた一時金又は年金を支給します。

また積立型の確定給付企業年金制度は、当社グループと法的に分離された年金運用受託機関により運営されており、所定の方針に基づき制度資産の運用を行う責任を負っております。

なお、投資方針については、確定給付企業年金制度の財政状況や運用環境を勘案しながら、必要に応じて見直しを行うこととしています。

制度資産は健全な運用を基礎としておりますが、金融商品に係る投資リスクに晒されております。また、確定給付制度債務は割引率等の様々な年金数理計算上の仮定に基づき測定されているため、それらの仮定の変動によるリスクに晒されております。

(1) 確定給付制度

① 確定給付制度債務及び制度資産の調整表

確定給付制度債務及び制度資産と連結財政状態計算書に計上された確定給付負債及び資産の純額との関係は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
積立型の確定給付制度債務の現在価値	2,419	2,640
制度資産の公正価値	△2,491	△2,627
小計	△72	12
非積立型の確定給付制度債務の現在価値	100	96
確定給付負債及び資産の純額	28	109
連結財政状態計算書上の金額		
退職給付に係る負債	153	157
退職給付に係る資産	△124	△47
連結財政状態計算書に計上された確定給付負債及び資産の純額	28	109

② 確定給付制度債務の現在価値の調整表

確定給付制度債務の現在価値の増減は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
確定給付制度債務の現在価値の期首残高	2,587	2,520
勤務費用	111	105
利息費用	90	84
再測定		
人口統計上の仮定の変化により生じた数理計算上の差異	17	—
財務上の仮定の変化により生じた数理計算上の差異	△0	144
実績の修正により生じた数理計算上の差異	—	△15
制度加入者による拠出	12	11
給付支払額	△254	△114
在外営業活動体の換算差額	△43	0
確定給付制度債務の現在価値の期末残高	2,520	2,737

確定給付制度債務の加重平均デュレーションは、前連結会計年度において18年、当連結会計年度において15年であります。

③ 制度資産の公正価値の調整表

制度資産の公正価値の増減は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
制度資産の公正価値の期首残高	2,508	2,491
利息収益	95	91
再測定		
制度資産に係る収益	57	58
事業主からの拠出金	124	83
給付支払額	△243	△99
在外営業活動体の換算差額	△51	4
その他	△0	△2
制度資産の公正価値の期末残高	2,491	2,627

当社グループは、翌連結会計年度（2020年3月期）に81百万円の掛金を拠出する予定であります。

④ 制度資産の項目ごとの内訳

制度資産の主な項目ごとの内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)			当連結会計年度 (2019年3月31日)		
	活発な市場 価格のある 資産	活発な市場 価格のない 資産	合計	活発な市場 価格のある 資産	活発な市場 価格のない 資産	合計
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
現金及び現金同等物	37	—	37	25	—	25
資本性金融商品						
国内株式	1	—	1	—	—	—
外国株式	603	—	603	614	—	614
負債性金融商品						
国内債券	13	—	13	9	—	9
外国債券	1,835	—	1,835	1,969	—	1,969
その他	—	—	—	8	—	8
合計	2,491	—	2,491	2,627	—	2,627

⑤ 主な数理計算上の仮定

数理計算に用いた主な仮定は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	%	%
割引率	3.6	3.3

⑥ 感応度分析

数理計算に用いた割引率が0.5%変動した場合に、確定給付制度債務の現在価値に与える影響は以下のとおりであります。感応度分析は、その他の変数が一定との前提を置いておりますが、実際には独立して変化するとは限りません。なお、マイナスは確定給付制度債務の減少を、プラスは確定給付制度債務の増加を表しております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
割引率が0.5%上昇した場合	△198	△169
割引率が0.5%低下した場合	175	171

(2) 確定拠出制度

確定拠出制度に関して費用として認識された金額は、前連結会計年度が1,109百万円、当連結会計年度が1,114百万円であります。

(注) 本邦の厚生年金保険法に基づく厚生年金保険料の事業主負担分を含めております。

(3) 従業員給付費用

前連結会計年度及び当連結会計年度における連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に含まれる従業員給付費用の合計額は、それぞれ15,463百万円及び15,407百万円であります。

19. 引当金

引当金の内訳及び増減は以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

	賞与引当金	売上割戻引当金	その他の引当金	合計
	百万円	百万円	百万円	百万円
2017年4月1日	816	357	316	1,490
当期計上額	841	240	401	1,482
期中減少額（目的使用）	△762	△357	△285	△1,406
期中減少額（戻入）	△46	—	△30	△76
在外営業活動体の換算差額	△5	—	—	△5
2018年3月31日	843	240	401	1,484

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

	賞与引当金	売上割戻引当金	その他の引当金	合計
	百万円	百万円	百万円	百万円
2018年4月1日	843	240	401	1,484
当期計上額	850	—	358	1,208
期中減少額（目的使用）	△820	△240	△370	△1,431
期中減少額（戻入）	△27	—	△30	△58
在外営業活動体の換算差額	2	—	—	2
2019年3月31日	848	—	358	1,207

(1) 賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

将来において経済的便益の流出が予測される時期は、各連結会計年度末日より1年以内の時期であります。

(2) 売上割戻引当金

一部の連結子会社は、将来の売上割戻に備えるため、売上割戻金見込額のうち、当連結会計年度の負担に属する金額を計上しております。

将来において経済的便益の流出が予測される時期は、各連結会計年度末日より1年以内の時期であります。

なお、当連結会計年度より「IFRS第15号」を適用しており、当該レポート等の見積りに係る負債は返金負債として開示しております。

引当金の連結財政状態計算書における内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
流動負債		
合計	1,484	1,207
	1,484	1,207

20. その他の負債

その他の負債の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	百万円	百万円
その他の流動負債		
預り金	1,605	1,695
未払有給休暇	1,045	1,009
未払消費税等	150	181
前受金	585	644
その他	12	10
合計	3,400	3,540

21. 資本及びその他の資本項目

(1) 資本金及び資本剰余金

授権株式数、発行済株式数及び資本金等の残高の増減は以下のとおりであります。

	授権株式数	発行済株式数 (注1, 3)	資本金	資本剰余金 (注2)
	株	株	百万円	百万円
前連結会計年度期首 (2017年4月1日)	129,000,000	36,254,344	4,480	6,126
期中増減	—	3,600,000	3,309	4,254
前連結会計年度 (2018年3月31日)	129,000,000	39,854,344	7,790	10,381
期中増減	—	—	—	△27
当連結会計年度 (2019年3月31日)	129,000,000	39,854,344	7,790	10,353

(注) 1. 当社の発行する株式は、すべて権利内容に何ら限定のない無額面の普通株式であり、発行済株式は全額払込済みとなっております。

2. 日本における会社法 (以下、会社法) では、株式の発行に対しての払込み又は給付の2分の1以上を資本金に組み入れ、残りは資本剰余金に含まれている資本準備金に組み入れることが規定されております。また、会社法では、資本準備金は株主総会の決議により、資本金に組み入れることができます。

3. 前連結会計年度における発行済株式数の増加は、2017年12月4日に公募による新株式の発行により2,720,000株、2018年1月9日にオーバーアロットメントによる売り出しに関連して、大和証券株式会社へ880,000株発行したことによるものであります。

(2) 自己株式

自己株式数及び残高の増減は以下のとおりであります。

		株式数	金額
		株	百万円
前連結会計年度期首 (2017年4月1日)	(注) 5	3,654,987	△5,371
期中増減	取得 (注) 1	300	△0
	処分 (注) 2	△3,400,000	4,985
前連結会計年度 (2018年3月31日)	(注) 5	255,287	△386
期中増減	取得 (注) 3	357,800	△744
	処分 (注) 4	△107,600	175
当連結会計年度 (2019年3月31日)	(注) 5	505,487	△955

(注) 1. 自己株式の取得による株式数の増加は、単元未満株式の買取による増加であります。

2. 自己株式の処分による株式数の減少は、公募による自己株式の処分に伴う減少であります。

3. 自己株式の取得による株式数の増加のうち、市場買付による増加は357,700株であります。残りは、単元未満株式の買取による増加であります。

4. 自己株式の処分による株式数の減少は、役員報酬BIP及び株式付与ESOPに係る自己株式の処分による減少であります。

5. 2017年4月1日、2018年3月31日および2019年3月31日残高の株式数には、役員報酬BIP信託及び株式付与ESOP信託が保有する当社株式、それぞれ222,000株、222,000株及び472,100株を含めて表示しております。

(3) 利益剰余金

利益剰余金の内容は以下の項目に区分されます。

① 利益準備金

会社法では、剰余金の配当として支出する金額の10分の1を、資本準備金及び利益準備金の合計額が資本金の4分の1に達するまで資本準備金又は利益準備金として積み立てることが規定されております。積み立てられた利益準備金は、欠損填補に充当できます。また、株主総会の決議をもって、利益準備金を取り崩すことができることとされております。

② その他利益剰余金

その他利益剰余金は、当社グループの稼得した未処分の留保利益であります。

(4) その他の資本の構成要素

① その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産の公正価値の変動額であります。

② 確定給付制度の再測定

確定給付制度債務に係る数理計算上の差異、制度資産に係る収益（制度資産に係る利息収益の金額を除く）等で構成されております。

③ キャッシュ・フロー・ヘッジ

キャッシュ・フロー・ヘッジとして指定したデリバティブ金融商品の公正価値の正味変動額のうち、有効と認められる部分であります。

④ 在外営業活動体の換算差額

在外営業活動体の財務諸表を当社グループの表示通貨へ換算する際に発生した換算差額であります。

22. 配当金

配当金の支払額は以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

決議日	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
	百万円	円		
2017年5月10日 取締役会	984	30.00	2017年3月31日	2017年5月31日
2017年10月26日 取締役会	984	30.00	2017年9月30日	2017年11月27日

- (注) 1 2017年5月10日取締役会決議による配当金の総額には、株式付与ESOP信託および役員報酬BIP信託が所有する自社の株式に対する配当金6百万円が含まれております。
- 2 2017年10月26日取締役会決議による配当金の総額には、株式付与ESOP信託および役員報酬BIP信託が所有する自社の株式に対する配当金6百万円が含まれております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

決議日	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
	百万円	円		
2018年5月8日 取締役会	1,314	33.00	2018年3月31日	2018年5月30日
2018年10月25日 取締役会	2,389	60.00	2018年9月30日	2018年11月26日

- (注) 1 2018年5月8日取締役会決議による配当金の総額には、株式付与ESOP信託および役員報酬BIP信託が所有する自社の株式に対する配当金7百万円が含まれております。
- 2 2018年10月25日取締役会決議による配当金の総額には、株式付与ESOP信託および役員報酬BIP信託が所有する自社の株式に対する配当金28百万円が含まれております。

配当の効力発生日が翌連結会計年度となるものは以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

決議日	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
	百万円	円		
2018年5月8日 取締役会	1,314	33.00	2018年3月31日	2018年5月30日

- (注) 2018年5月8日取締役会決議による配当金の総額には、株式付与ESOP信託および役員報酬BIP信託が所有する自社の株式に対する配当金7百万円が含まれております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

決議日	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
	百万円	円		
2019年5月8日 取締役会	2,389	60.00	2019年3月31日	2019年5月29日

- (注) 2019年5月8日取締役会決議による配当金の総額には、株式付与ESOP信託および役員報酬BIP信託が所有する自社の株式に対する配当金28百万円が含まれております。

23. 売上収益

(1) 収益の分解

当社グループは、貴金属事業、環境保全事業、ライフ&ヘルス事業の3つの事業ユニットを基本にして組織が構成されており、当社の取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績の評価をするために、定期的に検討を行う対象としていることから、これらの3事業で計上する収益を売上収益の内訳として表示しております。

また、地域別の収益は販売元の所在地に基づき分解しております。これらの分解した収益とセグメント売上収益との関連は以下のとおりであります。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	貴金属	環境保全	ライフ&ヘルス	合計
日本	79,701	17,156	23,706	120,564
北米	6,658	—	1	6,659
アジア	1,445	—	—	1,445
合計	87,804	17,156	23,708	128,669

貴金属事業においては、貴金属地金・製品等の販売を行っており、商社、半導体・電子部品メーカー等を主な顧客としております。

環境保全事業においては、主に産業廃棄物の収集運搬及び中間処理といった役務提供を行っており、各業界の工場、印刷所、病院等を主な顧客としております。

ライフ&ヘルス事業においてはマッサージチェア、電解水素水生成器、補聴器、電気暖房器等の製造・販売、保証サービス及び消防・空調・衛生設備の設計・施工等を行っており、家電量販店、J A、地域家電販売店、通信販売会社、公共施設・病院・文化施設及び商業施設等を主な顧客としております。

これらの収益は、注記「3. 重要な会計方針」に従って、会計処理しています。

(2) 契約残高の変動

顧客との契約から生じた債権及び契約負債の内訳は、以下のとおりであります。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

	連結財政状態計算書 上の表示科目	2018年4月1日	2019年3月31日
		百万円	百万円
顧客との契約から生じた債権			
受取手形及び売掛金	営業債権及びその他の債権	13,082	17,087
契約負債等			
前受金	その他の流動負債	585	644
返金負債	営業債務及びその他の債務	252	223

顧客との契約から生じた負債のうち、報告期間の末日までの販売に関連して顧客に支払われると予想される達成リポート等の見積り及び返品に係る負債を、返金負債として認識しております。

当連結会計年度の期首現在の前受金残高は、当連結会計年度の収益として認識しております。また、当連結会計年度において、過去の期間に充足した履行義務から認識した収益の額に重要性はありません。

(3) 残存履行義務に配分した取引価格

当社グループにおいては、個別の予想契約期間が1年を超える重要な取引がないため、実務上の便法を使用し、残存履行義務に関する情報の記載を省略しております。また、顧客との契約から生じる対価の中に、取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(4) 顧客との契約の獲得又は履行のためのコストから認識した資産

当連結会計年度において、顧客との契約の獲得又は履行のためのコストから認識した資産の額に重要性はありません。また、認識すべき資産の償却期間が1年以内である場合には、実務上の便法を使用し、契約の獲得の増分コストを発生時に費用として認識しております。

24. 販売費及び一般管理費

販売費及び一般管理費の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
人件費	6,504	6,526
減価償却費及び償却費	539	459
旅費交通費	377	433
広告宣伝費	723	742
研究開発費	505	454
賃借料	593	537
リース料	234	399
販売手数料	1,581	1,563
支払手数料	624	602
その他	2,718	3,238
合計	14,403	14,959

25. その他の営業収益及び営業費用

その他の営業収益の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
事業譲渡益	10	—
固定資産売却益	155	112
その他	78	106
合計	244	219

その他の営業費用の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
減損損失	120	15
固定資産除却損	69	42
その他	156	232
合計	346	290

減損損失は有形固定資産及び無形資産にかかる減損であります（注記「12. 有形固定資産」「13. のれん及び無形資産」をご参照下さい）。

26. 金融収益及び金融費用

金融収益の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
受取利息		
償却原価で測定する金融資産	14	32
受取配当金		
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	2	0
合計	16	33

金融費用の内訳は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
支払利息		
償却原価で測定する金融負債	381	1,103
為替差損	6	2
その他	9	—
合計	397	1,106

27. その他の包括利益

その他の包括利益の各項目別の当期発生額及び純損益への組替調整額、並びに税効果の影響は以下のとおりであります。

前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

	当期発生額	組替調整額	税効果前	税効果	税効果後
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
純損益に振り替えられることのない項目					
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	27	—	27	△8	19
確定給付制度の再測定	52	—	52	△13	38
純損益に振り替えられることのない項目合計	80	—	80	△22	57
純損益に振り替えられる可能性のある項目					
キャッシュ・フロー・ヘッジ	2,842	△2,499	342	△272	69
在外営業活動体の換算差額	△37	32	△4	—	△4
純損益に振り替えられる可能性のある項目合計	2,805	△2,467	337	△272	65
合計	2,885	△2,467	418	△295	122

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

	当期発生額	組替調整額	税効果前	税効果	税効果後
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
純損益に振り替えられることのない項目					
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	△25	—	△25	7	△17
確定給付制度の再測定	△94	—	△94	24	△69
純損益に振り替えられることのない項目合計	△119	—	△119	32	△86
純損益に振り替えられる可能性のある項目					
キャッシュ・フロー・ヘッジ	1,578	△2,825	△1,246	78	△1,168
在外営業活動体の換算差額	△112	—	△112	—	△112
純損益に振り替えられる可能性のある項目合計	1,465	△2,825	△1,359	78	△1,280
合計	1,346	△2,825	△1,478	111	△1,367

28. 1株当たり情報

普通株主に帰属する基本的1株当たり当期利益及び希薄化後1株当たり当期利益の算定基礎は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
親会社の普通株主に帰属する当期利益		
親会社の所有者に帰属する当期利益 (百万円)	9,416	9,000
親会社の普通株主に帰属しない当期利益 (百万円)	—	—
1株当たり当期利益の算定に使用する当期利益 (百万円)	9,416	9,000
普通株式の加重平均株式数 (株)	34,775,417	39,453,473
希薄化効果の影響 (株)	112,800	161,261
希薄化効果の影響調整後 (株)	34,888,217	39,614,734
1株当たり当期利益		
基本的1株当たり当期利益 (円)	270.77	228.14
希薄化後1株当たり当期利益 (円)	269.90	227.21

29. キャッシュ・フロー情報

財務活動に係る負債の変動

財務活動に係る負債の変動は以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

	キャッシュ・フローを伴わない変動					2018年 3月31日
	2017年 4月1日	キャッシュ・ フローを伴う 変動	在外営業活動 体の換算差額	外国為替レ ートの変動	その他	
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	
短期借入金	2,450	20,092	△1,037	—	—	21,505
長期借入金	20,465	△270	—	△595	10	19,610
リース債務	71	△38	△0	—	73	106
合計	22,986	19,784	△1,037	△595	83	41,222

(注) 長期借入金には、1年内返済予定の長期借入金が2017年4月1日及び2018年3月31日にそれぞれ270百万円、1,010百万円含まれております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

	キャッシュ・フローを伴わない変動					2019年 3月31日
	2018年 4月1日	キャッシュ・ フローを伴う 変動	在外営業活動 体の換算差額	外国為替レ ートの変動	その他	
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	
短期借入金	21,505	23,645	△438	—	—	44,712
長期借入金	19,610	△1,010	—	475	10	19,085
リース債務	106	△59	0	—	166	213
合計	41,222	22,576	△438	475	176	64,011

(注) 長期借入金には、1年内返済予定の長期借入金が2018年4月1日に1,010百万円含まれております。

30. 株式に基づく報酬

当社は、取締役（社外取締役、非常勤取締役および監査等委員を除く。以下同じ。）及び当社従業員（一部の当社子会社従業員含む。以下同じ。）に対して、持分決済型の株式報酬制度及び現金決済型の株式報酬制度を採用しております。

(1) 持分決済型の株式報酬制度

取締役に対しては、役員報酬BIP (Board Incentive Plan) 信託（以下「BIP信託」）と称される仕組みを採用しております。また、当社の従業員に対しては、株式付与ESOP (Employee Stock Ownership Plan) 信託（以下「ESOP信託」）と称される仕組みを採用しております。

BIP信託は、これまで以上に当社グループの業績向上と企業価値の増大への貢献意識を高めることを目的として、会社業績との連動性が高く、かつ透明性・客観性の高い役員報酬制度として、2016年3月に導入いたしました。また、ESOP信託は、当社の業績や株価への意識を高めることにより、業績向上を目指した業務遂行を一層促進するとともに、中長期的な企業価値向上を図ることを目的としたインセンティブ・プランとして、2016年3月に導入いたしました。

当制度は、取締役及び当社従業員に対して、業績達成率・役位に応じて毎年一定の日にポイントを付与します。その後、「第7次中期経営計画」の達成度に応じたポイント数に相当する当社株式が交付されます。

当制度では、原則として2018年8月に権利が確定します。

権利確定条件は、基準ポイント付与日以降、原則として権利確定日まで勤続していることとなっております。

なお、当制度は、株式を交付等するものでありますので、行使価格はありません。

当社は2018年度において、当BIP信託及びESOP信託について制度を延長しております。

取締役及び当社従業員に対して、2018年度から2020年度までの3連結会計年度を対象とし、各年度の連結営業利益の業績目標達成度に応じたポイント数に相当する当社株式が交付されます。

当制度では、原則として2021年8月に権利が確定します。

BIP信託に関して計上された費用は、2018年3月期及び2019年3月期においてそれぞれ16百万円、25百万円であります。

ESOP信託に関して計上された費用は、2018年3月期及び2019年3月期においてそれぞれ25百万円、26百万円であります。

① BIP信託

2018年3月期及び2019年3月期に付与されたポイントの公正価値はそれぞれ1,955円、1,728円であります。

2018年3月期及び2019年3月期に付与されたポイントの公正価値は付与日の株価に近似していることから付与日の株価を使用しております。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	ポイント数	ポイント数
期首残高	41,600	56,000
権利付与	20,800	24,000
権利失効	△6,400	△1,600
権利行使	—	△54,400
期末残高	56,000	24,000
期末行使可能残高	—	—

ポイントの残存契約年数は、前連結会計年度末時点で5ヶ月であり、当連結会計年度末で2年5ヶ月であります。

② ESOP信託

2018年3月期及び2019年3月期に付与されたポイントの公正価値はそれぞれ1,955円、1,728円でありま
す。

2018年3月期に付与されたポイントの公正価値は付与日の株価に近似していることから付与日の株価を使
用しております。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	ポイント数	ポイント数
期首残高	55,900	84,800
権利付与	31,100	55,900
権利失効	△2,200	△4,400
権利行使	—	△80,400
期末残高	84,800	55,900
期末行使可能残高	—	—

ポイントの残存契約年数は、前連結会計年度末時点で5ヶ月であり、当連結会計年度末で2年5ヶ月であ
ります。

(2) 現金決済型の株式報酬制度

当社は、当社従業員に対して、株式等の価格を基礎とする金額で現金の支払いを行う現金決済型による株式
報酬を付与しております。

当制度は、当社従業員に対して、業績達成率・役位に応じて毎年一定の日にポイントを付与します。その
後、「第7次中期経営計画」の達成度に応じたポイント数に相当する株価相当額を現金で支払います。

当制度では、原則として2018年8月に権利が確定します。

権利確定条件は、基準ポイント付与日以降、原則として権利確定日まで勤続していることとなっております。

なお、当制度は、株価を基礎として報酬額が決定し、支払いがなされるものでありますので、行使価格はあ
りません。

当社は2018年度において、当制度を延長しております。

当社従業員に対して、2018年度から2020年度までの3連結会計年度を対象とし、各年度の連結営業利益の業
績目標達成度に応じたポイント数に相当する株価相当額を現金で支払います。

当制度では、原則として2021年8月に権利が確定します。

現金決済型の株式報酬に関して計上された費用は、2018年3月期及び2019年3月期においてそれぞれ29百万
円、55百万円であります。

現金決済型の株式報酬に関する負債の帳簿価額は、2018年3月31日時点において40百万円であります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	ポイント数	ポイント数
期首残高	55,900	84,800
権利付与	31,100	55,900
権利失効	△2,200	△4,400
権利行使	—	△80,400
期末残高	84,800	55,900
期末行使可能残高	—	—

31. 金融商品

(1) 資本管理

当社グループは、経営の健全性・効率性を堅持し、持続的な成長を実現するため、安定的な財務基盤を構築および維持することを資本リスク管理の基本方針としております。当該方針に沿い、競争力のある製品の開発・販売を通じて獲得している潤沢な営業キャッシュ・フローを基盤として、事業上の投資、配当等による株主還元、借入返済を実施しております。

資本管理においてモニタリングする主な指標として、資本とROEがあり、各年度の数値は以下のとおりであります。

		前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
資本(注1)	(百万円)	64,435	67,804
ROE(注2)	%	17.3	13.6

- (注) 1. 親会社の所有者に帰属する持分
2. 親会社の所有者に帰属する当期利益/親会社の所有者に帰属する持分(期首・期末平均)

(2) 財務上のリスク管理

当社グループは、経営活動を行う過程において、財務上のリスク(信用リスク・流動性リスク・為替リスク・金利リスク・市場価格の変動リスク)に晒されており、当該財務上のリスクを軽減するために、リスク管理を行っております。

また、当社グループは、市場リスクをヘッジするために、先物為替予約、金利スワップ等のデリバティブ金融商品を利用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

(3) 信用リスク管理

信用リスクは、顧客が契約上の債務に関して債務不履行になり、当社グループに財務上の損失を発生させるリスクであります。

当社グループは、与信管理規程等に基づいて、取引先に対して与信限度額を設定し、管理しております。

当社グループの債権は、広範囲の産業や地域に広がる多数の取引先に対する債権から構成されており、単独の相手先又はその相手先が所属するグループについて、過度に集中した信用リスクを有しておりません。

連結財務諸表に表示されている金融資産の減損後の帳簿価額は、獲得した担保の評価額を考慮に入れない、当社グループの金融資産の信用リスクに対するエクスポージャーの最大値であります。

これらの信用リスクに係るエクスポージャーに関し、担保として保有する物件及びその他の信用補完するものはありません。

① 信用リスク・エクスポージャー

営業債権及びその他の債権に係る当社グループの信用リスク・エクスポージャーは、以下のとおりであります。

前連結会計年度(2018年3月31日)

延滞日数	貸倒引当金が 12ヶ月の予想 信用損失と 等しい金額で 測定されるもの	貸倒引当金が全期間の予想信用損失に 等しい金額で測定されるもの			合計
		信用リスクが当 初認識以降に著 しく増大した 金融資産	信用減損 金融資産	営業債権及び その他の債権	
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
延滞なし	426	—	—	36,653	37,080
30日以内	—	—	—	266	266
30日超60日以内	—	—	—	58	58
60日超90日以内	—	—	—	3	3
90日超	—	—	1	7	9
合計	426	—	1	36,990	37,418

当連結会計年度（2019年3月31日）

延滞日数	貸倒引当金が 12ヶ月の予想 信用損失と 等しい金額で 測定されるもの	貸倒引当金が全期間の予想信用損失に 等しい金額で測定されるもの			合計
		信用リスクが当 初認識以降に著 しく増大した 金融資産	信用減損 金融資産	営業債権及び その他の債権	
		百万円	百万円	百万円	
延滞なし	445	—	—	66,101	66,546
30日以内	—	—	0	350	351
30日超60日以内	—	—	—	26	26
60日超90日以内	—	—	—	14	14
90日超	—	—	5	12	17
合計	445	—	5	66,504	66,956

② 貸倒引当金の増減分析

当社グループは、取引先の信用状態に応じて営業債権等の回収可能性を検討し、貸倒引当金を算定しております。

貸倒引当金の増減は以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

	貸倒引当金が 12ヶ月の予想 信用損失と 等しい金額で 測定されるもの	貸倒引当金が全期間の予想信用損失に 等しい金額で測定されるもの			合計
		信用リスクが当 初認識以降に著 しく増大した 金融資産	信用減損 金融資産	営業債権及び その他の債権	
		百万円	百万円	百万円	
2017年4月1日残高	17	—	2	17	38
当期増加額（繰入額）	—	—	0	17	17
当期減少（目的使用）	—	—	△0	—	△0
当期減少（戻入）	—	—	△1	△18	△19
在外営業活動体の換算差額	—	—	—	△0	△0
2018年3月31日残高	17	—	1	16	35

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

	貸倒引当金が 12ヶ月の予想 信用損失と 等しい金額で 測定されるもの	貸倒引当金が全期間の予想信用損失に 等しい金額で測定されるもの			合計
		信用リスクが当 初認識以降に著 しく増大した 金融資産	信用減損 金融資産	営業債権及び その他の債権	
		百万円	百万円	百万円	
2018年4月1日残高	17	—	1	16	35
当期増加額（繰入額）	—	—	4	17	22
当期減少（目的使用）	—	—	△0	△2	△2
当期減少（戻入）	—	—	—	△16	△16
在外営業活動体の換算差額	—	—	—	△0	△0
2019年3月31日残高	17	—	5	15	39

(4) 流動性リスク管理

流動性リスクは、当社グループが期限の到来した金融負債の返済義務を履行するにあたり、支払期日にその支払を実行できなくなるリスクであります。

当社グループは、適切な返済資金を準備するとともに、金融機関より随時利用可能な信用枠を確保し、継続的にキャッシュ・フローの計画と実績をモニタリングすることで流動性リスクを管理しております。

金融負債（デリバティブ金融商品を含む）の期日別残高は以下のとおりであります。

前連結会計年度（2018年3月31日）

	帳簿価額	契約上の金額	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
非デリバティブ金融負債								
営業債務及びその他の債務	14,179	14,179	14,179	—	—	—	—	—
短期借入金	21,505	21,505	21,505	—	—	—	—	—
1年以内返済予定の長期借入金	1,010	1,010	1,010	—	—	—	—	—
長期借入金	18,600	19,204	248	248	18,706	—	—	—
その他	109	109	53	27	27	1	—	—
デリバティブ金融負債								
商品デリバティブ	455	455	455	—	—	—	—	—
金利通貨スワップ	1,696	1,696	33	33	1,628	—	—	—
合計	57,556	58,161	37,487	310	20,362	1	—	—

(注) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しております。

当連結会計年度（2019年3月31日）

	帳簿価額	契約上の金額	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円	百万円
非デリバティブ金融負債								
営業債務及びその他の債務	17,169	17,169	17,169	—	—	—	—	—
短期借入金	44,712	44,712	44,712	—	—	—	—	—
長期借入金	19,085	19,577	358	19,218	—	—	—	—
その他	220	220	98	60	41	17	2	—
デリバティブ金融負債								
商品デリバティブ	1,445	1,445	1,445	—	—	—	—	—
金利通貨スワップ	1,163	1,163	33	1,129	—	—	—	—
合計	83,796	84,288	63,818	20,408	41	17	2	—

(注) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しております。

(5) 為替リスク管理

当社グループは、グローバルに事業を展開していることから、外貨建の取引について為替変動リスクに晒されております。

当社グループは、金額的に重要で、かつ、取引が個別に認識できる一部の外貨建取引について、内規に基づき、ヘッジ対象に係る為替変動リスクを一定の範囲内でヘッジしております。

したがって、為替変動リスクに晒されているエクスポージャーは僅少であり、当社グループにとって重要性はないと判断しております。

(6) 金利リスク管理

金利リスクは、市場金利の変動により、金融商品の公正価値もしくは金融商品から生じる将来キャッシュ・フローが変動するリスクとして定義されております。当社グループの金利リスクのエクスポージャーは、主に借入金などの債務及び利付預金などの債権に関連しております。利息の金額は市場金利の変動に影響を受けるため、当社グループは、利息の将来キャッシュ・フローが変動する金利リスクに晒されております。

当社グループは、借入金に係る支払金利の変動リスクを抑制するために、金利スワップ取引を利用し、キャッシュ・フローの安定化を図っております。

したがって、金利の変動に伴う利息支払額の変動が当社グループに与える影響は小さく、金利リスクは当社グループにとって重要性はないと判断しております。

(7) 市場価格の変動リスク管理

商品価格変動リスク

当社グループの「貴金属事業」における主力製品である貴金属及び希少金属は、国際市場で取引されており、その価格は、供給国及び需要国の政治経済動向、為替相場等による商品価格リスクに晒されております。

当社グループは、相場変動等による商品価格リスクに対するヘッジ手段として、商品先渡契約等のデリバティブ取引の利用による商品価格リスクの軽減に努めています。

したがって、商品価格変動リスクに晒されているエクスポージャーは僅少であり、当社グループにとって重要性はないと判断しております。

(8) 金融商品の公正価値

金融商品の帳簿価額と公正価値は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)	
	帳簿価額	公正価値	帳簿価額	公正価値
	百万円	百万円	百万円	百万円
金融資産：				
償却原価で測定する金融資産				
現金及び現金同等物	24,140	24,140	16,297	16,297
営業債権及びその他の債権	36,973	36,973	66,489	66,489
その他	427	427	451	451
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産				
その他の金融資産	110	110	72	72
ヘッジ手段として指定された金融資産				
デリバティブ	659	659	364	364
合計	62,311	62,311	83,674	83,674
金融負債：				
償却原価で測定する金融負債				
営業債務及びその他の債務	14,179	14,179	17,169	17,169
借入金	41,115	41,175	63,798	63,854
その他	109	109	220	220
ヘッジ手段として指定された金融負債				
デリバティブ	2,151	2,151	2,608	2,608
合計	57,556	57,616	83,796	83,853

金融商品の公正価値の算定方法は以下のとおりであります。

(償却原価で測定する金融資産)

主に現金及び現金同等物、営業債権にて構成されております。

これらは短期間で決済されるものであるため、帳簿価額が公正価値の合理的な近似値となっております。

(その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資産)

主に上場株式により構成されております。

上場株式の公正価値については、期末日の市場価格によって算定しております。

(ヘッジ手段として指定された金融資産、ヘッジ手段として指定された金融負債)

主にデリバティブにより構成されております。

デリバティブは、取引先金融機関から提示された価格等に基づいて算定しております。

(償却原価で測定する金融負債)

主に営業債務・借入金により構成されております。

営業債務は短期間で決済されるものであるため、帳簿価額が公正価値の合理的な近似値となっております。

借入金は、将来キャッシュ・フローを新規に同様の契約を実行した場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

公正価値で測定される金融商品について、測定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じた公正価値測定額を、レベル1からレベル3まで分類しております。

レベル1：活発な市場における同一の資産又は負債の（無調整の）市場価格

レベル2：レベル1以外の、観察可能な価格を直接又は間接的に使用して算出された公正価値

レベル3：観察不能なインプットを含む評価技法から算出された公正価値

公正価値ヒエラルキーのレベル間の振替は、振替を生じさせた事象又は状況の変化が生じた日に認識しております。

前連結会計年度（2018年3月31日）

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
	百万円	百万円	百万円	百万円
金融資産：				
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産				
上場株式	109	—	—	109
非上場株式	—	—	0	0
ヘッジ手段として指定された金融資産				
デリバティブ	—	659	—	659
合計	109	659	0	770
金融負債：				
ヘッジ手段として指定された金融負債				
デリバティブ	—	2,151	—	2,151
合計	—	2,151	—	2,151

当連結会計年度（2019年3月31日）

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
	百万円	百万円	百万円	百万円
金融資産：				
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産				
上場株式	71	—	—	71
非上場株式	—	—	0	0
ヘッジ手段として指定された金融資産				
デリバティブ	—	364	—	364
合計	71	364	0	436
金融負債：				
ヘッジ手段として指定された金融負債				
デリバティブ	—	2,608	—	2,608
合計	—	2,608	—	2,608

前連結会計年度及び当連結会計年度において、レベル1と2間の振替はありませんでした。

前連結会計年度及び当連結会計年度において、レベル3に区分される金融資産についての重要な増減はありません。

(9) デリバティブ金融商品

キャッシュ・フロー・ヘッジ

当社グループは、金利リスクや商品価格リスクをヘッジするために金利スワップや商品先渡契約を利用しております。

キャッシュ・フロー・ヘッジとして指定されたデリバティブ取引の公正価値の変動は、その他の包括利益として認識し、その他の資本の構成要素に含まれており、ヘッジ対象が純損益に認識された時点で純損益へ振り替えております。

当連結会計年度末において、キャッシュ・フローが発生すると見込まれる期間及びそれらが純損益に影響を与えることになると見込まれる期間は1年から2年であります。

前連結会計年度末及び当連結会計年度末における、ヘッジ手段として指定されたデリバティブは以下のとおりであります。

前連結会計年度（2018年3月31日）

	ヘッジ手段の 想定元本	ヘッジ手段の帳簿価額		ヘッジ手段の 連結財政状態計算書 上の表示科目	ヘッジ非有効部分の 計算に用いた 公正価値変動
	百万円	資産 百万円	負債 百万円		
金利通貨リスク					
金利通貨スワップ	12,304	—	1,696	その他の金融負債 (非流動)	—
商品価格リスク					
商品先渡契約	42,880	659	455	その他の金融資産 (流動) その他の金融負債 (流動)	—
合計	55,184	659	2,151		—

当連結会計年度（2019年3月31日）

	ヘッジ手段の 想定元本	ヘッジ手段の帳簿価額		ヘッジ手段の 連結財政状態計算書 上の表示科目	ヘッジ非有効部分の 計算に用いた 公正価値変動
	百万円	資産 百万円	負債 百万円		
金利通貨リスク					
金利通貨スワップ	12,304	—	1,163	その他の金融負債 (非流動)	—
商品価格リスク					
商品先渡契約	72,091	364	1,445	その他の金融資産 (流動) その他の金融負債 (流動)	—
合計	84,395	364	2,608		—

前連結会計年度末及び当連結会計年度末における、ヘッジ対象として指定された資産又は負債は以下のとおりであります。

前連結会計年度（2018年3月31日）

	ヘッジ非有効部分の計算に 用いた公正価値変動	キャッシュ・フロー・ヘッジ 剰余金
金利通貨リスク		
借入金	—	△37
商品価格リスク		
棚卸資産	—	2
合計	—	△34

当連結会計年度（2019年3月31日）

	ヘッジ非有効部分の計算に 用いた公正価値変動	キャッシュ・フロー・ヘッジ 剰余金
金利通貨リスク		
借入金	—	△10
商品価格リスク		
棚卸資産	—	△1,192
合計	—	△1,203

前連結会計年度及び当連結会計年度における、ヘッジ会計の適用による連結損益計算書への影響は以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

	その他の包括 利益に認識 されたヘッジ 手段の価値変動 (注)	純損益に認識 した非有効部分	純損益における 表示科目 (ヘッジ 非有効部分 を含む)	キャッシュ・ フロー・ヘッジ 剰余金から 純損益に 振り替えた金額 (注)	振替により 純損益における 影響を受けた 表示科目
	百万円	百万円		百万円	
金利通貨リスク					
金利通貨スワップ	73	—	—	△741	金融費用
商品価格リスク					
商品先渡契約	269	—	—	△1,758	売上収益
合計	342	—	—	△2,499	

(注) 税効果調整前の金額であります。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

	その他の包括 利益に認識 されたヘッジ 手段の価値変動 (注)	純損益に認識 した非有効部分	純損益における 表示科目 (ヘッジ 非有効部分 を含む)	キャッシュ・ フロー・ヘッジ 剰余金から 純損益に 振り替えた金額 (注)	振替により 純損益における 影響を受けた 表示科目
	百万円	百万円		百万円	
金利通貨リスク					
金利通貨スワップ	38	—	—	△1,142	金融費用
商品価格リスク					
商品先渡契約	△1,285	—	—	△1,682	売上収益
合計	△1,246	—	—	△2,825	

(注) 税効果調整前の金額であります。

ヘッジ手段であるデリバティブの公正価値全額は、ヘッジ対象の満期までの期間が12ヶ月を超える場合には非流動資産又は負債に、また12ヶ月を超えない場合には流動資産又は負債に分類しております。

32. 重要な子会社

当連結会計年度末の当社グループの子会社の内訳は、以下のとおりであります。

名称	所在地	報告セグメント	議決権の所有割合 (%)
アサヒブリテック株式会社	日本	貴金属 環境保全	100.0
ジャパンウェスト株式会社	日本	環境保全	100.0
JWケミテック株式会社	日本	環境保全	100.0
株式会社太陽化学	日本	環境保全	100.0
株式会社イヨテック	日本	環境保全	100.0
富士炉材株式会社	日本	環境保全	100.0
JWガラスリサイクル株式会社	日本	環境保全	100.0
エコマックス株式会社	日本	環境保全	100.0
アサヒライフ&ヘルス株式会社	日本	ライフ&ヘルス	100.0
株式会社インターセントラル	日本	ライフ&ヘルス	100.0
紘永工業株式会社	日本	ライフ&ヘルス	100.0
株式会社フジ医療器	日本	ライフ&ヘルス	100.0
ASAHI G&S SDN. BHD.	マレーシア	貴金属	100.0
上海朝日浦力環境科技有限公司	中国	貴金属	100.0
韓国アサヒブリテック株式会社	韓国	貴金属	100.0
朝日浦力科技股份有限公司	台湾	貴金属	100.0
アサヒアメリカホールディングス株式会社	日本	貴金属	100.0
Asahi Refining USA Inc.	米国	貴金属	100.0
Asahi Refining Florida Inc.	米国	貴金属	100.0
Asahi Refining Canada Ltd.	カナダ	貴金属	100.0
その他3社			

33. 関連当事者

(1) 関連当事者との取引

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

当社グループと関連当事者との間の取引及び債権債務の残高で重要なものはありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

当社グループと関連当事者との間の取引及び債権債務の残高で重要なものはありません。

(2) 主要な経営幹部に対する報酬

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	百万円	百万円
短期従業員給付	197	240
株式に基づく報酬	16	25
合計	214	266

34. 偶発債務
該当事項はありません。

35. 後発事象
該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上収益(百万円)	31,914	60,380	91,294	128,669
税引前四半期利益又は税引前利益(百万円)	3,345	6,486	9,221	13,405
親会社の所有者に帰属する四半期(当期)利益(百万円)	2,343	4,541	6,273	9,000
基本的1株当たり四半期(当期)利益(円)	59.93	114.84	158.88	228.14

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
基本的1株当たり四半期利益(円)	59.93	54.91	44.04	69.26

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	13,171	9,863
前払費用	0	0
関係会社短期貸付金	41,678	48,061
未収入金	7	18
未収還付法人税等	1,234	1,324
その他	2	2
貸倒引当金	△16,709	△17,142
流動資産合計	39,385	42,127
固定資産		
有形固定資産		
建物	4,236	4,219
減価償却累計額	△1,767	△1,915
建物（純額）	2,469	2,304
工具、器具及び備品	9	9
減価償却累計額	△7	△7
工具、器具及び備品（純額）	1	1
土地	3,373	3,355
有形固定資産合計	5,844	5,660
無形固定資産		
ソフトウェア	29	30
無形固定資産合計	29	30
投資その他の資産		
関係会社株式	27,509	27,519
繰延税金資産	49	55
その他	0	0
投資その他の資産合計	27,559	27,574
固定資産合計	33,432	33,266
資産合計	72,818	75,394

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
短期借入金	※1 100	※1 100
1年内返済予定の長期借入金	10	—
未払金	37	30
未払費用	32	26
賞与引当金	18	16
役員賞与引当金	24	38
役員株式給付引当金	12	—
株式給付引当金	12	—
その他	12	12
流動負債合計	258	223
固定負債		
長期借入金	20,304	20,304
役員株式給付引当金	—	28
株式給付引当金	—	12
その他	13	42
固定負債合計	20,317	20,387
負債合計	20,576	20,611
純資産の部		
株主資本		
資本金	7,790	7,790
資本剰余金		
資本準備金	9,364	9,364
その他資本剰余金	18,299	18,287
資本剰余金合計	27,663	27,651
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	17,174	20,295
利益剰余金合計	17,174	20,295
自己株式	△386	△955
株主資本合計	52,241	54,782
純資産合計	52,241	54,782
負債純資産合計	72,818	75,394

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業収益		
関係会社受取配当金	※1 6,700	※1 7,100
関係会社受入手数料	※1 856	※1 985
不動産賃貸収入	※1 347	※1 344
営業収益合計	7,903	8,429
営業費用		
販売費及び一般管理費	※2 1,092	※2 1,385
営業費用合計	1,092	1,385
営業利益	6,810	7,044
営業外収益		
受取利息	※1 121	※1 151
受取保証料	※1 123	※1 162
その他	5	4
営業外収益合計	250	317
営業外費用		
支払利息	26	26
株式交付費	48	—
為替差損	0	—
貸倒引当金繰入額	※5 55	※5 433
営業外費用合計	130	459
経常利益	6,930	6,902
特別利益		
固定資産売却益	—	※3 2
特別利益合計	—	2
特別損失		
固定資産除却損	—	※4 0
減損損失	27	—
特別損失合計	27	0
税引前当期純利益	6,903	6,905
法人税、住民税及び事業税	112	86
法人税等調整額	△15	△5
法人税等合計	96	80
当期純利益	6,806	6,824

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本						純資産合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金	自己株式	株主資本合計	
		資本準備金	その他資本剰余金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金			
当期首残高	4,480	6,054	17,032	12,337	△5,371	34,533	34,533
当期変動額							
新株の発行	3,309	3,309				6,619	6,619
剰余金の配当				△1,969		△1,969	△1,969
当期純利益				6,806		6,806	6,806
自己株式の取得					△0	△0	△0
自己株式の処分			1,266		4,985	6,252	6,252
当期変動額合計	3,309	3,309	1,266	4,837	4,984	17,708	17,708
当期末残高	7,790	9,364	18,299	17,174	△386	52,241	52,241

当事業年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本						純資産合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金	自己株式	株主資本合計	
		資本準備金	その他資本剰余金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金			
当期首残高	7,790	9,364	18,299	17,174	△386	52,241	52,241
当期変動額							
新株の発行							
剰余金の配当				△3,703		△3,703	△3,703
当期純利益				6,824		6,824	6,824
自己株式の取得					△744	△744	△744
自己株式の処分			△11		175	163	163
当期変動額合計	—	—	△11	3,121	△568	2,540	2,540
当期末残高	7,790	9,364	18,287	20,295	△955	54,782	54,782

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式

移動平均法による原価法

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

定額法

取得価額が100千円以上200千円未満の資産（少額減価償却資産）については、3年均等償却

(2) 無形固定資産

定額法

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年以内）に基づいております。

3. 引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、貸倒懸念債権等特定の債権について個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

役員賞与引当金

役員への賞与の支給に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

役員株式給付引当金

株式交付規程に基づく取締役への当社株式の交付に備えるため、当事業年度末における株式給付債務の見込額に基づき計上しております。

株式給付引当金

株式交付規程に基づく従業員への当社株式の交付に備えるため、当事業年度末における株式給付債務の見込額に基づき計上しております。

4. 繰延資産の処理方法

株式交付費は、支出時に全額費用として処理しております。

5. ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理を採用しております。また、為替変動リスクのヘッジについて振当処理の要件を充たしている場合には振当処理を、金利スワップについて特例処理の条件を充たしている場合には特例処理を採用しております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段

通貨スワップ、金利スワップ

ヘッジ対象

外貨建長期借入金の元利金支払額

(3) ヘッジ方針

内規に基づき、為替変動及び金利変動によるリスクをヘッジしております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象とヘッジ手段の相場変動の累計を比較し、両者の変動額を基礎にして評価しております。なお、振当処理によっている通貨スワップ、特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価を省略しております。

6. 消費税等の会計処理方法

消費税等の会計処理は、税抜方式によっております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。）を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」36百万円は、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」49百万円に含めて表示しております。

(追加情報)

(株式付与ESOP信託)

当社は当社従業員に信託を通じて自社の株式を交付する取引を行っております。

(1) 取引の概要

当社は、当社従業員の当社の業績や株価への意識を高めることにより、業績向上を目指した業務遂行を一層促進するとともに、中長期的な企業価値向上を図ることを目的としたインセンティブ・プランとして、2015年6月に株式付与ESOP信託を導入いたしました。

当社が、本制度の対象者である当社従業員のうち一定の要件を充足する者を受益者として、当社株式の取得資金を拠出することにより信託を設定します。当該信託は予め定める株式交付規程に基づき当社従業員に交付すると見込まれる数の当社株式を、株式市場から予め定める取得期間中に取得します。その後、当該信託は株式交付規程に従い、従業員の業績への貢献度等に応じて、毎年一定の日にポイント数が付与され、「第7次中期経営計画」の達成度に応じた当社株式を従業員へと交付します。当該信託により取得する当社株式の取得資金は全額当社が拠出するため、従業員の負担はありません。

当社は2018年度において、当制度を延長しております。

当社従業員に対して、2018年度から2020年度までの3事業年度を対象とし、各年度の業績目標達成度に応じたポイント数に相当する当社株式が交付されます。

(2) 信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を、信託における帳簿価額（付随費用の金額を除く。）により、純資産の部に自己株式として計上しております。当該自己株式の帳簿価額及び株式数は、当事業年度737百万円、376,600株であります。

(役員向け業績連動型株式報酬制度)

当社は、取締役（社外取締役、非常勤取締役および監査等委員を除く。以下同じ。）に信託を通じて自社の株式を交付する取引を行っております。

(1) 取引の概要

当社は、取締役を対象に、これまで以上に当社の業績向上と企業価値の増大への貢献意識を高めることを目的として、会社業績との連動性が高く、かつ透明性・客観性の高い役員報酬制度として、2015年5月に業績連動型株式報酬制度（以下、「本制度」という。）を導入いたしました。

本制度は、当社が拠出した金銭を原資として信託が組成され、当該信託が取得した当社株式について、業績達成率・役位に応じて付与されるポイント数に相当する株式を当社の取締役に交付する株式報酬制度であります。なお、当社の取締役に当社株式が交付される時期は、原則として2018年8月となります。当社の取締役に付与されるポイント数は、役位に応じて毎年付与されるポイント数を、2015年3月に発表した当社の中期経営計画の達成率に応じて決定された係数で調整することにより算出されます。

当社は2018年度において、当制度を延長しております。

取締役に対して、2018年度から2020年度までの3事業年度を対象とし、各年度の業績目標達成度に応じたポイント数に相当する当社株式が交付されます。

(2) 信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を、信託における帳簿価額（付随費用の金額を除く。）により、純資産の部に自己株式として計上しております。当該自己株式の帳簿価額及び株式数は、当事業年度168百万円、95,500株であります。

(貸借対照表関係)

※1 当座貸越契約

当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行6行と当座貸越契約を締結しております。これら契約に基づく当事業年度末の借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
当座貸越極度額	32,000百万円	32,000百万円
借入実行残高	100	100
差引額	31,900	31,900

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引に係るものが次のとおり含まれております。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
関係会社受取配当金	6,700百万円	7,100百万円
関係会社受入手数料	856	985
不動産賃貸収入	347	344
受取利息	121	148
受取保証料	123	162

※2 販売費及び一般管理費の主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
役員報酬	96百万円	124百万円
給料手当	310	308
役員賞与引当金繰入	4	38
減価償却費	185	180
役員株式給付引当金繰入額	△2	28
株式給付引当金繰入額	△7	12
支払報酬	38	41

なお、全て一般管理費であります。

※3 固定資産売却益の内容は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
土地	－百万円	2百万円
計	－	2

※4 固定資産除却損の内容は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物	一百万円	0百万円
工具、器具及び備品	—	0
計	—	0

※5 貸倒引当金繰入額の内容は次のとおりであります。

子会社への貸倒懸念債権に対し、貸倒引当金繰入額を計上しております。

(有価証券関係)

子会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額27,519百万円、前事業年度の貸借対照表計上額27,509百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
未払事業税	15	15
賞与引当金	5	4
役員賞与引当金	7	11
株式給付引当金	3	3
役員株式給付引当金	—	8
貸倒引当金	5,116	5,249
関係会社株式評価損	3	3
減損損失	13	6
その他	3	4
繰延税金資産小計	5,169	5,307
評価性引当額	△5,119	△5,252
繰延税金資産合計	49	55
繰延税金資産の純額	49	55

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.9%	30.6%
(調整)		
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△30.0	△31.5
交際費等永久損金不算入項目	0.0	0.1
住民税均等割額	0.0	0.0
評価性引当額の増減による影響	0.3	1.9
その他	0.2	△0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	1.4	1.2

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 却累計額又は 償却累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末残 高(百万円)
有形固定資産							
建物	—	—	—	4,219	1,915	164	2,304
工具、器具及び備品	—	—	—	9	7	0	1
土地	—	—	—	3,355	—	—	3,355
有形固定資産計	—	—	—	7,584	1,923	165	5,660
無形固定資産							
ソフトウェア	—	—	—	213	182	15	30
無形固定資産計	—	—	—	213	182	15	30

- (注) 1. 有形固定資産の増加額及び減少額がいずれも有形固定資産の総額の100分の5以下であるため、「当期首残高」、「当期増加額」及び「当期減少額」の記載を省略しております。
2. 無形固定資産の金額が、資産の総額の1%以下であるため「当期首残高」、「当期増加額」及び「当期減少額」の記載を省略しております。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	16,709	433	—	—	17,142
賞与引当金	18	16	18	—	16
役員賞与引当金	24	38	24	—	38
役員株式給付引当金	12	28	12	—	28
株式給付引当金	12	12	12	—	12

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 大阪市中央区伏見町三丁目6番3号 三菱UFJ信託銀行株式会社 大阪証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	_____
買取手数料	無料
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、やむを得ない事由により電子公告によること ができない場合は、日本経済新聞に掲載する方法により行う。 [https://www.asahiholdings.com]
株主に対する特典	当社株式1単元(100株)以上保有の株主様に、当社グループ会社製品(指定 製品)を優待価格で販売しております。

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号、第166条第1項に掲げる権利ならびに募集株式または募集新株予約権の割当を受ける権利以外の権利を行使することはできません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第9期）（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）2018年6月20日関東財務局長へ提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年6月20日関東財務局長へ提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第10期第1四半期）（自 2018年4月1日 至 2018年6月30日）2018年8月10日関東財務局長に提出

（第10期第2四半期）（自 2018年7月1日 至 2018年9月30日）2018年11月13日関東財務局長に提出

（第10期第3四半期）（自 2018年10月1日 至 2018年12月31日）2019年2月13日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

2018年6月22日関東財務局長に提出。

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく報告書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月18日

アサヒホールディングス株式会社

取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 竹野 俊成 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 寶野 裕昭 印

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているアサヒホールディングス株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結財政状態計算書、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結持分変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及び連結財務諸表注記について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」第93条の規定により国際会計基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、国際会計基準に準拠して、アサヒホールディングス株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、アサヒホールディングス株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、アサヒホールディングス株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月18日

アサヒホールディングス株式会社

取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 竹野 俊成 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 寶野 裕昭 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているアサヒホールディングス株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第10期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、アサヒホールディングス株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月19日
【会社名】	アサヒホールディングス株式会社
【英訳名】	Asahi Holdings, Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 東浦 知哉
【最高財務責任者の役職氏名】	取締役 小島 周
【本店の所在の場所】	神戸市中央区加納町四丁目4番17号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長東浦知哉及び取締役小島周は、当社及び連結子会社（以下「当社グループ」）の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2019年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しております。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（以下「全社的な内部統制」）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定いたしました。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社グループについて、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定いたしました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社及び連結子会社8社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定いたしました。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の前連結会計年度の売上高の金額が大きい拠点から合算していき、前連結会計年度の連結売上高の概ね2/3に達している事業拠点を「重要な事業拠点」といたしました。選定した重要な事業拠点においては、当社グループの事業目的に大きく関わる勘定科目として、「現金及び預金」「売掛金」「たな卸資産」「売上高」「売上原価」「減価償却費」に至る業務プロセスを評価の対象といたしました。さらに、財務報告への影響を勘案して、重要性の大きい業務プロセスについては、個別に評価の対象に追加いたしました。評価の対象とした業務プロセスについては、それぞれのプロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を選定し、関連文書の閲覧、当該内部統制に係る適切な担当者への質問、業務の観察、内部統制の実施記録の検証等の手続を実施することにより、当該統制上の要点の整備及び運用状況を評価いたしました。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社グループの財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

特記すべき事項はありません。

5 【特記事項】

特記すべき事項はありません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月19日
【会社名】	アサヒホールディングス株式会社
【英訳名】	Asahi Holdings, Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 東浦 知哉
【最高財務責任者の役職氏名】	取締役 小島 周
【本店の所在の場所】	神戸市中央区加納町四丁目4番17号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長東浦知哉及び取締役小島周は、当社の第10期（自2018年4月1日 至2019年3月31日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認しました。

2 【特記事項】

特記すべき事項はありません。